

始

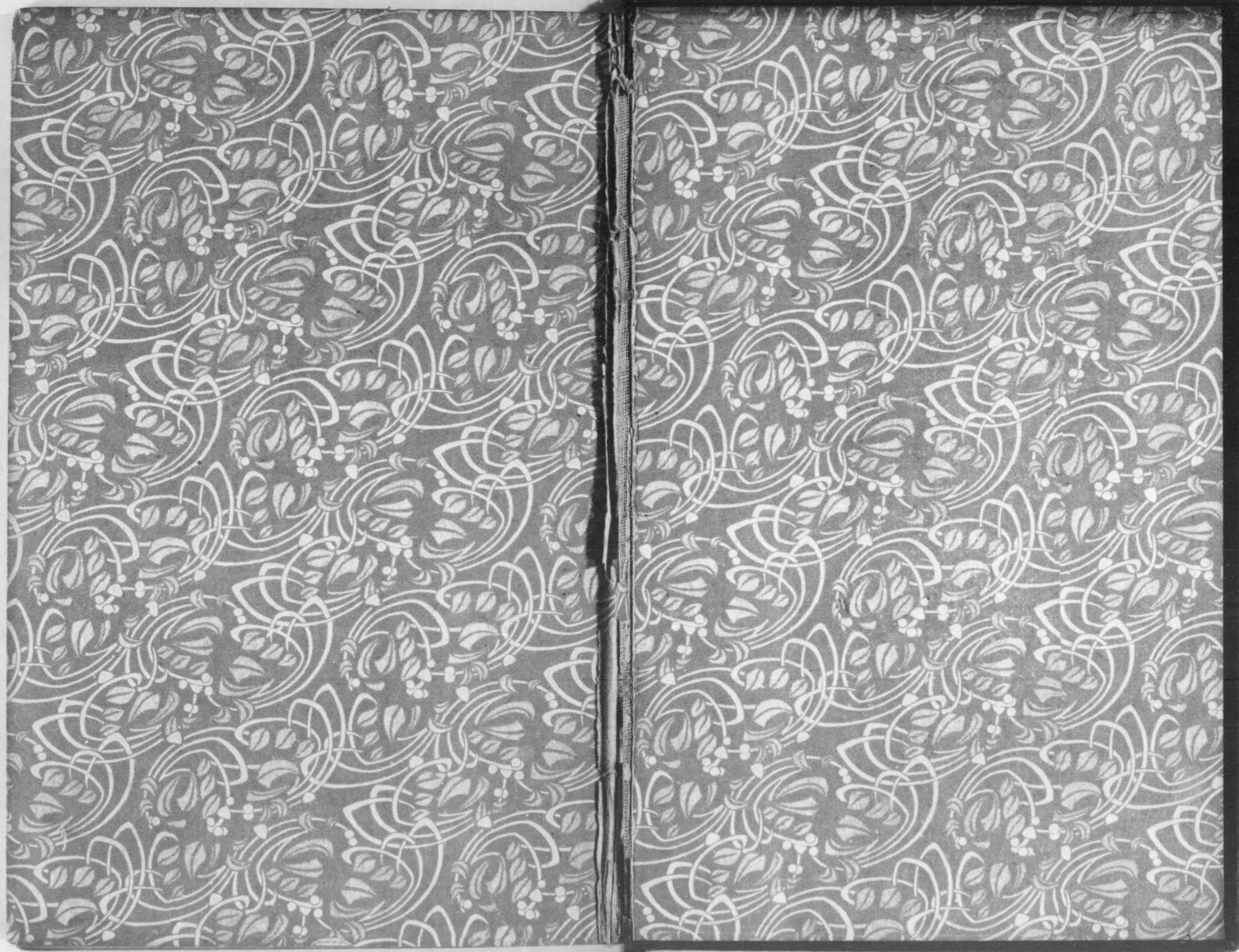


348

307

南洋研究之一
蘭領東印度







寺内伯爵閣下題字
後藤男爵閣下題詩
阪谷男爵閣下序
中山法學士述

南洋研究
究之一
蘭領東印度

東京 有斐閣書齋



著者寄贈本

大正
4.10.21
寄贈

陸子

陸子

陸子

陸子



鵬翼搏
杖搖

石印功百
正石



張四

端牛角上多何
身系且隨鸞九
萬程極目江山
角教氣不私
何國是之明

大正乙卯夏
張代魁字

新平

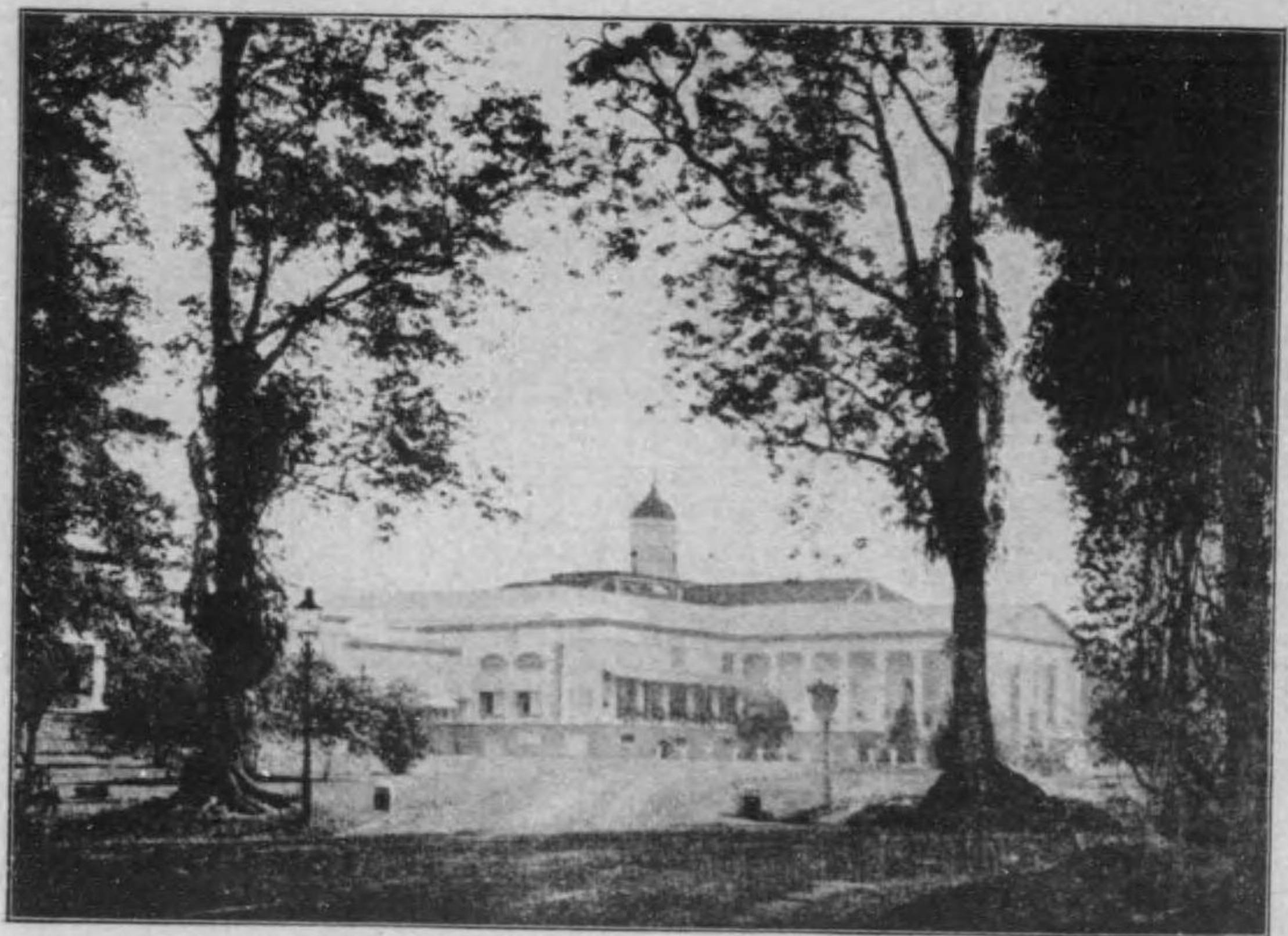


「スラカルタースタン」ノ像

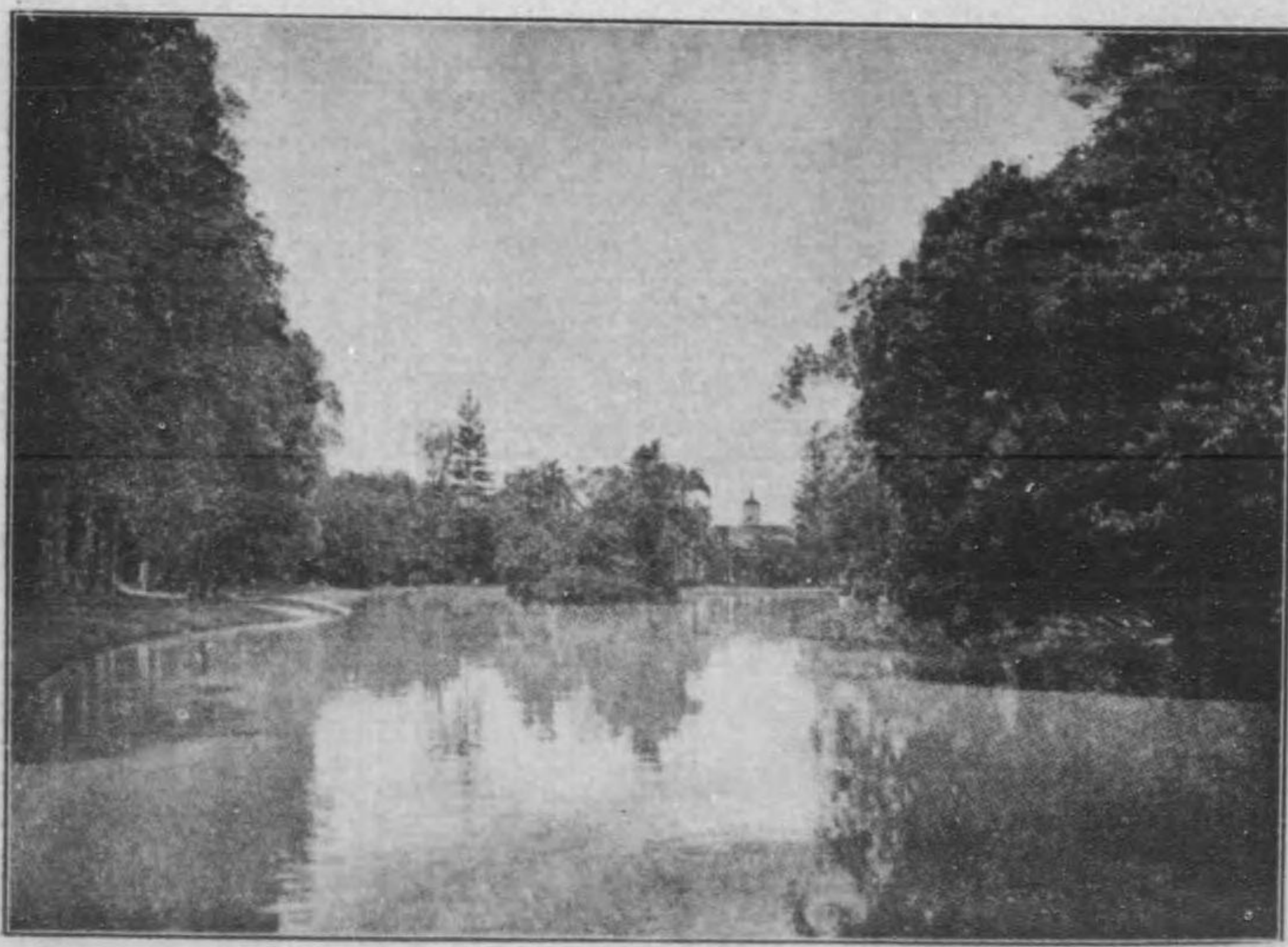


「スルタン」ノ護衛兵指揮官（瓜哇人）





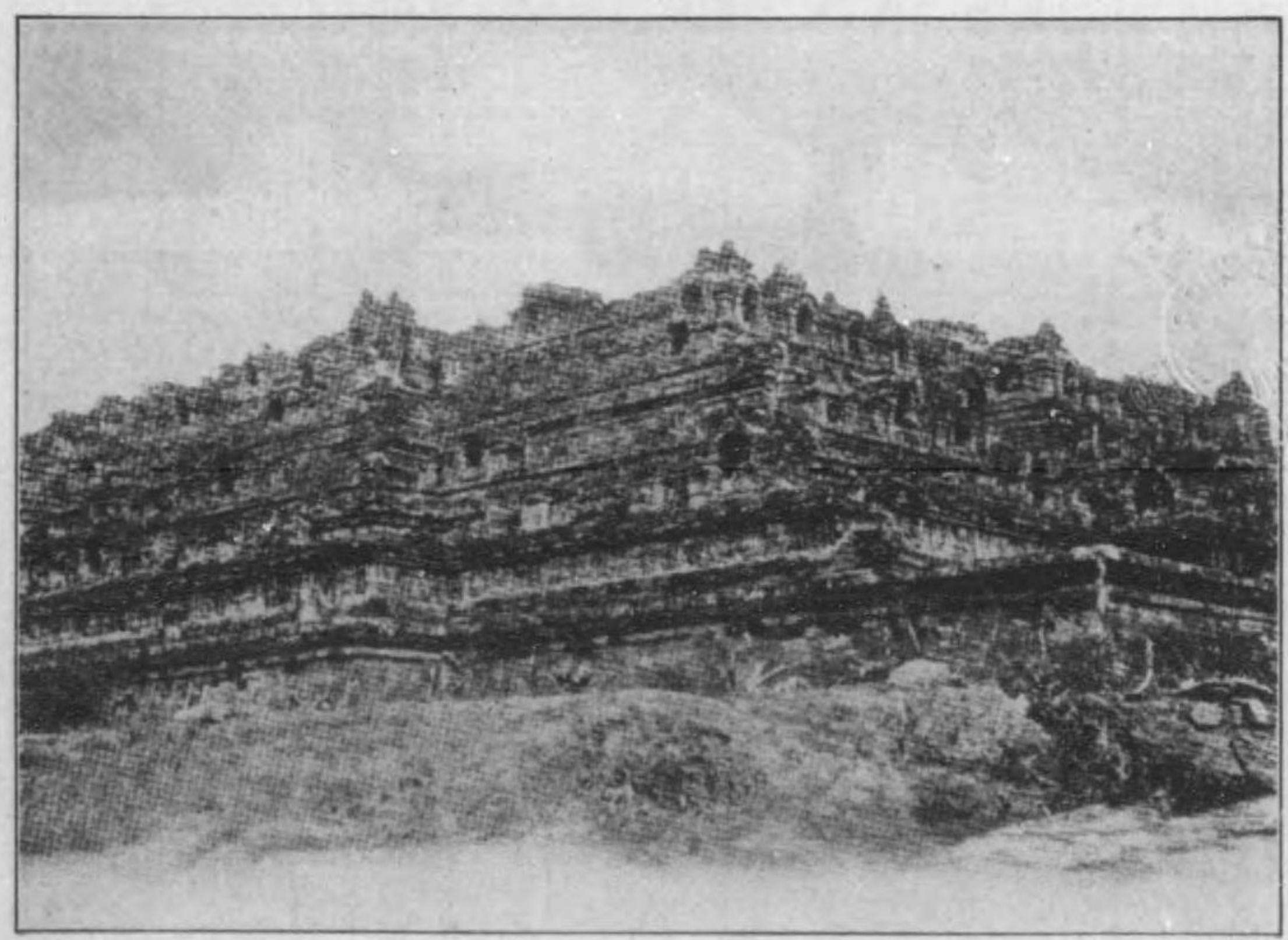
「アイトナンツホルヒ」ニ於ケル關領東印度總督官邸



總督官邸ノ庭園



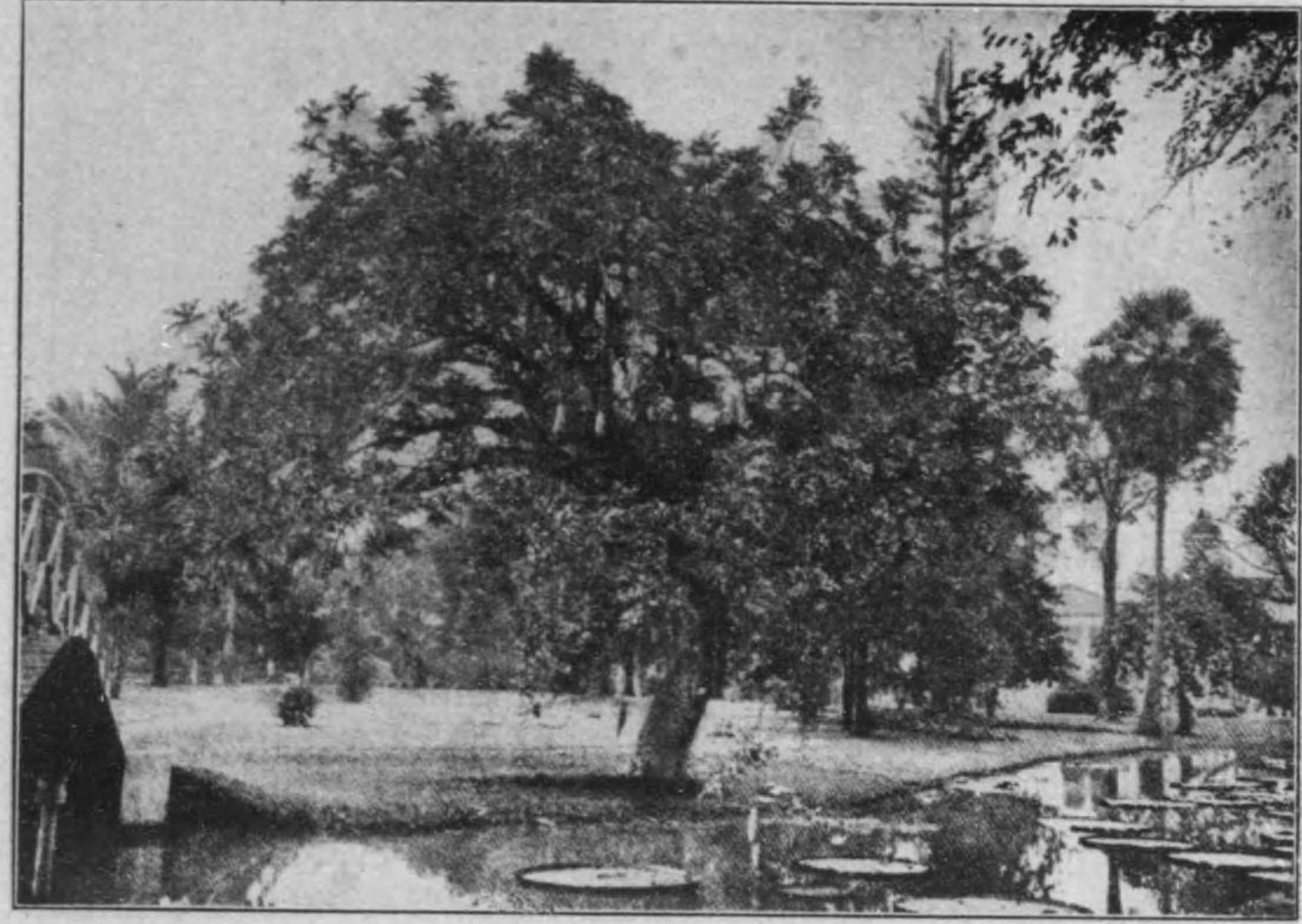
瓜哇「ホロホド」ル大寺院舊蹟ノ一



同上ノ二



「アイトンツォルヒ」大植物苑ノ景色ノ三



「アイトンツォルヒ」大植物苑ノ景色ノ一



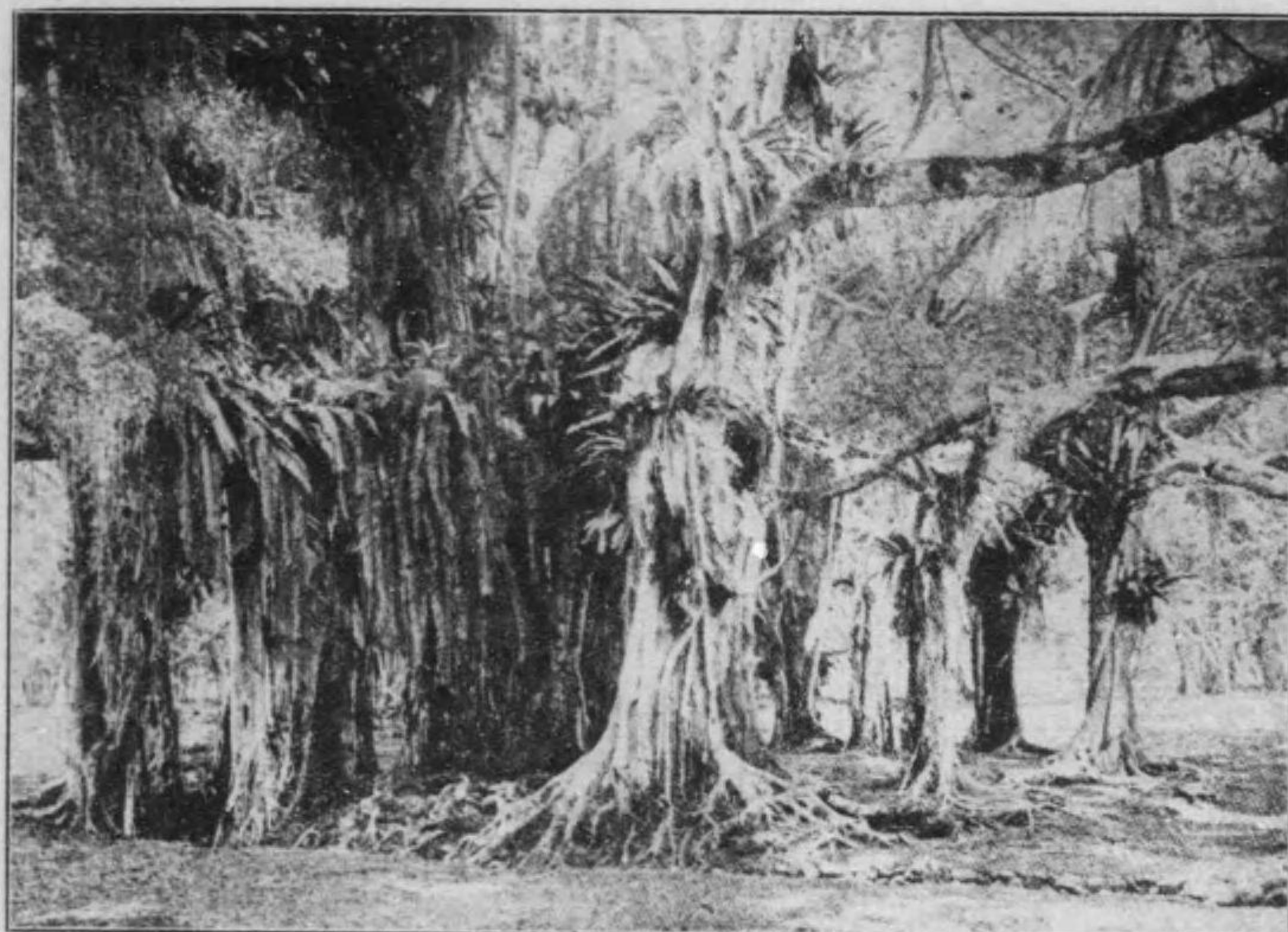
同上ノ四



同上ノ二



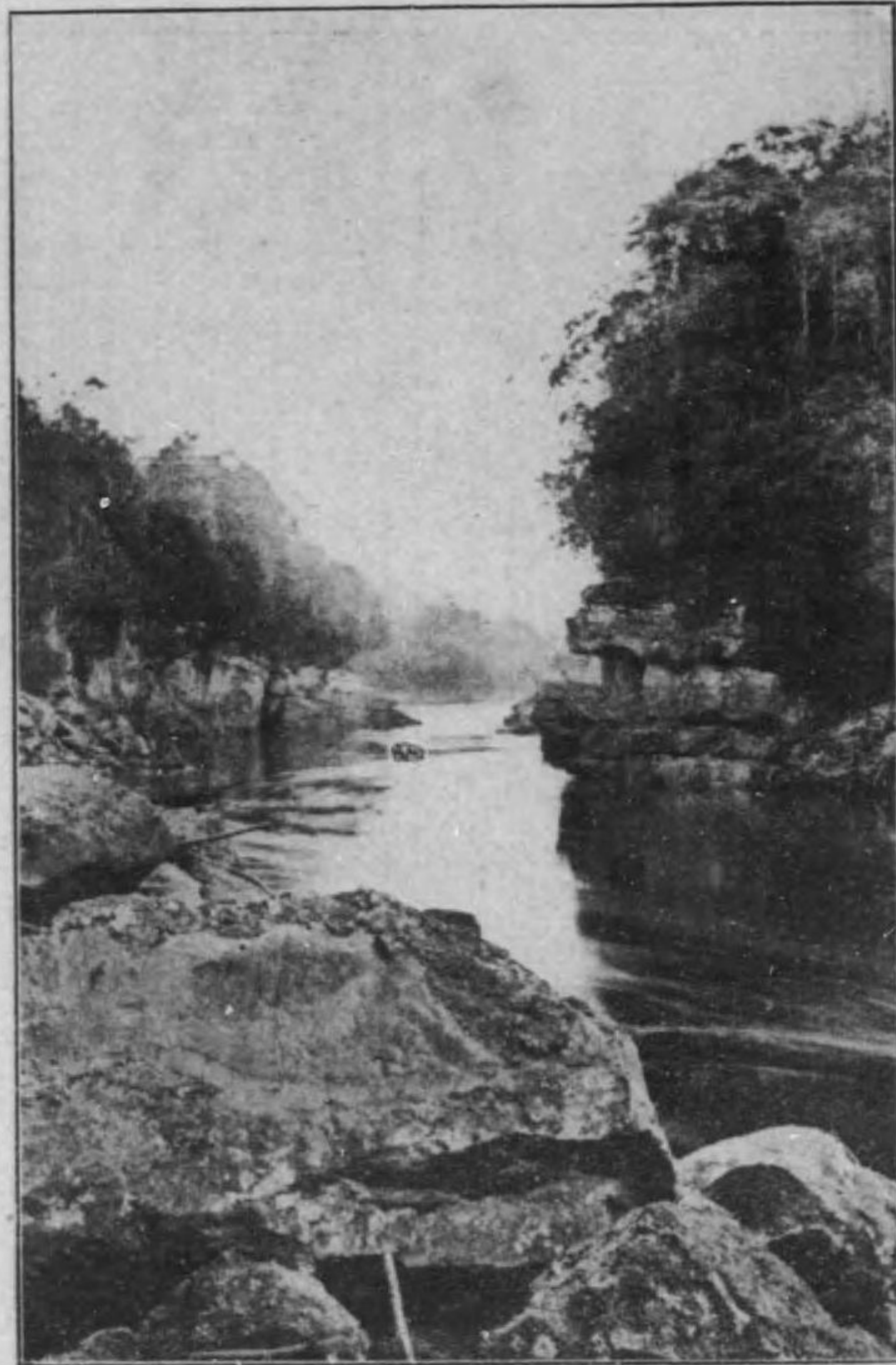
瓜哇噴火ノ山ノ景色



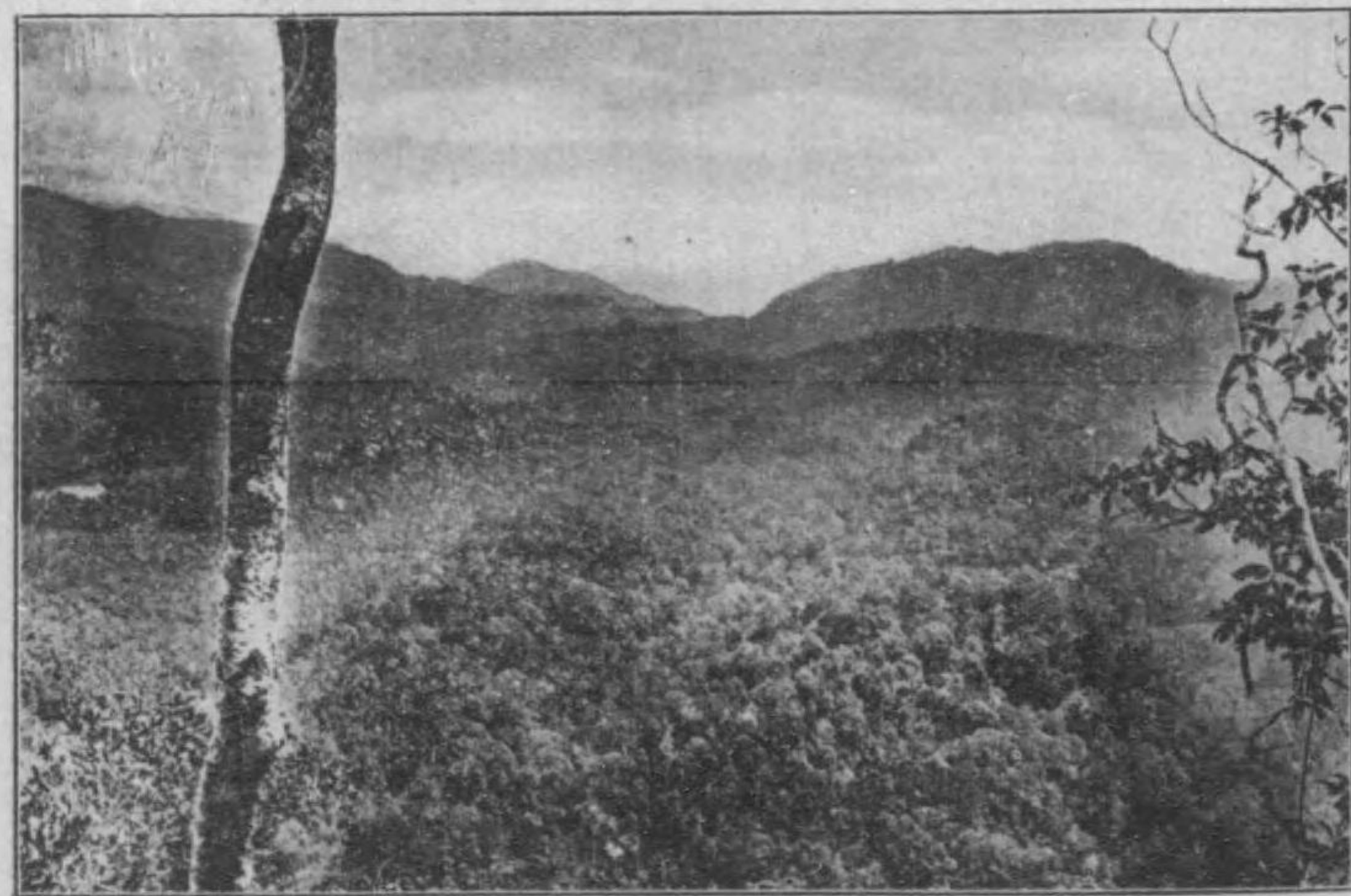
「アイトンツオルヒ」大植物苑ノ景色ノ五



同上ノ六



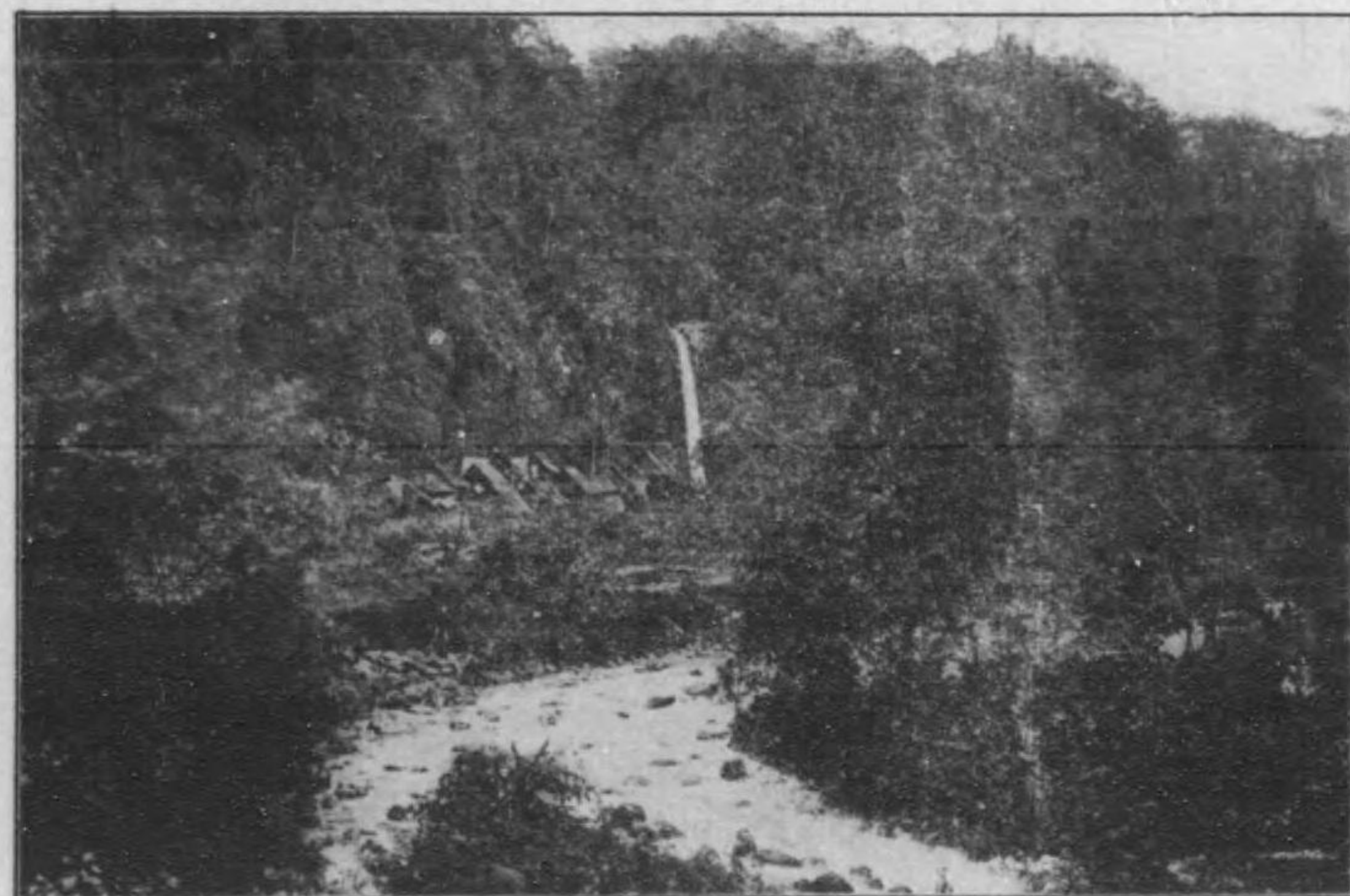
「ホルネオ」森林ノ景色ノ一



同上ノ二

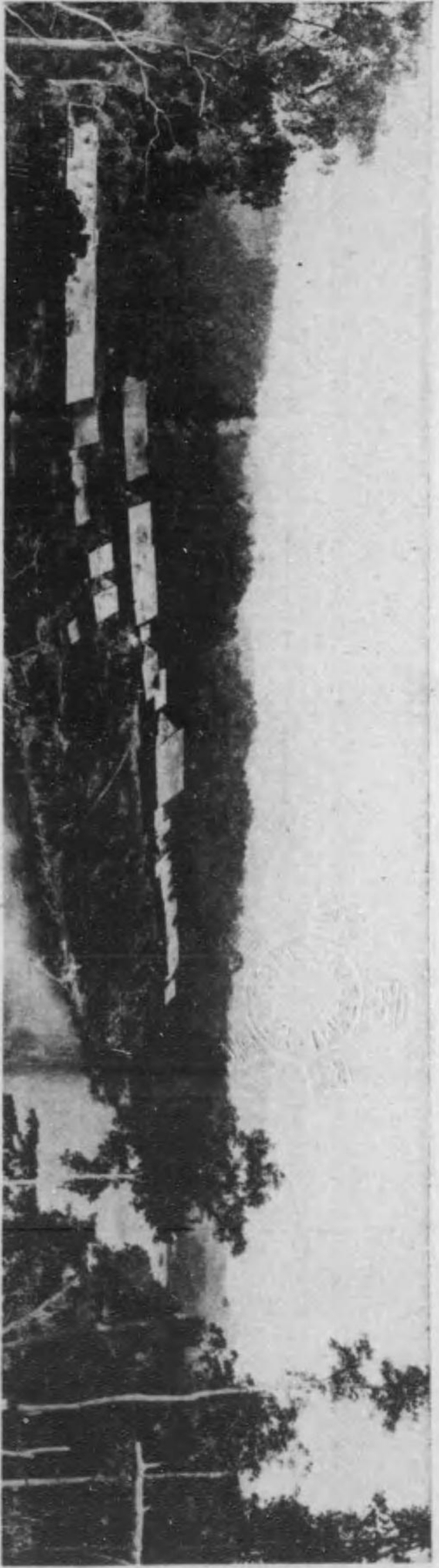


「スマタラ」森林ノ景色ノ一

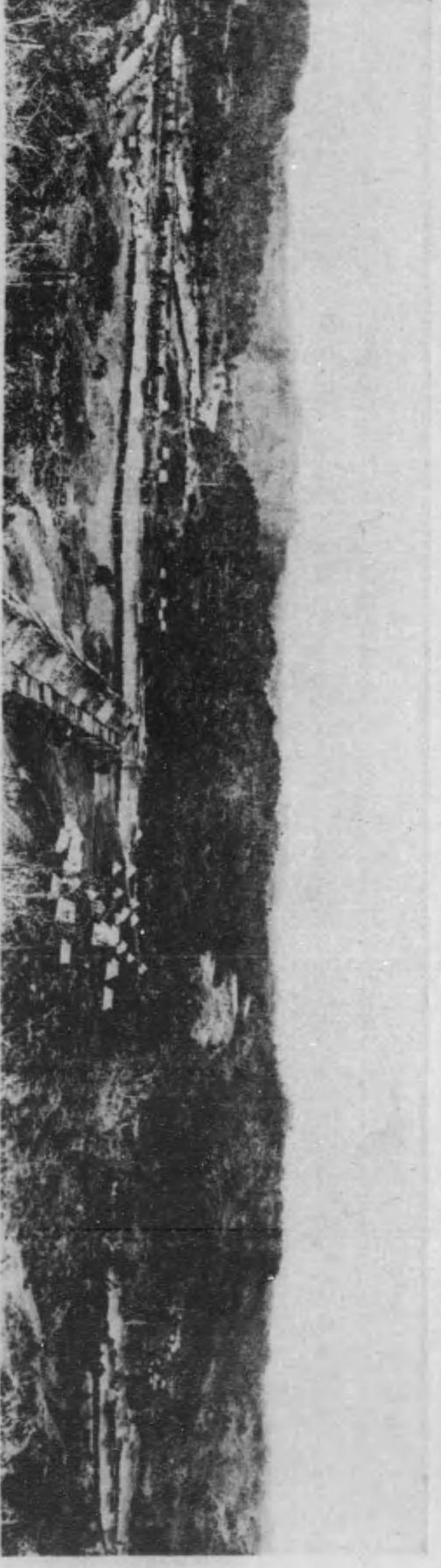


同上ノ二

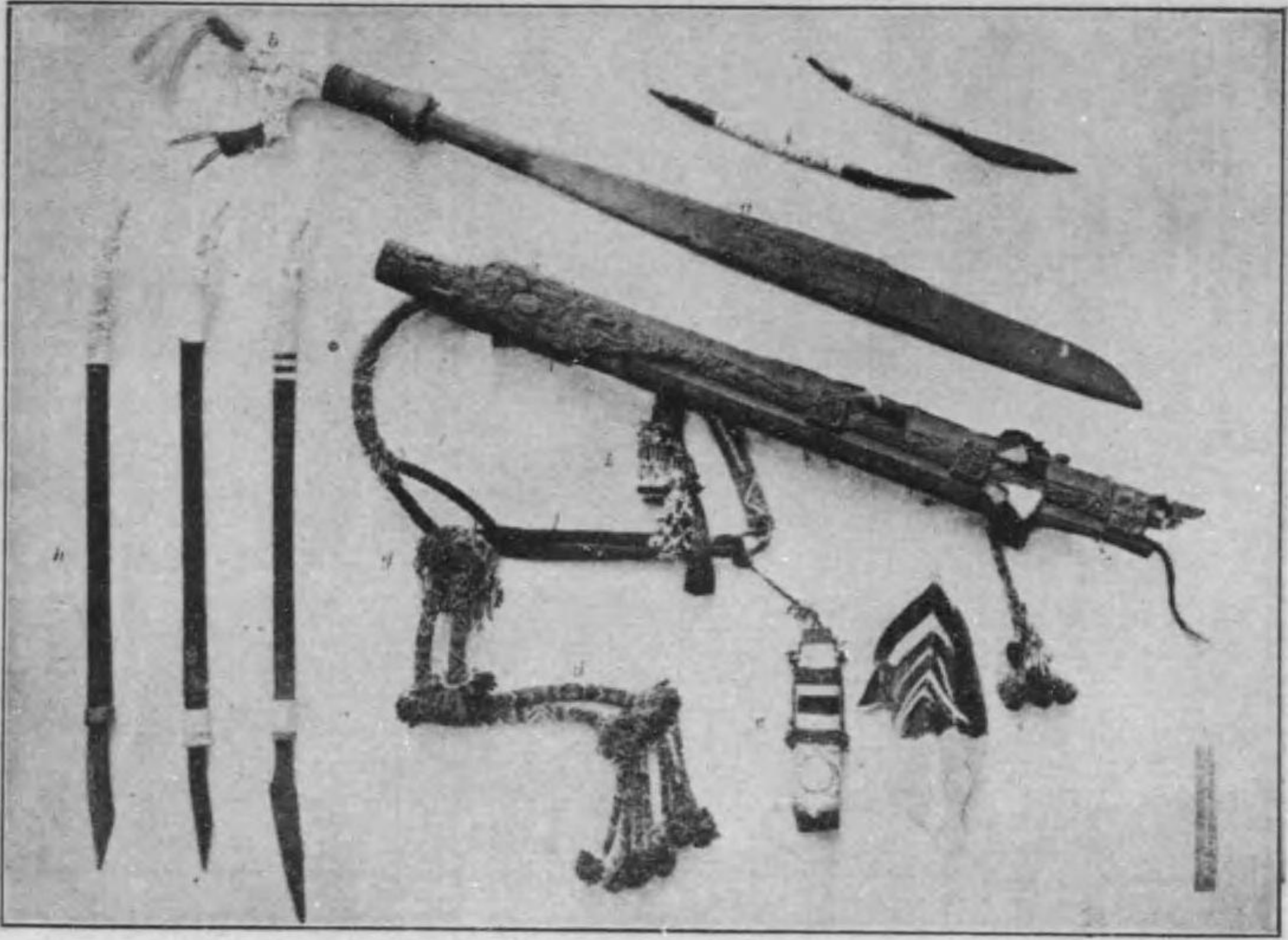
一ノ景風ノ地懸開新レガキルガ



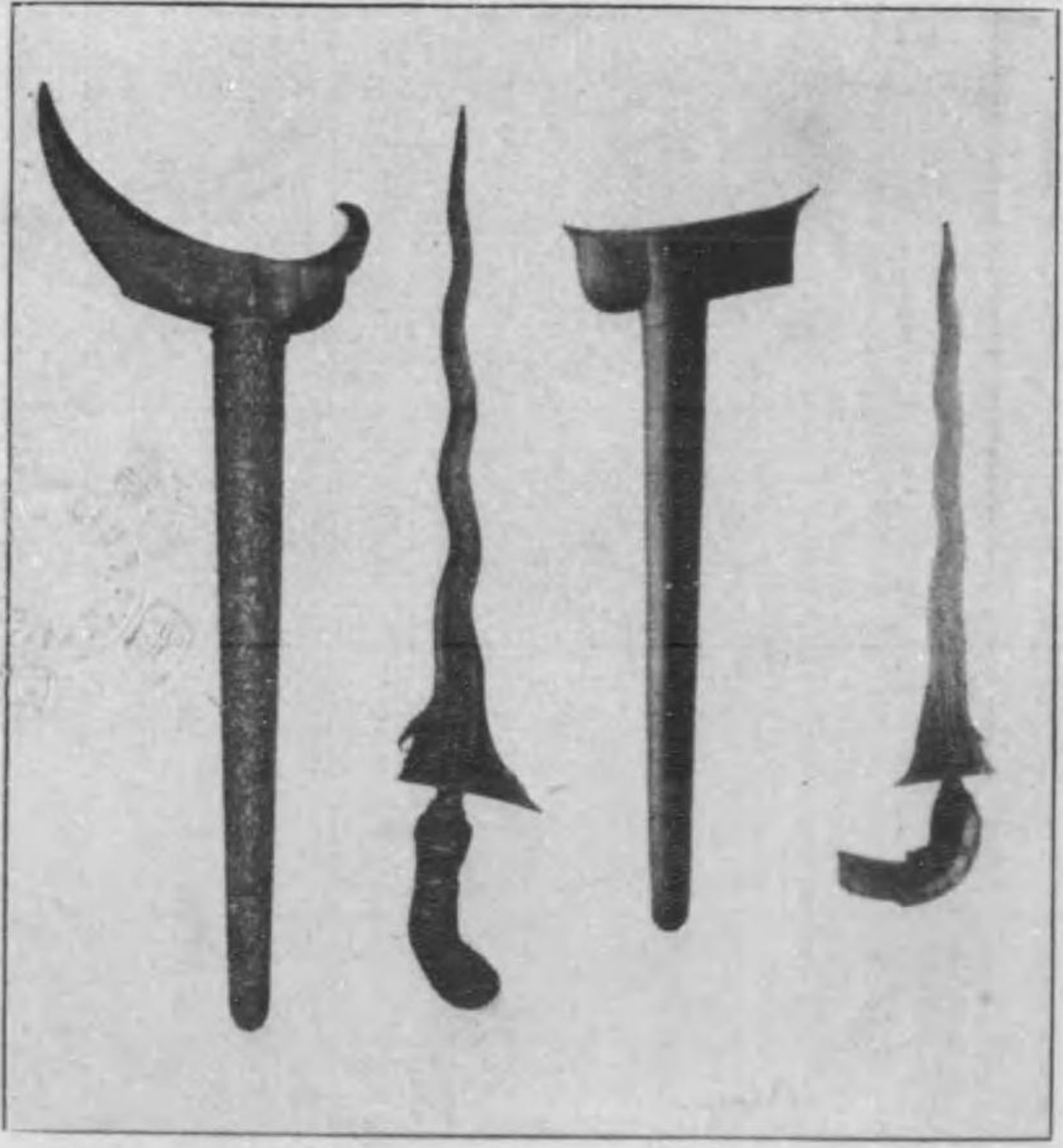
二ノ上同



土人用刀劍ノ一



同上ノ二

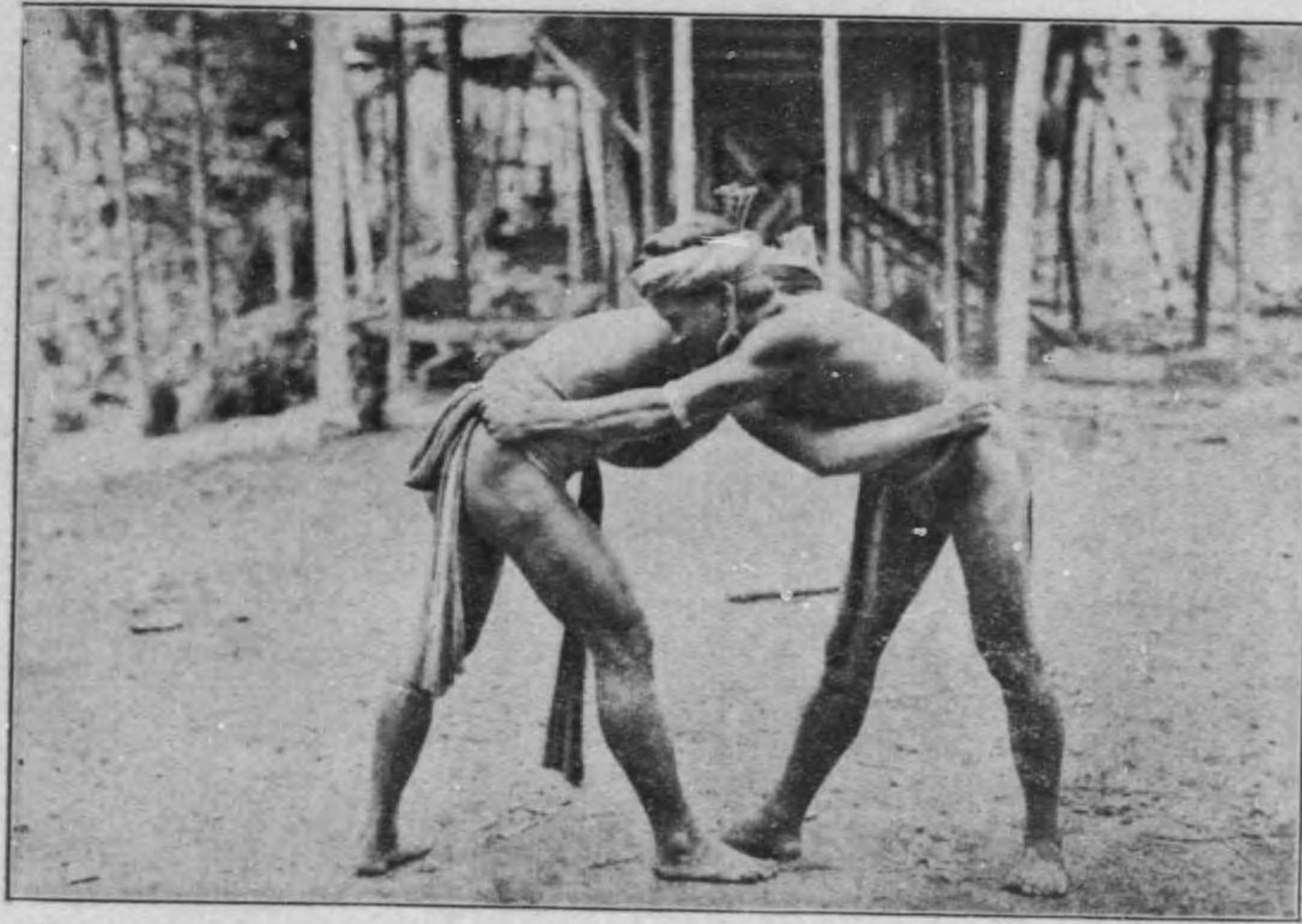




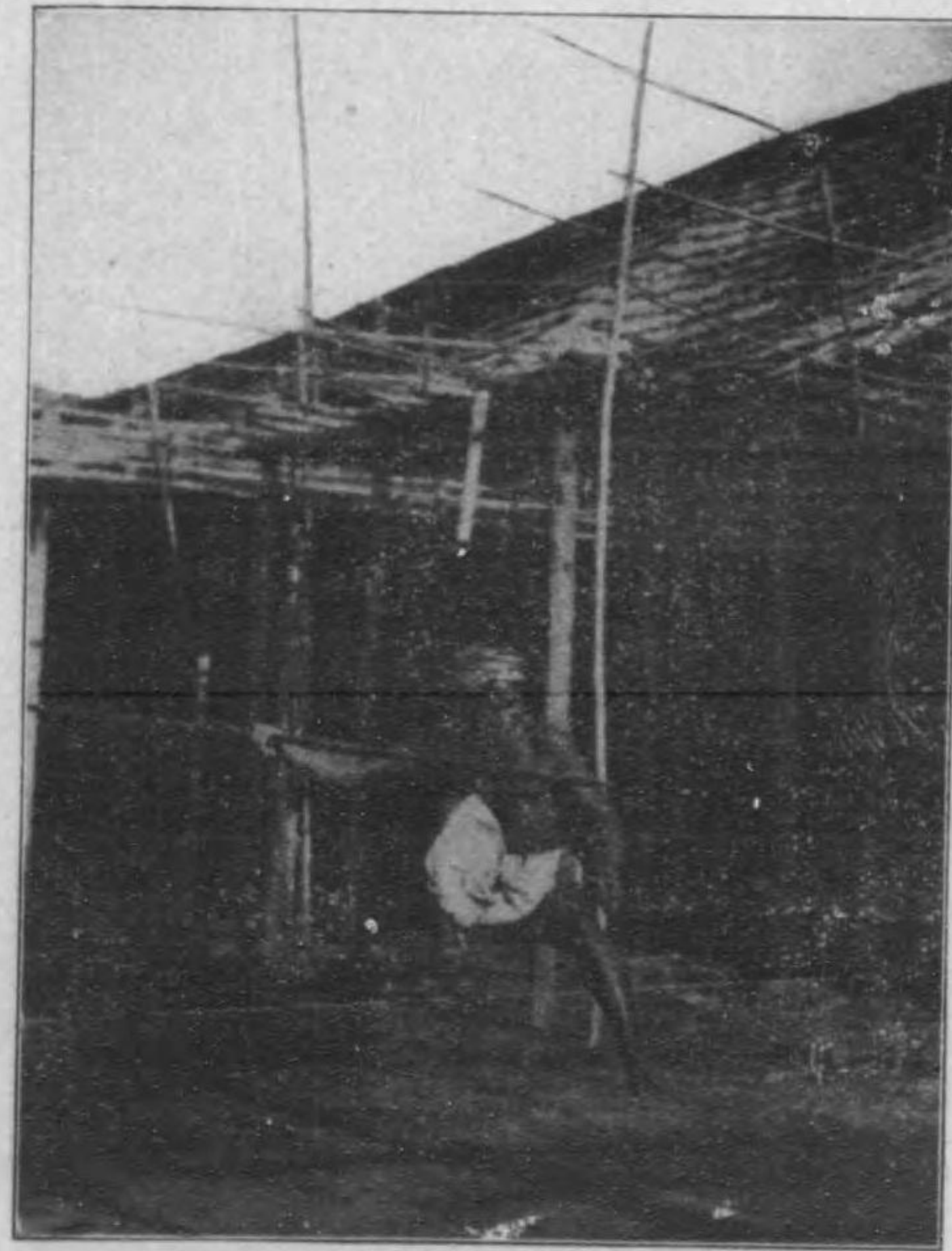
土人安逸ノ圖ノ一



同上ノ二



土人體技ノ一



同上ノ二

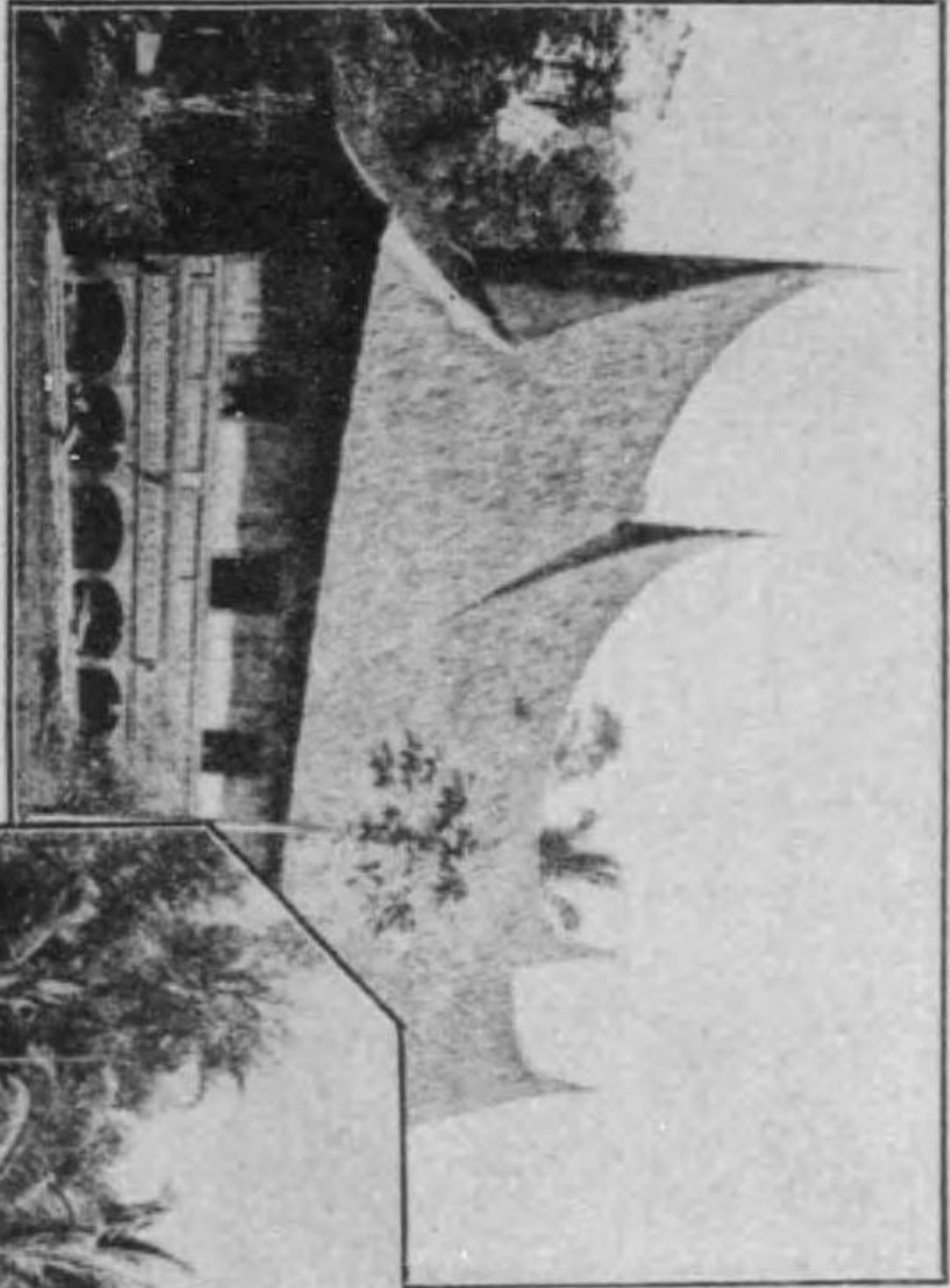
瓜哇土人家屋ノ一



同上ノ二

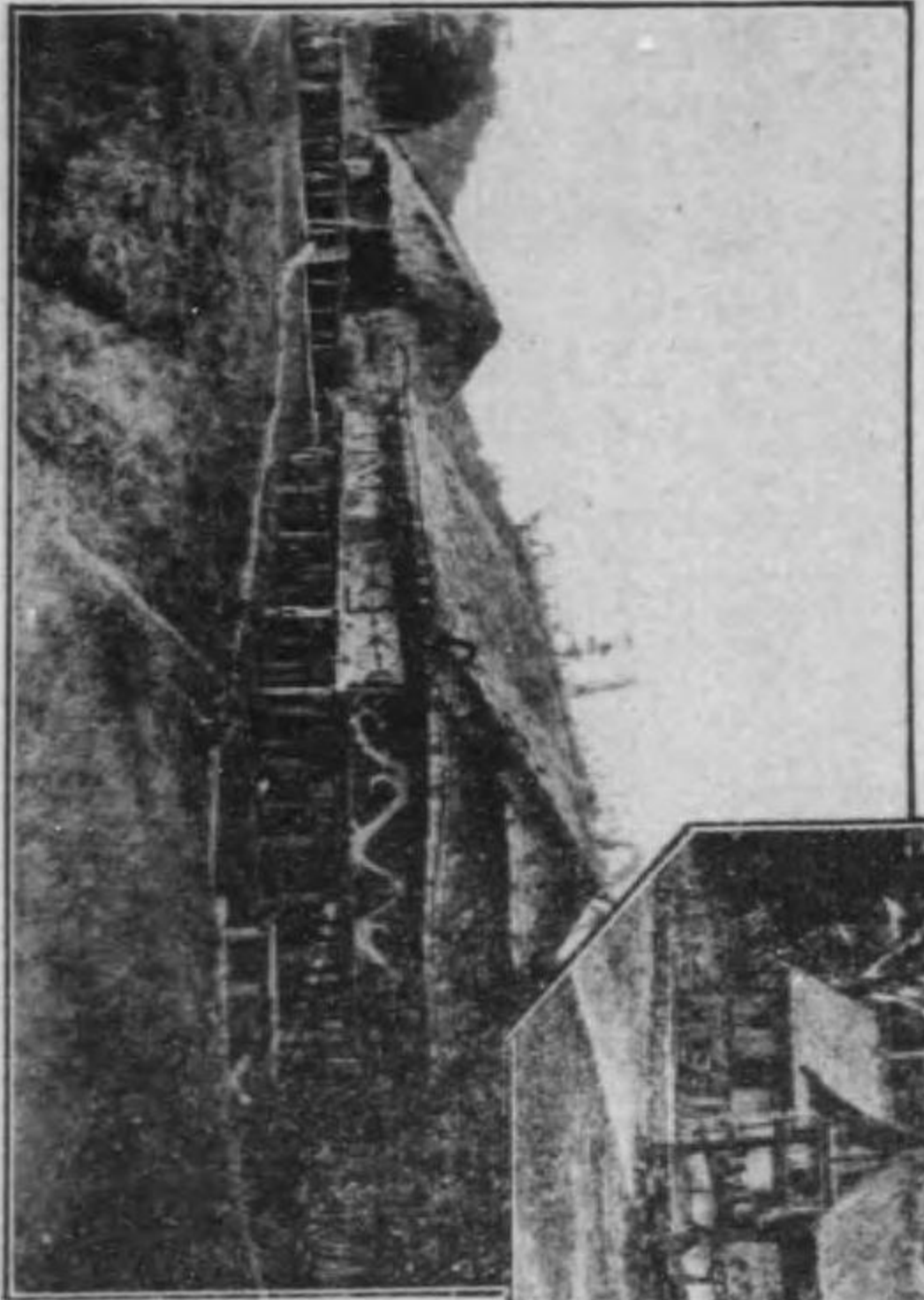


「スマタラ」土人家屋ノ一

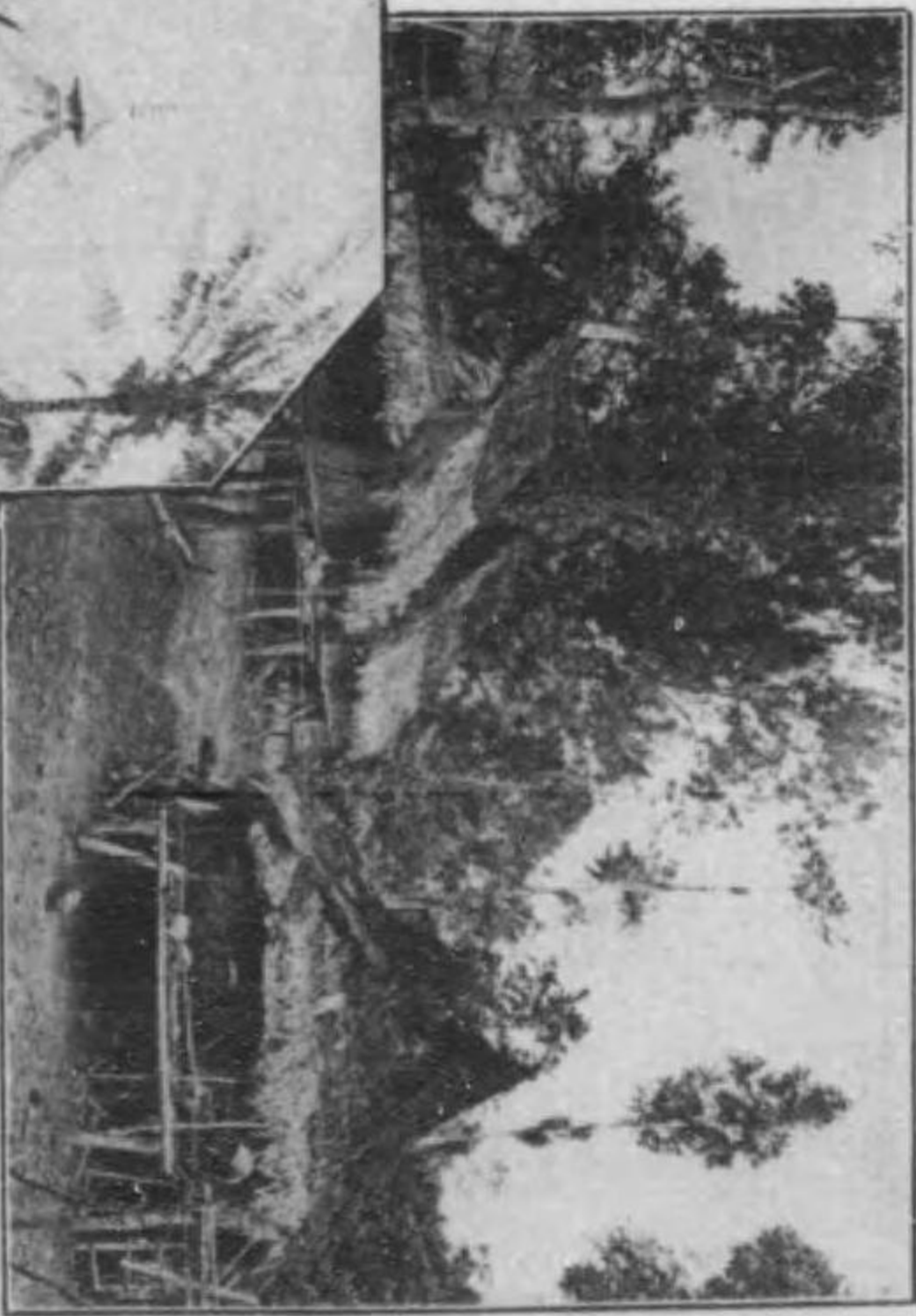


「スマタラ」土人
人面々教堂

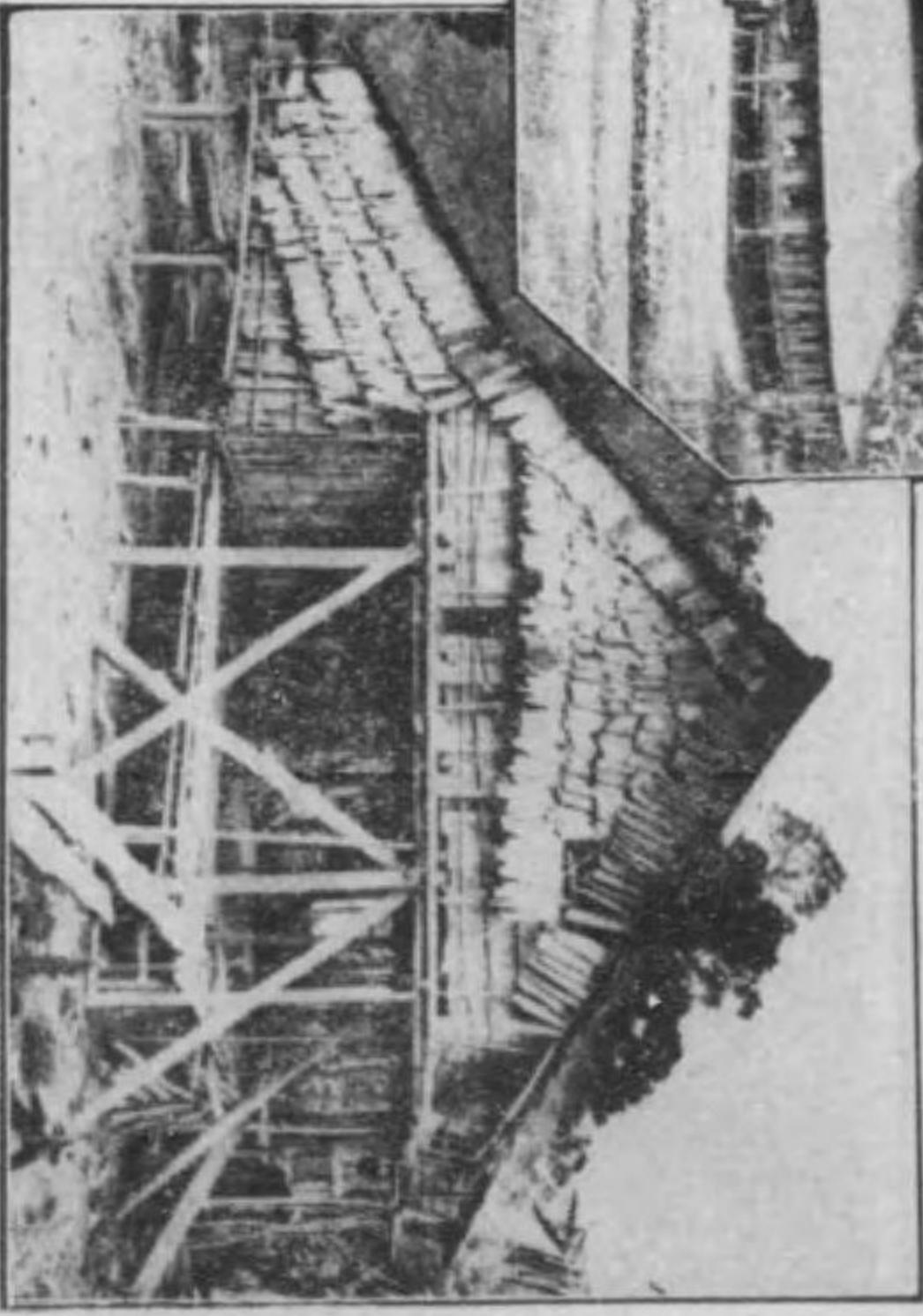
同上ノ二



「ガレネガ」土人家屋ノ一



同上ノ二





瓜哇ノ首府、パタウイヤレノ風景ノ三

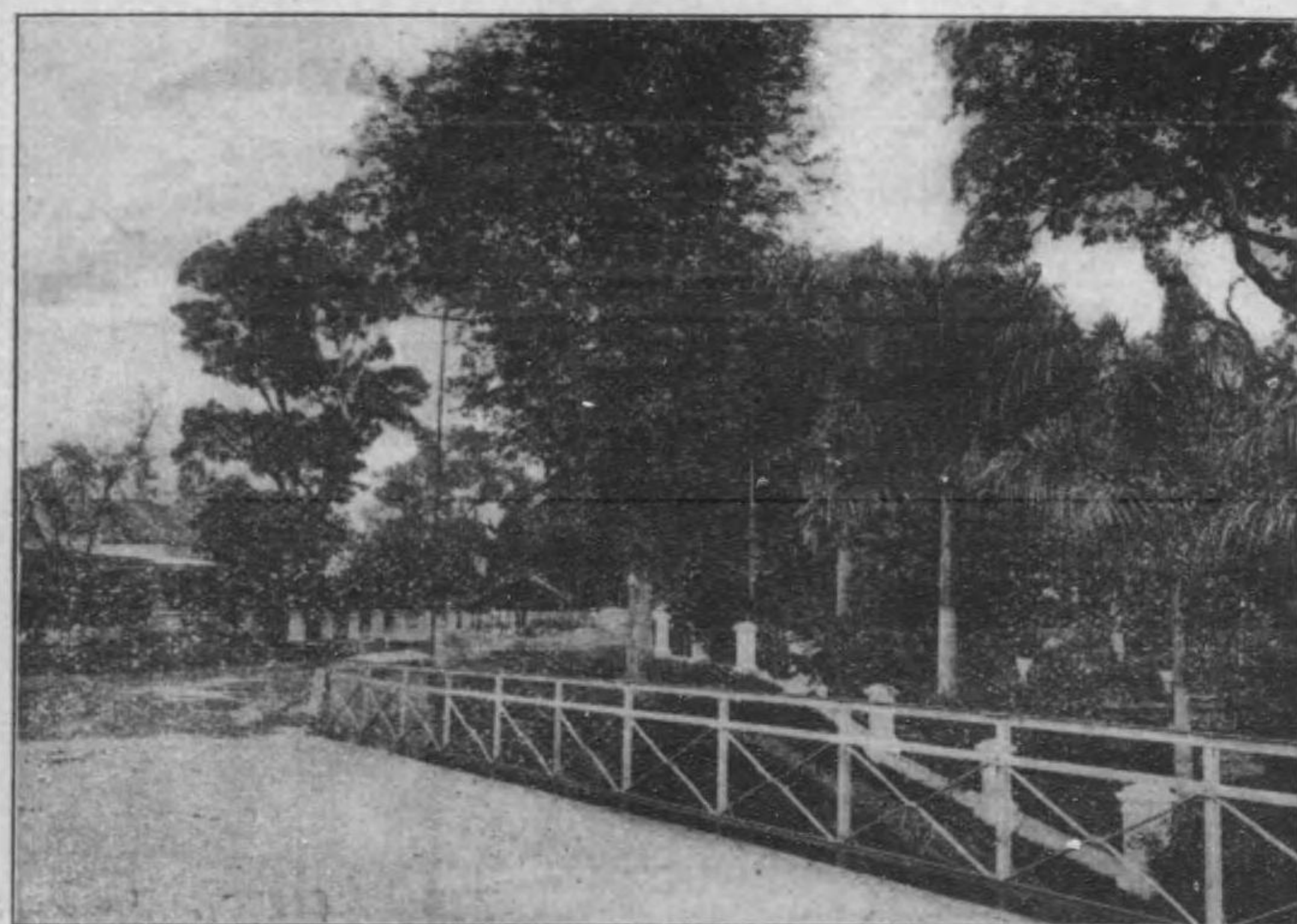
記念碑 | エチア



同上ノ四



瓜哇ノ首府、パタウイヤレノ風景ノ一



同上ノ二



瓜哇ノ首府「バタウィヤ」ノ風景ノ七

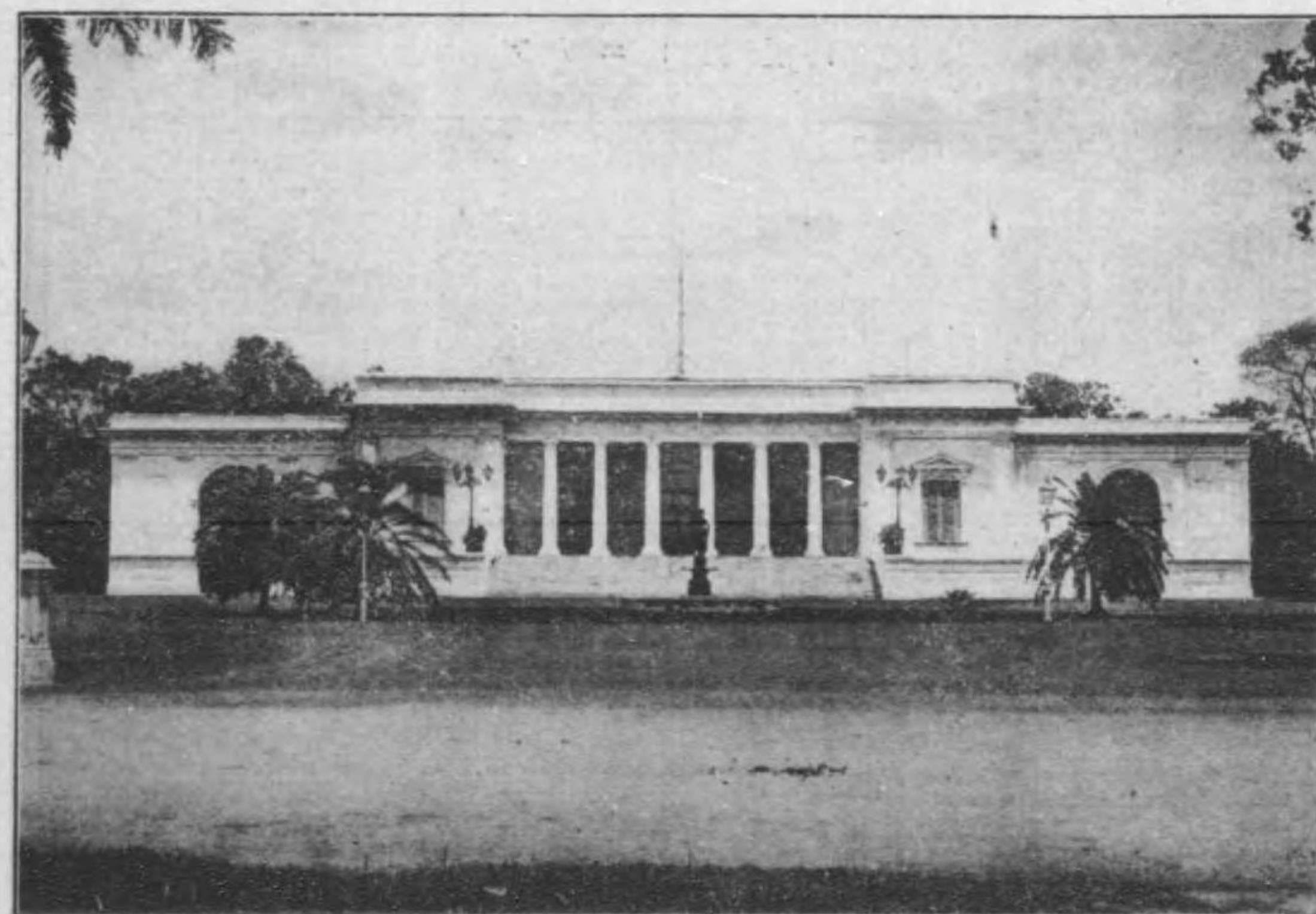


同上ノ八

園公ナミルヘルイツ



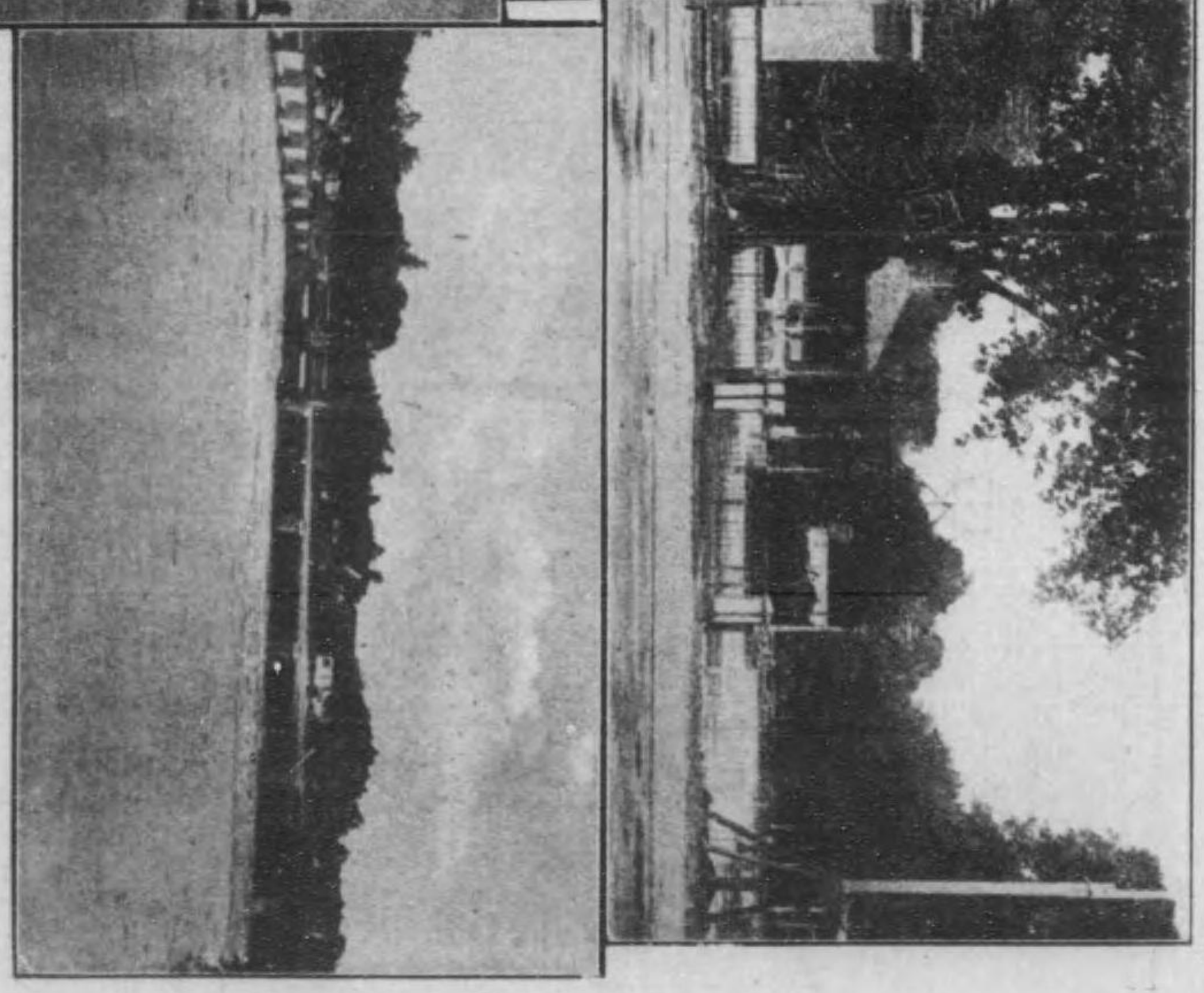
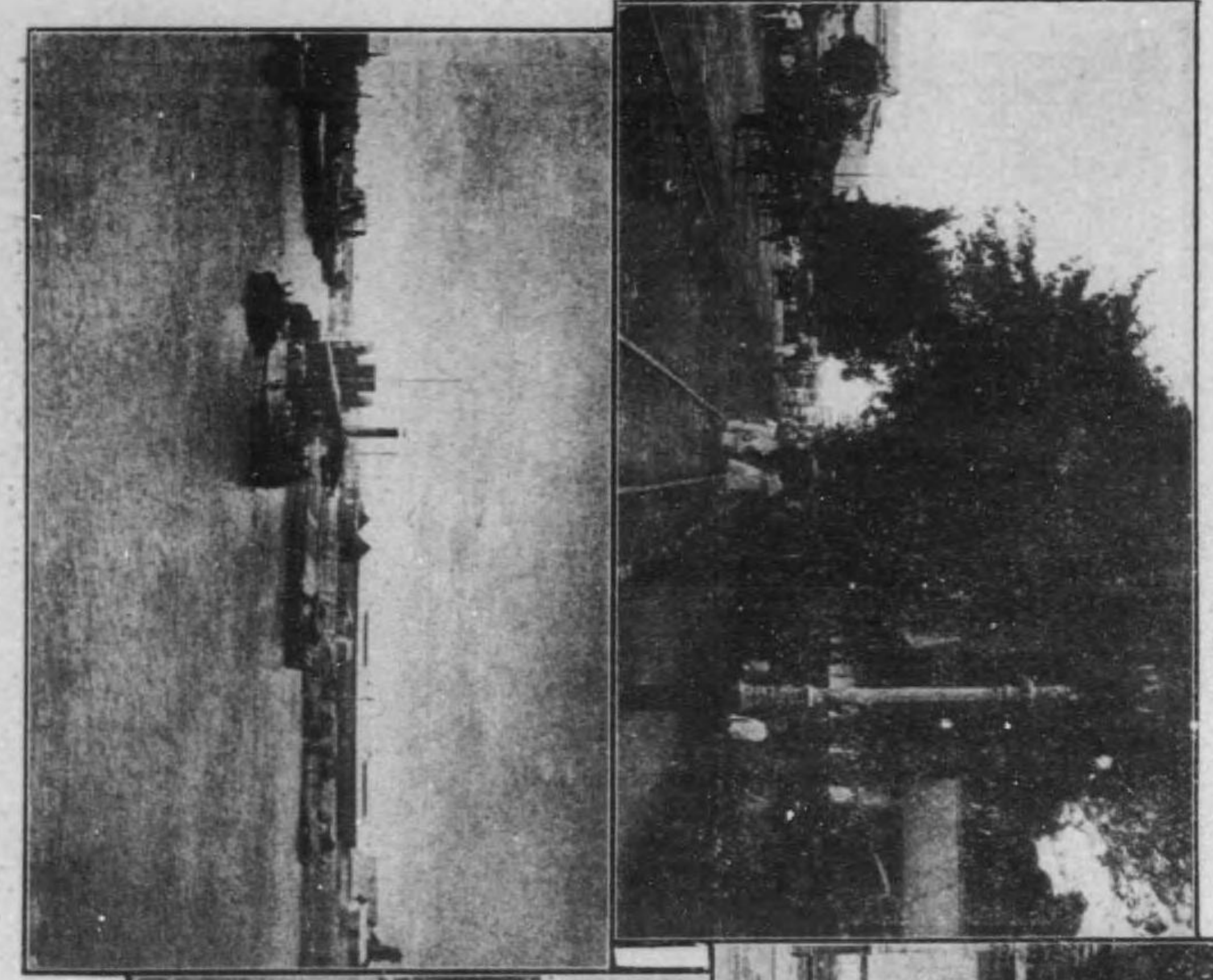
瓜哇ノ首府「バタウィヤ」ノ風景ノ五



同上ノ六

邸官督總

同上ノ三
同上ノ四



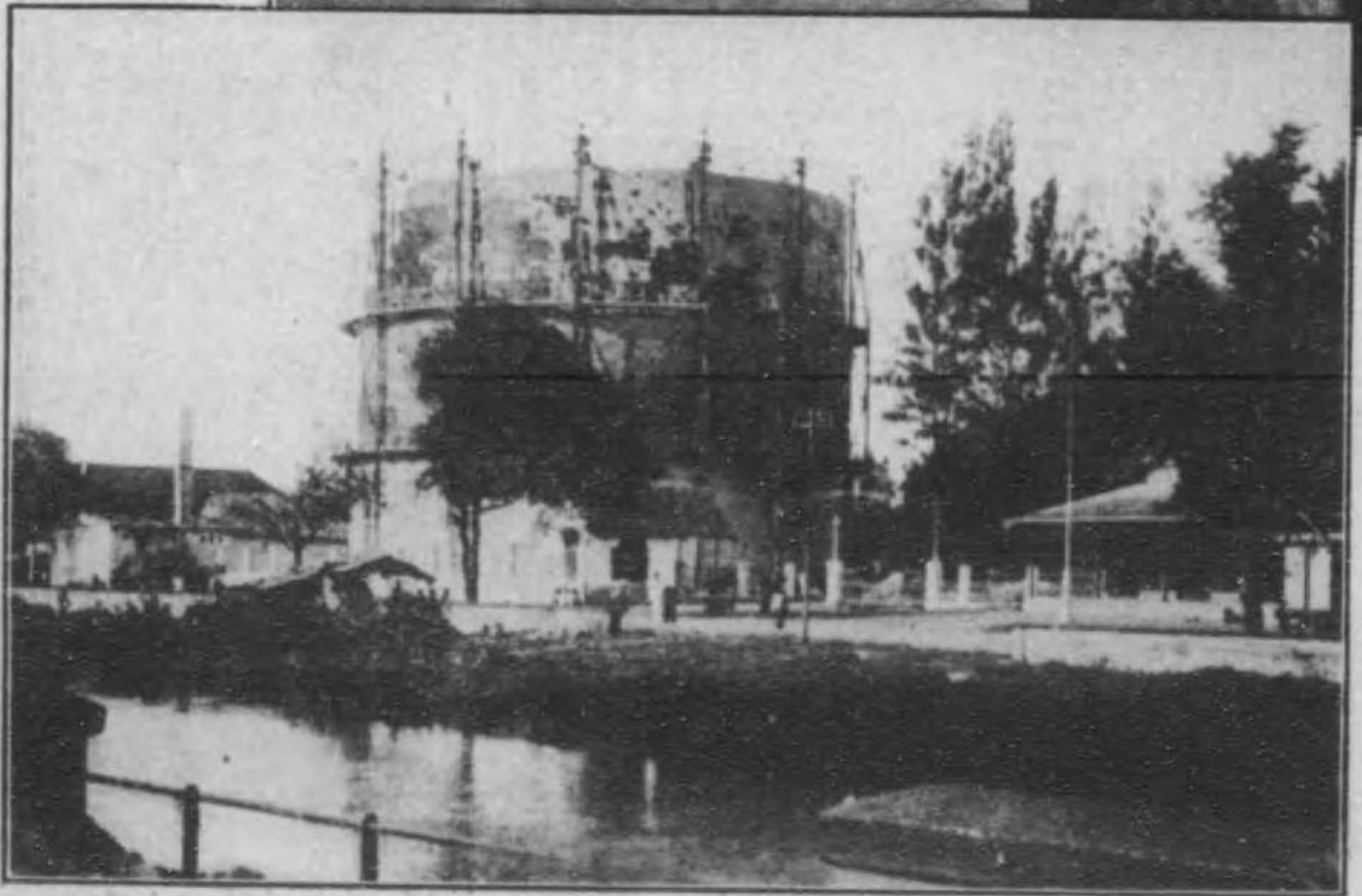
瓜哇第一ノ商業市「スラバヤ」ノ風景ノ一
同上ノ二

瓜哇第一ノ商業市「スラバヤ」ノ風景ノ五

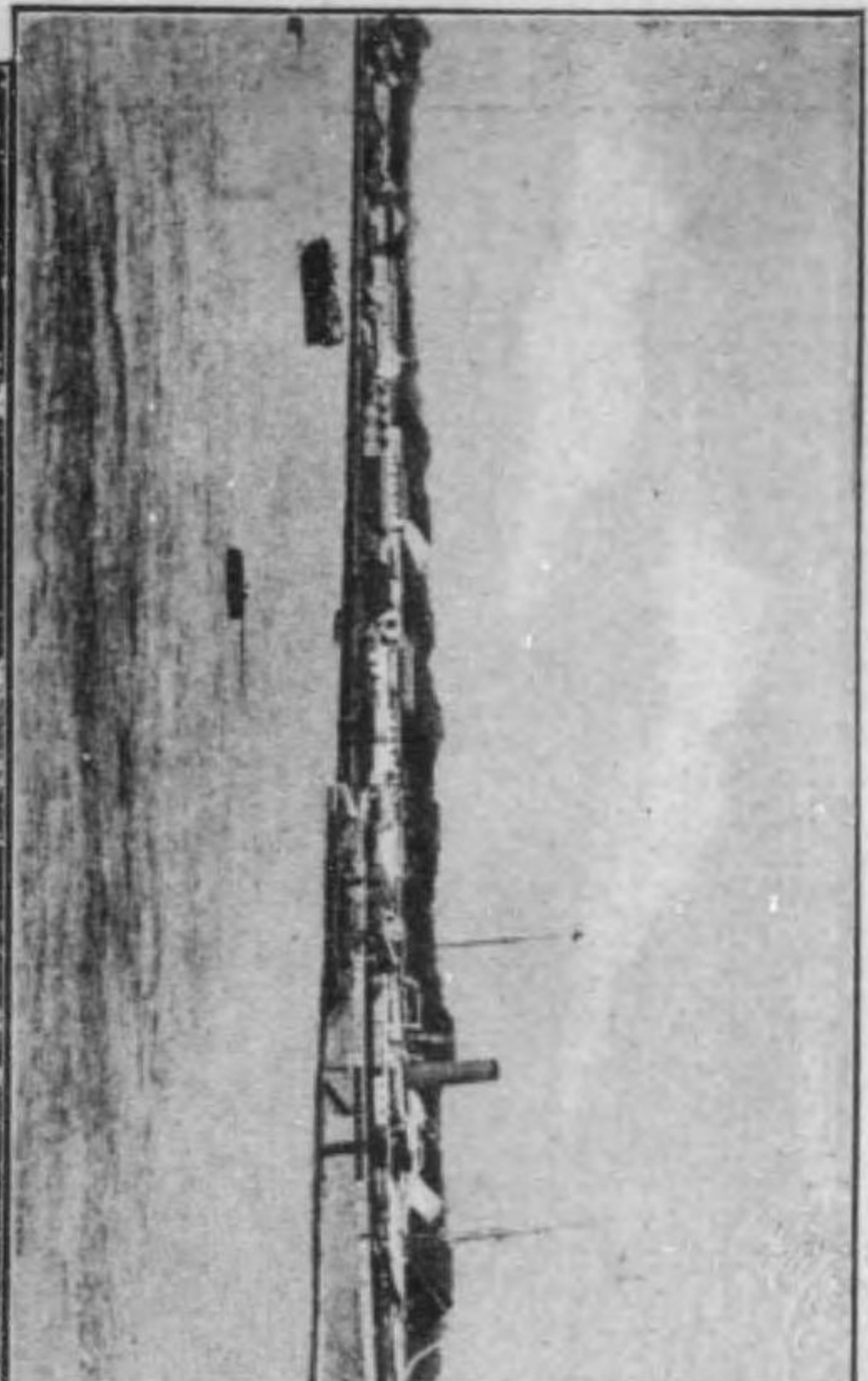


同上ノ六

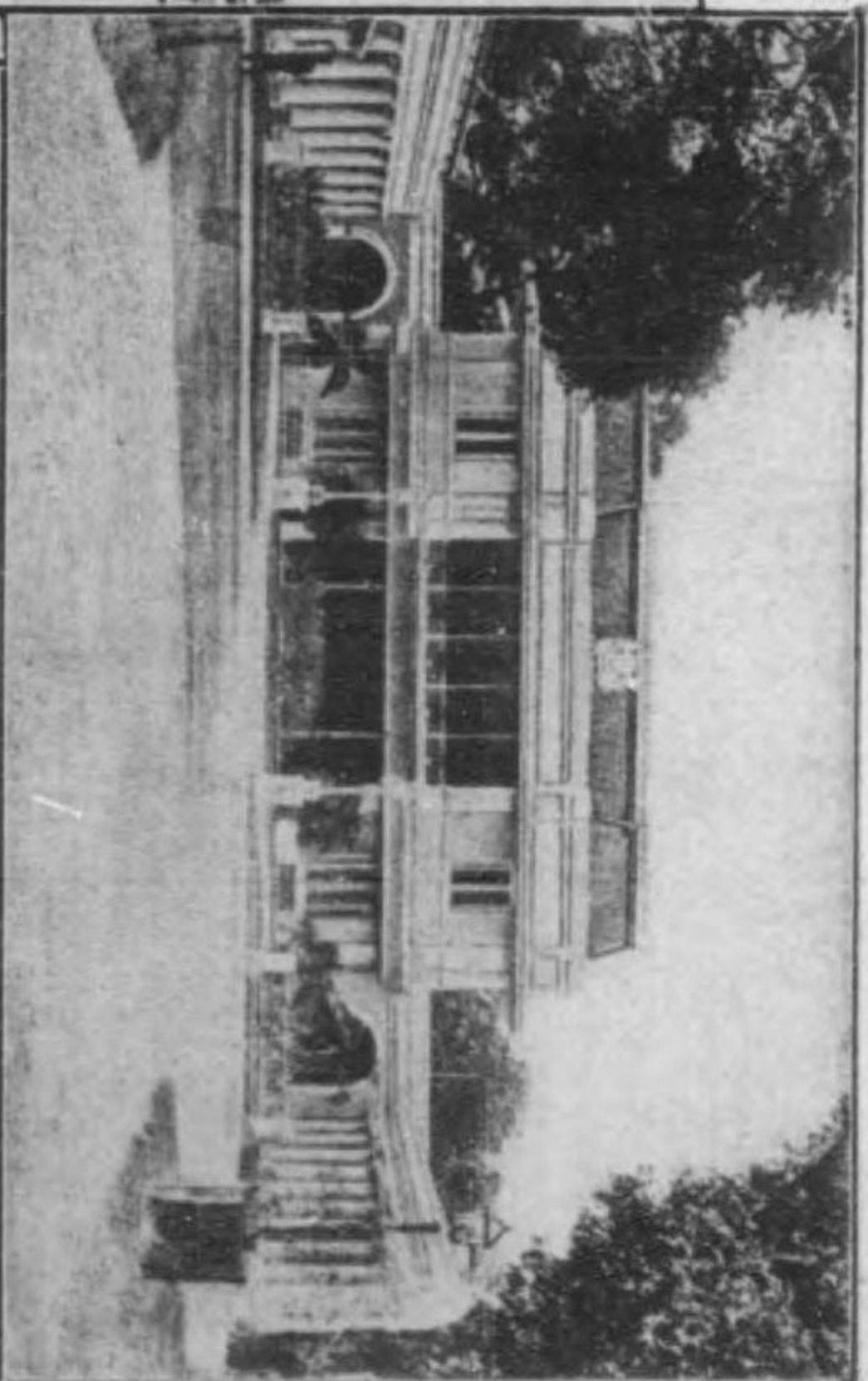
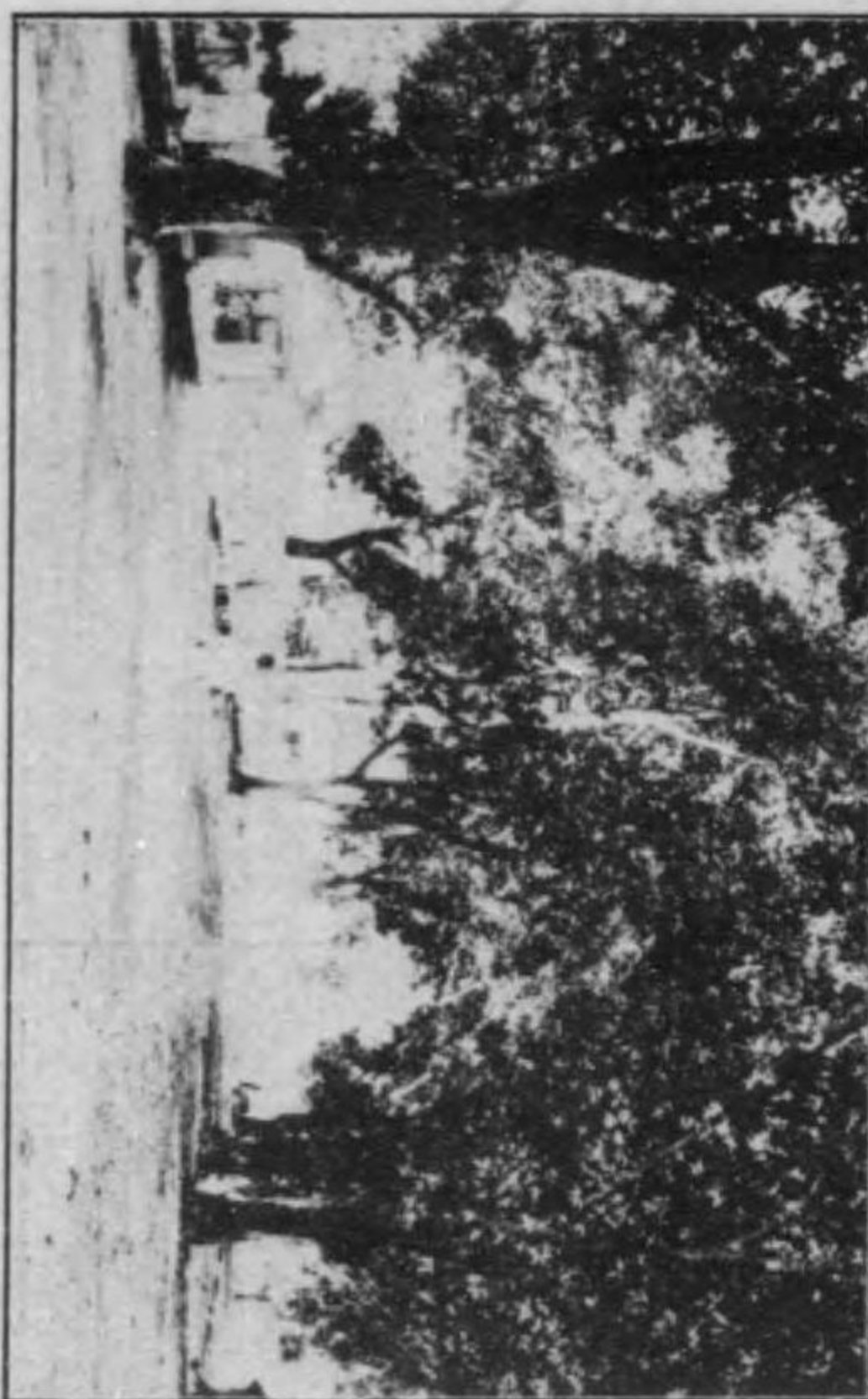
同上ノ七



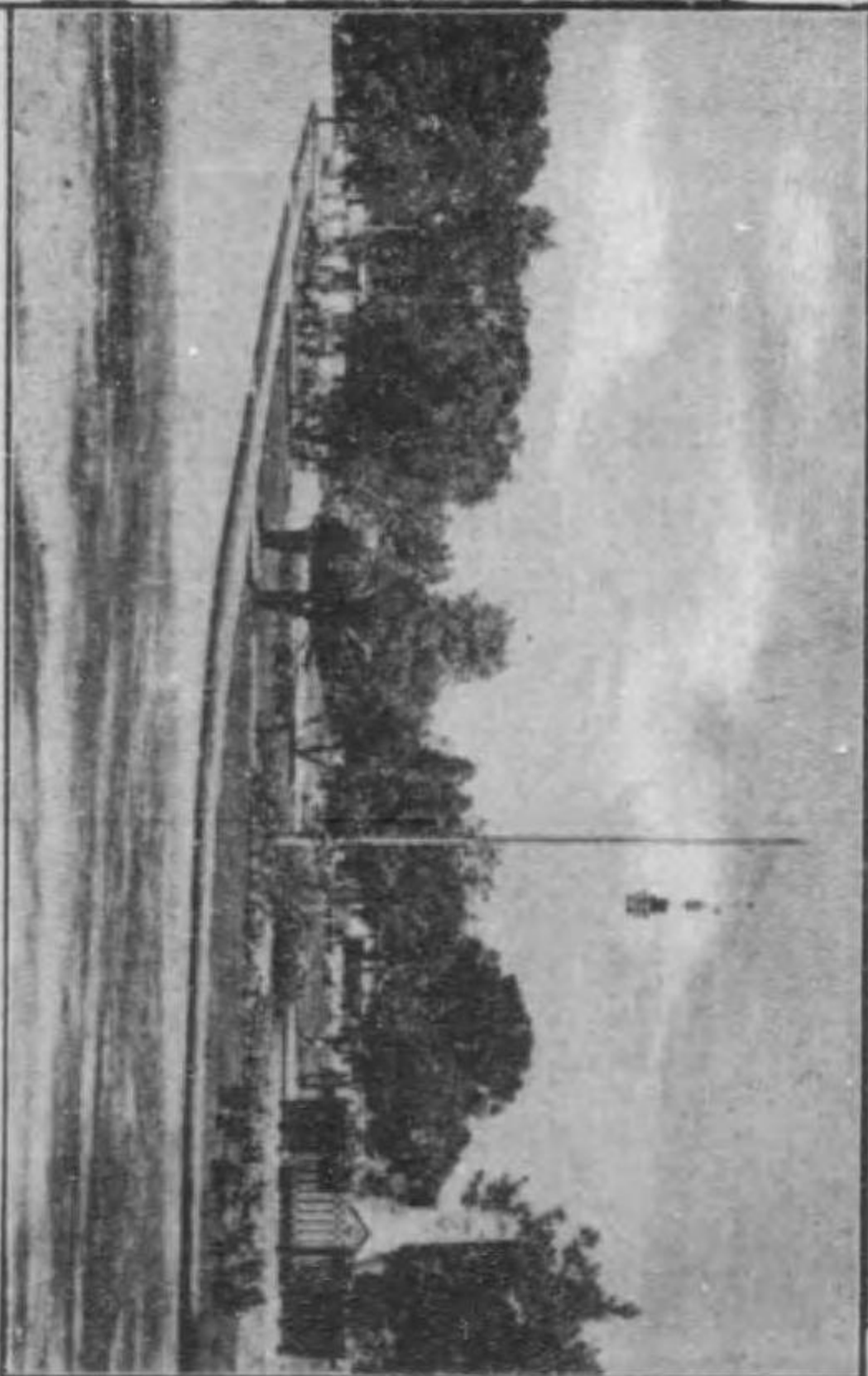
同上ノ三



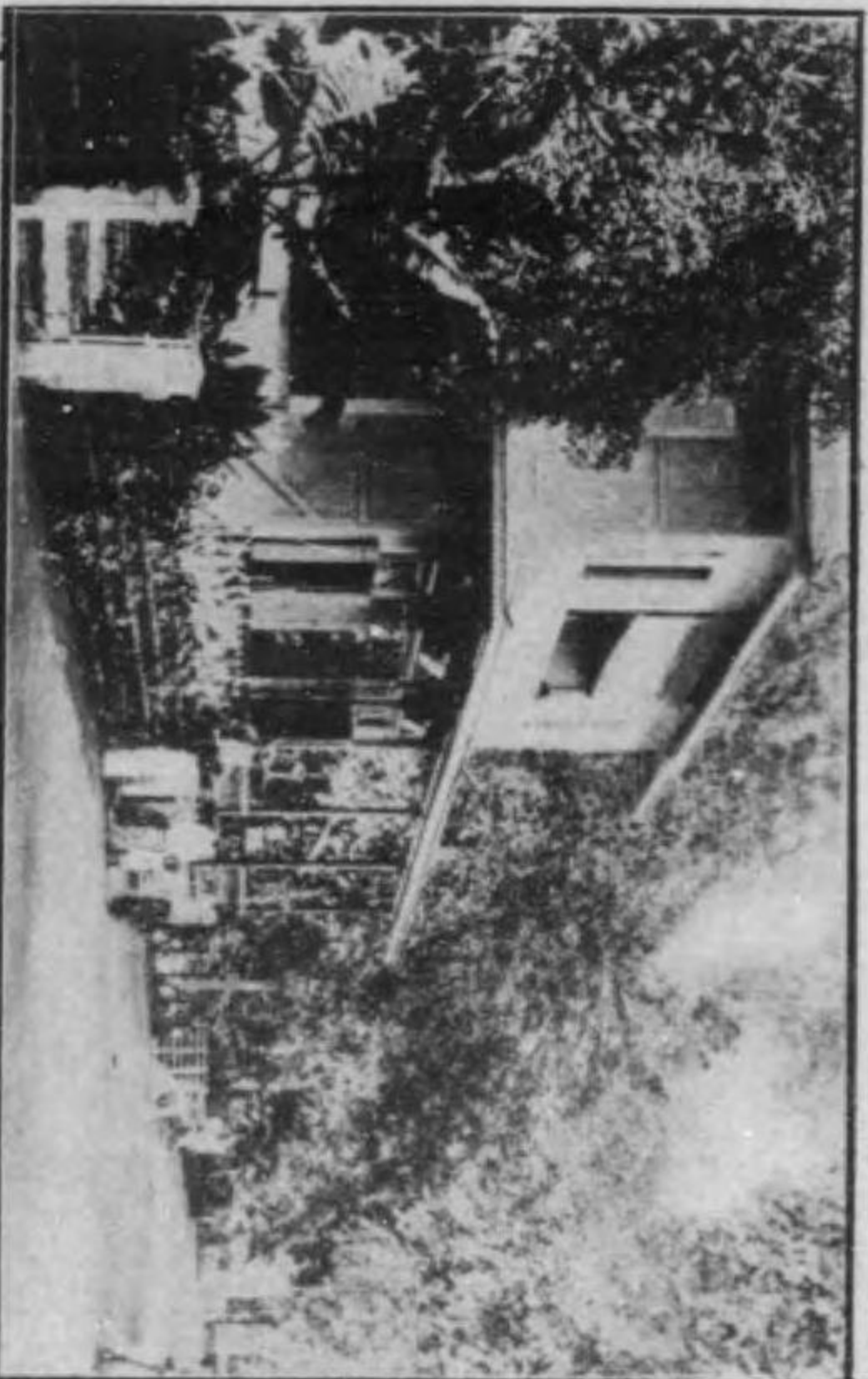
同上ノ四



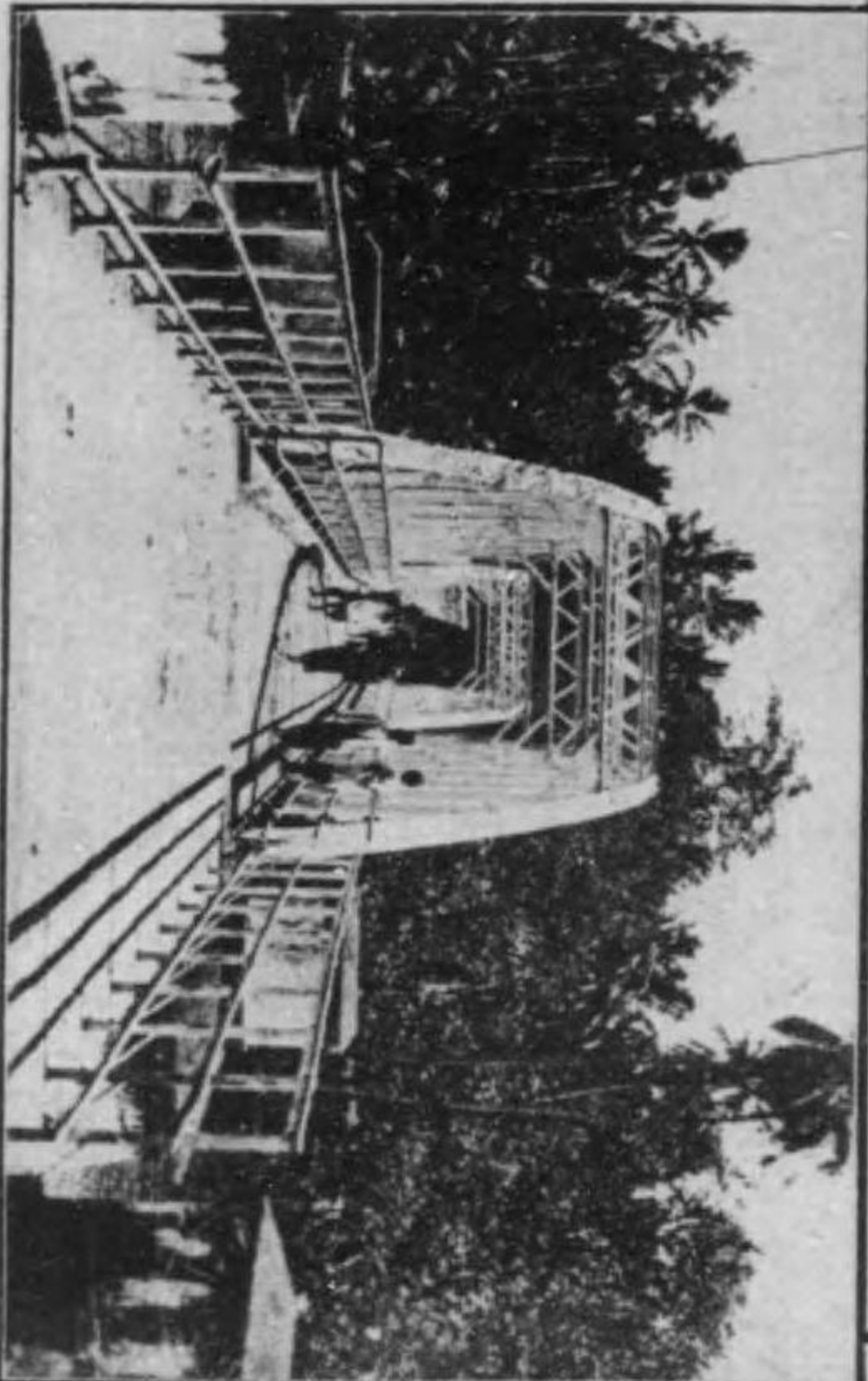
「セレンス島南部ノ要港」マカサ「ノ風景」一 同上ノ二



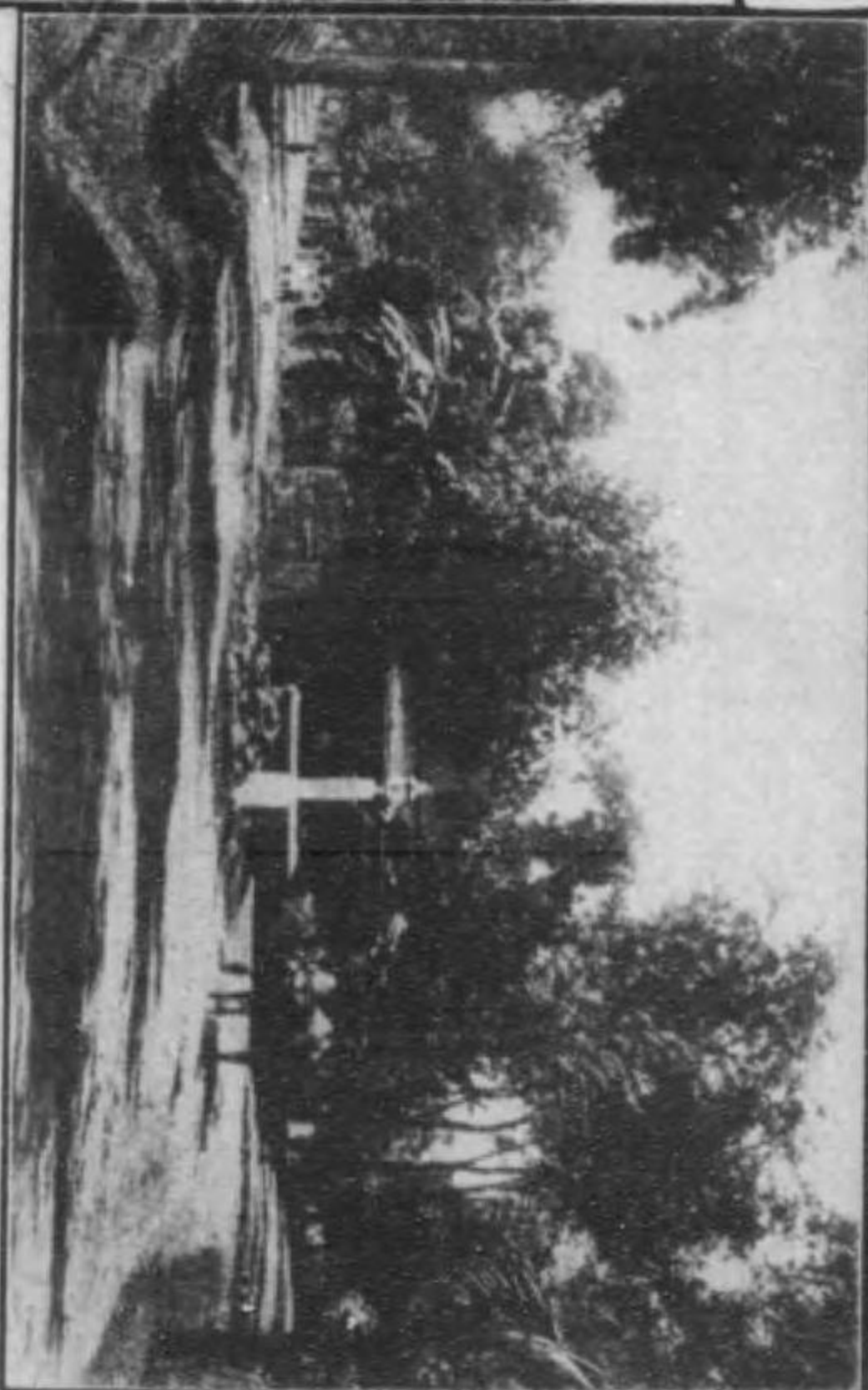
同上ノ三

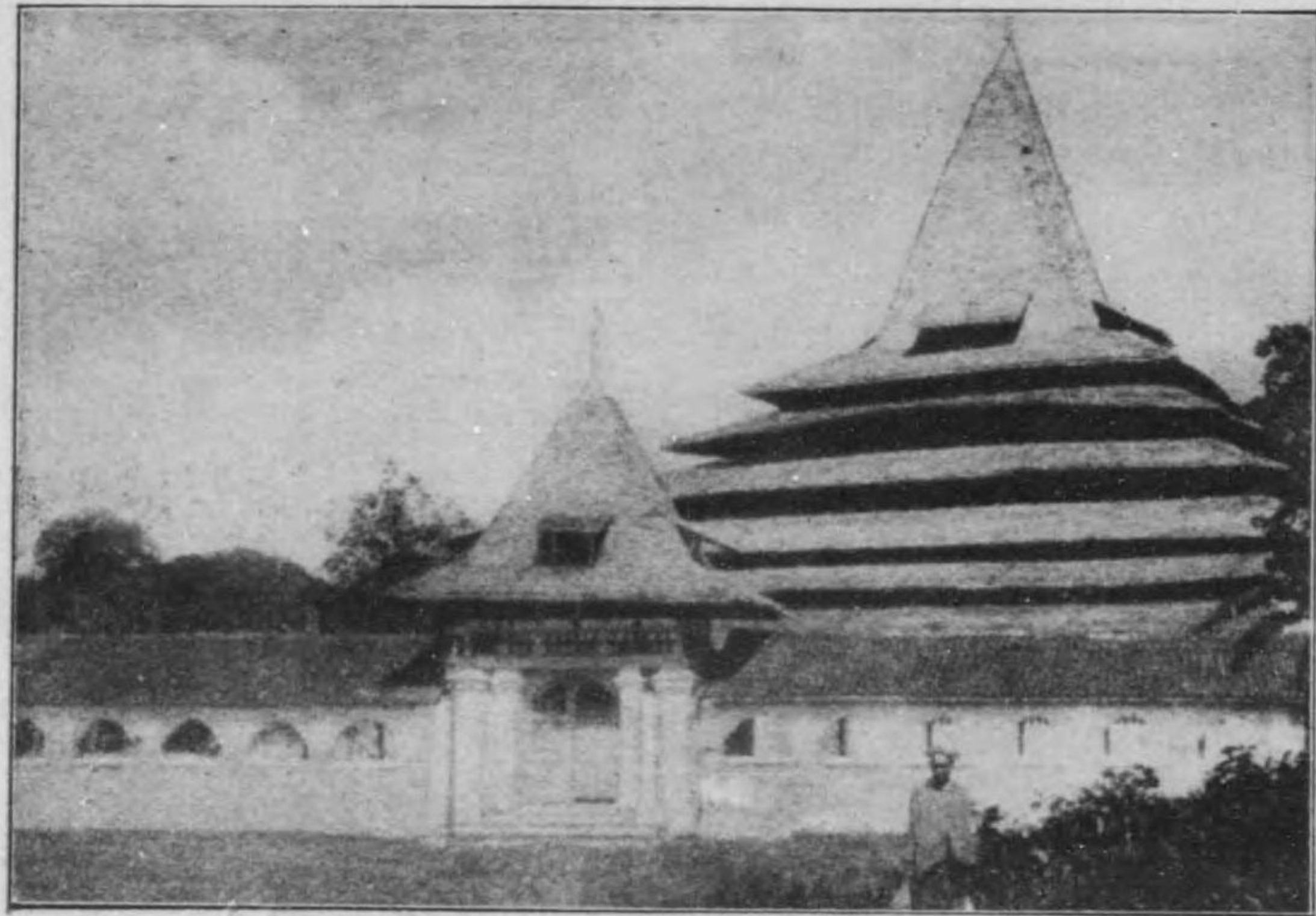


同上ノ四



「セレンス島北部ノ要港」メナド「ノ風景」二 同上ノ二





「モルツケン」群島「ナルナート」スルタン「ノ回々」教寺院



「ニューグアイニヤ」ノ景色



「セレベス」島「ドンガラ」港



「セレベス」島「セレベ」ノ記念碑（「マカッサ」）

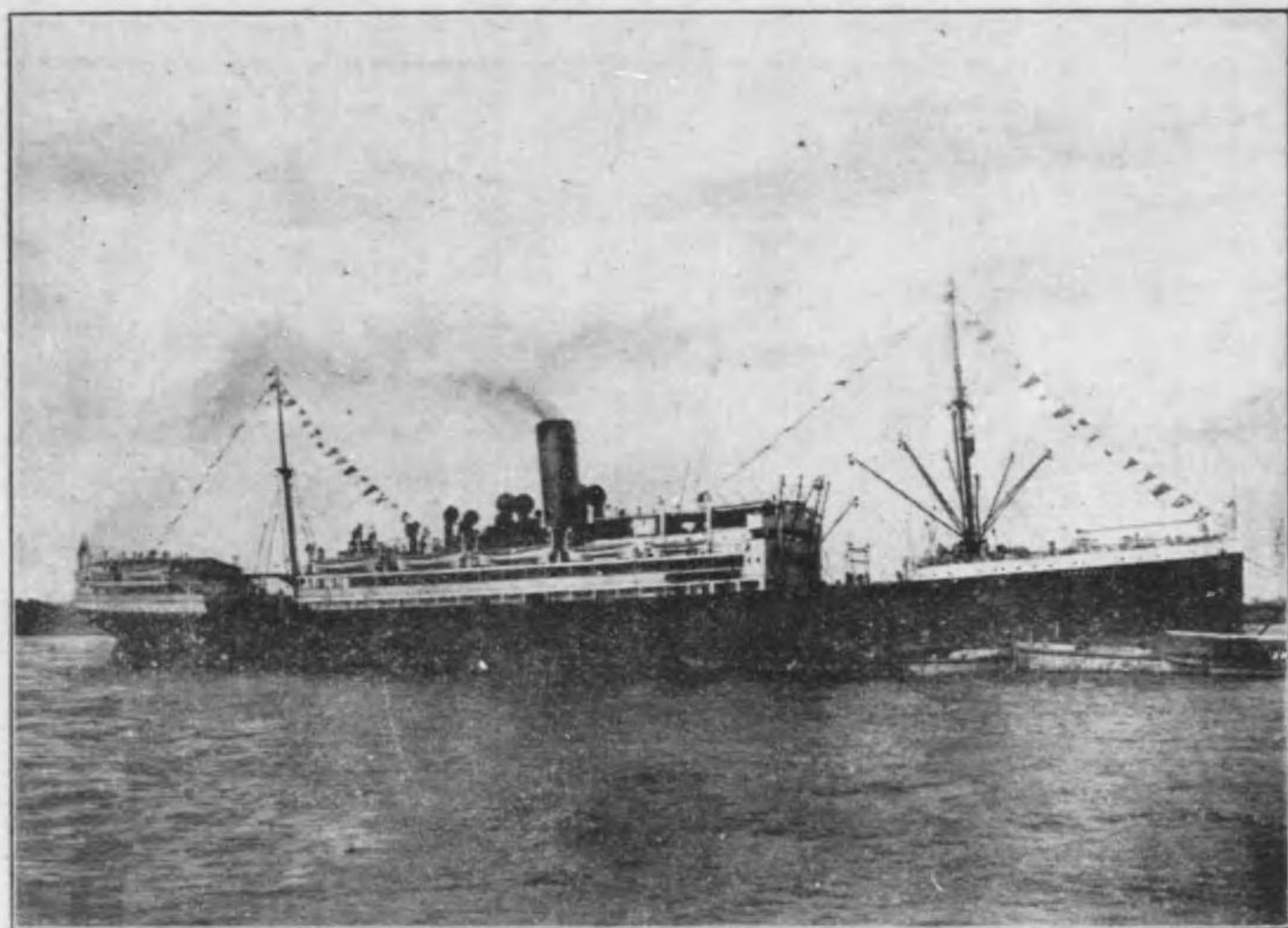


「セレベス」島「トットク」港

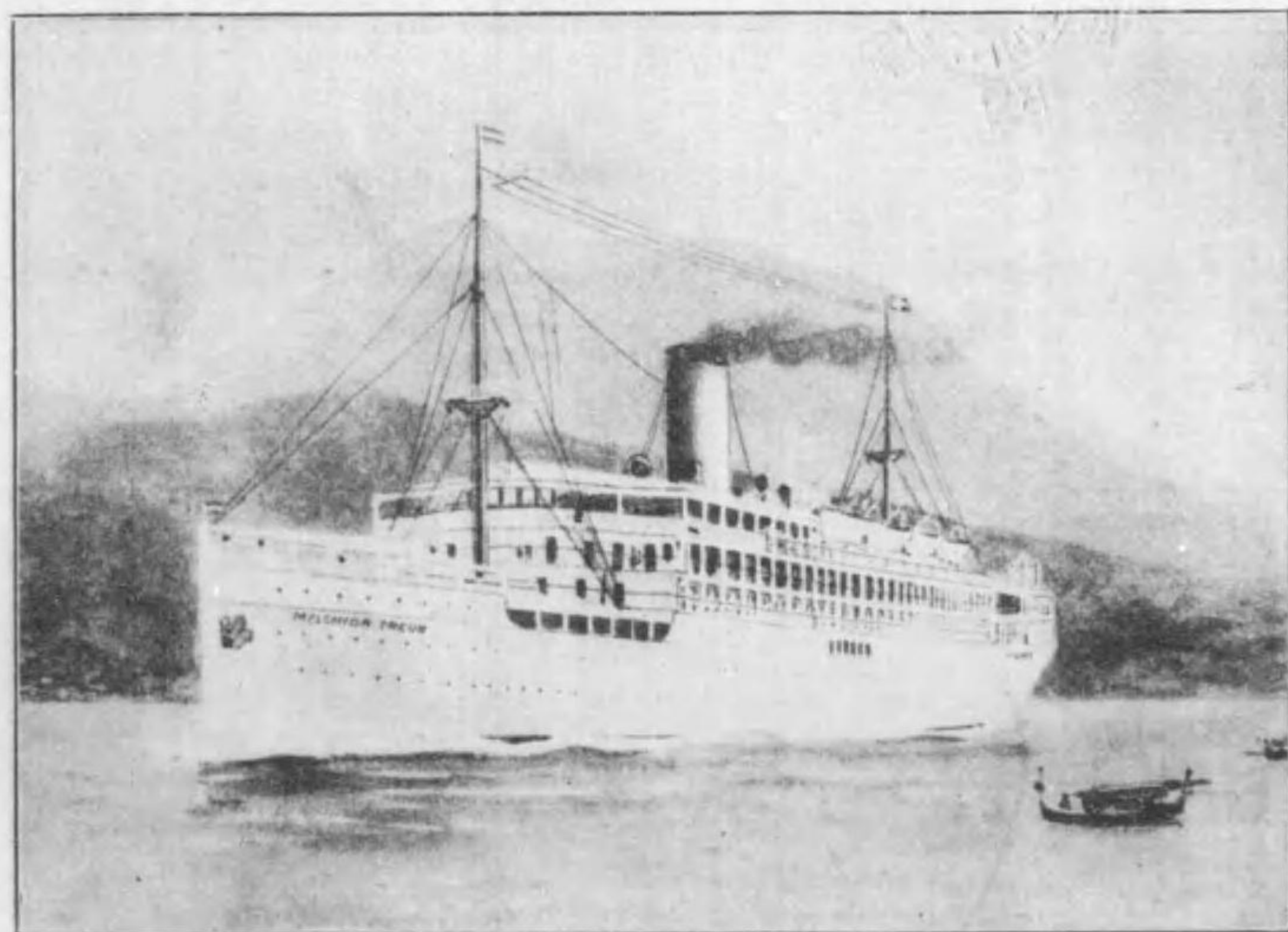


「セレベス」島「ケマー」港

著者ノ乗船セル獨逸汽船「ゲーマン」號



著者ノ乗船セル和蘭汽船「メルヒートル」號



序

徳川氏三百年の治世日本國內は幸に太平であつたか、日本國民は全く海外と杜絶せられ、何等世界的發展に貢獻することの出來ざる運命に安んじたのである、而かも此年間には近世文明の發達上最も多事なる時期であつて、歐米人は種々重要な大發見、大發明を爲し天文、地理、商業、政治、文學、宗教等人間社會總ての方面に大革命を來し、日本國民の目か醒めたる時は日本國四面は既に歐米人の勢力によりて包圍せられて、もはや手も足も出すことの出來ないほとなつて居つたのである、それでも明治維新の大改革と共に、日本國民は偉大なる明治大帝御指導の下に、未曾有の勇氣を鼓し、未曾有の奮闘を

二
繼續して、漸くに後れはせに歐米の文明に追隨し、近年に至り
纔かに一等國の列に入ることを得たのは、寧ろ不思議と申す
べき位の事である、事情如斯であるから今日日本國民海外發
展、就中移民の問題に關して、故障の多いのは當然にして止む
を得ざることにある、地球上の勢力範圍は畧ほ定りたる他人
の領分内に割り込もうと云ふのであるから、やつきとなつて
先方か邪魔をするのも、仮りに位置を變へて考へて見ると、あ
なから無理とのみは云へぬのである、されはとて我々日本國
民は決して黙して止む譯には行かぬ、愈々益々奮闘努力して
世界文明に大に貢獻するの進歩的事實を示し、日本國民の海
外に發展するのは當然なりと、歐米人に認めしむるの域に達
せなければならぬ、然し之は出來さることではないけれども、

容易ならざる忍耐を要することである、同じ歐米人の内でも
獨逸人は少々立後れて居て、英佛人其他國民よりも後から海
外發展を試み、着々成功せんとしたのであつたか、今回の大戦
争は多少其發展に對する他國の嫉妬か原因となり、若し敗北
でもすれば將來の國勢上非常の頓挫を來すであろうと思は
れる獨逸てすら既に如斯であるから、日本國民か海外發展を
試みるには實に大々の覺悟を有さなければならぬ、然し獨逸
のやり方は餘りに軍國主義に偏し、列國をして危険を感する
に至らしめたのであるから、日本國民は前車の覆轍に鑑みて
平和主義、人道主義、萬國主義に戻らさるよう注意し、日本國民
の海外發展上必然に遭遇すべき障害困難をなるべく輕減す
ることを力めなければならぬ、此に於て二つの事か當然必要

となりて來るのである、即ち其一是日本國民は宜敷先づ發展すへき海外の地方を詳細に研究すること、其二是日本國民の知識と徳性とを進歩し發展すへき海外地方の風俗習慣と善く同化せしむること、是なりである、友人法學士中山成太郎君は慷慨の士である、日本國民海外發展の問題に付て大に感ずる所あつて、南洋諸地方探究の途に上られた、頗る得る所かあつた、頃者歸朝其目撃する所を述へ之に其意見を附し、世に公にせんとて序言の依頼があつた、南洋と云へは最も日本に近い海外發展地である、殊に南洋にはまだ半開未開の地か多々ある、又習慣なども似よりたる所がある、日本民族の祖先は南洋から來たのではあるまいかとの説もある、従て南洋の研究は日本國民海外發展上第一に着目すへき面白い問題である

四

と思はれる、此に於て中山君の着眼の凡ならざるに、深く敬服し世の識者は勿論苟も海外に志あるの士に向て、此書を紹介し其一讀を促かすのである、

大正四年七月

友人 芳水 阪谷 芳郎

緒言

蘭領東印度は馬來群島中の主要部を占む、馬來群島中より「ヒ
リッピン」英領「ボルネオ」及葡領「チモール」を除くときは、全く蘭
領の邦土に屬す、所謂蘭領東印度即ち是なり、蘭領東印度は之
を分ちて瓜哇「スマタラ」「ボルネオ」「セレベス」「モルツケン」
小「ズンダー」及濠州中「ニューグイニヤ」の一部を加へたるもの
の七者とす、其中最も開拓せられたるものは瓜哇にして、人口
約三千万（一平方キロメートル平均二百二十九人）輸出三億ク
ルデンに達す、其他のものは總て未だ開かさるの寶庫にして
人口平均一平方キロメートルに四人を有するのみ、其面積を
以てせば瓜哇は其屬島「マドウラ」と共に十三万平方キロメー

トル」を有し、帝國の九州と北海道とを合せたるものより稍や小なるのみ、「スマタラ」、「ボルネオ」、「セレベス」、「モルッケン」、「小ブンダー」及「ニューグイニヤ」の六者は合計約百八十一万平方「キロメートル」を有し、實に帝國の領土、朝鮮、關東州、臺灣、樺太を合すものの全面積の約三倍に相當す、而して此等の領土は天下に南洋の大寶庫たるの稱あり、和蘭か其本國僅に吾樺太と全一の面積に過ぎざる一小國を以て、而かも此廣大なる寶庫を其本國より八千五百マイル以上の遠距離に在る亞細亞南方の大洋中に有するは、抑も如何なる因縁を有するに由るものなるか、殊に其將來の運命如何、換言せば將來に於て如何なる變遷を見るべきや、の問題に關して帝國は豫め周到の研究及考慮を費すの要あるや極めて明かなり、余か今次の旅行は

所謂蘭領東印度の地理、經濟及政治に關し、聊か實地の視察を加へんとするにあり、然りと雖極めて急速の旅行にして、僅々二月餘單に瓜哇、セレベス、「ボルネオ」の一部を通過したるに止まり、洵に其一斑を窺ふに過ぎず、極めて淺薄なる皮相上の視察なりと雖、尙ほ其實見したるものに依り、蘭領東印度に關して比較的周到なる調査を遂けたるの名ある、獨乙人の著書及報告に散見するものを探り、茲に之を記述する所以は他日再遊更めて蘭領東印度の研究を試むる場合に於ける備忘に資するのみ、而して蘭領東印度を研究するに當り、先づ世界殖民史、英國殖民史、蘭領東印度殖民史及馬來群島史の大要を明にする要あり、蓋し此等のものは皆蘭領東印度の過去、現在、及將來を語らんとするもの、基礎的知識を爲すものなれば

なり、是れ緒論に於て主として世界殖民史、英國殖民史、蘭領東印度殖民史及馬來群島史の大要を説明する所以なり、今や此記述の杜撰を顧みず、敢て世に公にするもの他なし、此小冊子亦世人を促して南洋研究の端緒を爲さんことを希ふに在るのみ、淵に臨んで魚を羨むは決して吾人の志にあらざるなり、讀者諒焉、

大正四年七月

著者識

南洋研究之一 蘭領東印度目次

緒論

第一節 世界殖民史の概要……………一
第二節 英國殖民史の概要……………二五
第三節 蘭領東印度殖民史の概要……………五四
第四節 馬來群島史の概要……………六四
本論……………一二五

第一章 蘭領東印度の地理概要……………一二五

第一節 總說……………一二五
第二節 瓜哇島……………一三二

目次

第三節	「スマタラ」島	一四二
第四節	「ボルネオ」島	一四八
第五節	「セレベス」島	一五三
第六節	「モルツケン」群島及小「ズンダー」諸島	一五九
第七節	「ニューグイニヤ」島	一六六
第二章 蘭領東印度の經濟概要 ……………一七八		
第一節	總説	一七八
第二節	大「ズンダー」諸島	一八六
第一	「ボルネオ」島	一八九
第二	「スマタラ」島	一九五
第三	瓜哇島	二〇三
第三節	東部馬來諸島(「セレベス」島「モルツ	

第四節	ケ「ン」群島及小「ズンダー」島等	二一六
第一	馬來半島	二二二
第二	「ヒリッピン」群島	二三六
第三章 蘭領東印度の政治概要 ……………二四六		
第一節	總説	二四六
第二節	蘭領東印度の財政	二五七
第三節	蘭領東印度の土地制度	二九五
第四節	蘭領東印度總督府の組織	三一〇
第五節	蘭領東印度の地方制度	三二一
結論		三四七
第一節	蘭領東印度殖民政策論	三四七

第二節	英國殖民政策論	三五八
第三節	佛國殖民政策論	三八七
第四節	和蘭本國國勢一斑	四〇〇
第一	和蘭國の人口	四〇〇
第二	和蘭國に於ける原始的産業	四〇三
第三	和蘭國に於ける工業	四〇九
第四	和蘭國に於ける貿易及交通	四一二
第五	和蘭國の行政	四二八
第六	和蘭國の軍備	四三一
第五節	最近世に於ける歐州強國の殖民的態度	四三三
第六節	餘論	四四五

目次終

南洋研究之一 蘭領東印度

法學士 中山成太郎著



緒論

第一節 世界殖民史の概要

世界殖民史の概要に付ては千九百九年發行「マイエル」氏百科字典中第十一卷第二九三頁以下に掲ぐるもの善く其概要を明かにせり故に以下之を抄譯すへし最も古代に於て最も盛に商業を擴張したる國民は其貿易を保護する爲に力めて殖民地を設けたり「ベニチャ」人か紀元前二千年の中間より地中海の沿岸に多數の殖民地を設けたるは其の例なり當時其本國の人口多からさりしか爲其

緒論 第一節 世界殖民史の概要

殖民地は概して小貿易地に止まりしか其中商業の繁盛に伴ひ著しき發達を見たるものあり即ちベニチヤ殖民地中の最強なる「カルタゴ」は忽ち其本國の地位を繼承し其智巧なる政策は一時地中海の全權を占握するに至れり希臘人は卓越せる殖民的才幹を有し不斷に海外に移住を試み大に商業殖民及農業殖民の成立に關して力を用へり此の如くして小亞細亞、黒海沿岸、下伊太利亞、キレネイカ、南ガルリヤ及スパニヤ等に於て多數の希臘殖民地成立し一般に希臘文明を移植せり其中最も盛なりしはイヲニヤ海の「ミレツト」及エオリヤ海の「ミチレナ」の二とす希臘人は其殖民地を分て本國政府の直接建設せるものと國民の任意的行動に依り成立するものとの二と爲せり希臘殖民地は概ね獨立の一國を形成すと雖常に其本國と攻守同盟を結び其精神上の連鎖は頗る強固なりき羅馬の殖民政策は之に反して全く奪掠主義を採り先づ軍事的殖民を行ひ次之を都市殖民と爲し其貧窮なる羅馬人をして漸く其地主たらしめんことを計れり此くして無數の市街を歐洲の中央及南部に成立せしめ羅馬帝國の西半をして徐々に羅甸化せしむるを見たり羅馬に於ては希臘と異なり其殖民地に對し

政治上の獨立を許さざりき

中古に於ては獨乙人は殖民を力とめ「プロイセン」の東半及埃國に於ける「スラウエン」の殖民地及「プロイセン」「ポーレン」「シユレージン」「ジューベン」「ブルゲル」「ウエルツ」「エルクローネ」等の諸地方に於て大に活躍を試みたり要するに中古の獨乙殖民は「カロリントンゲル」時代に始まり十二世紀及十三世紀に於て其頂點に達し「カール」五世に至り其結末を告げたりと云ふへし北歐に於ては獨り「ハンザ」市か其商業殖民地として成功せるを見たり南歐に於ては特に殖民の見るべきものなし當時地中海の北岸は已に全く歐洲文明國民の確實なる占握に歸し之に反し地中海の南岸は歐人の敵たる「モハメット」人の支配する所となれり新世界の發見は殖民に關し全く一新生面を開展せり蓋し新世界に於ては舊世界の文明國は相率ひて無制限に土地を開拓するを得たればなり此に於て歐洲各國は力とめて廣大の殖民地を獲得して其上に商業及殖民を獨占せんとして十七世紀に於ては獨占的殖民及貿易の觀念最も盛に行はれ之を其殖民政策の本領と爲せり此主義は殖民地を擧て専ら本國の利益に供用し外人に對して

は全く之を閉鎖するを目的とす是れ其始めは殖民地の占領を確實ならしむるに出でたるものなりと雖畢竟經濟上貴金主義の謬見に陥りたるの結果なりとす當時は殖民地の交通を本國の獨占とし殖民地を以て本國の獨占する原料品及殖民地貨物の供給地たらしむると同時に其本國の工業品の不斷消費地と爲さしめんことを力とめり故に其殖民地の航海權は本國の船舶の獨占と爲し外國の船舶には特別なる國旗税を賦課し又は絶對に其交通を禁止せり或は本國の港灣を指定して開市場と宣言し其殖民地よりの重要物産の輸出は一切此港を經由せしめ殖民地への輸入は一切本國を經由することを要すとし又殖民地に於ては本國の工業品と競争の虞ある工業の發達は之を一切禁止し外國の工業品には重税を課するか又は其輸入を禁止せり此他殖民地と本國との交通に關して本國の爲めに種々の利益を與へたり例へば他國の殖民地貨物には重き輸入税を負担せしめ自國の殖民地貨物には輸入保護金を下附する如し此の如く其本國と殖民地との間に特別なる利益を獨占するを以て唯一の方針とし其兩者の間に特別の利益を保護したるに依り此殖民主義を稱して一種の殖民契

約なりとせり此主義は當時に在りては多少の差異を有するも原則として各國の殖民地の上に行はれたり即ち英國は千六百五十一年に公布し千六百六十年及千六百六十四年に改正したる航海條例を以て佛國は千六百七十年公布の條例を以て此主義を採ることを宣明せり和蘭、西班牙、及葡萄牙の諸國も亦純然たる獨占的殖民主義を標榜せり此趨勢は十九世紀に至り始めて一大變動を見たり是れ殖民政策の一大進展の結果なりとす即ち英國は千八百二十二年に於て其殖民政策上に大改革を行ひ其米國殖民地との交通は千八百二十五年以來全く自由無制限とし東印度に對しては其沿岸貿易に關するものを除くの外は一定の關税及國旗税を賦課することを條件として其港灣を開放せり千八百四十八年には其國旗税を削除し千八百四十九年には其航海條例の殘部規定を廢止し千八百五十年には其沿岸航海を全く開放するに至れり佛國は尙ほ千八百六十年迄其獨占主義を保持せり此の如くして十九世紀に於て米國が終に「スパンヤ」及「ポルトガル」の占領より獨立し歐洲の殖民政策に對し「モンロー」主義を宣言するや歐洲諸國は新に亞細亞、亞弗利加及濠洲の方面に向て大發展を試むるに

至れり

六

西班牙は曾て「ブラジル」を除くの外南米の全部、西印度、中央亞米利加、北米の南方「カリホルニヤ」より「フロリダ」に至る迄を領有し加之に亞細亞に於ては「ヒリッピン」を亞弗利加及南洋に於て亦數多の殖民地を取得し「カール」五世の時代に於ては其領土の何れかには旭日常に輝くこと大言し其領土の大を誇りたることあり然るに西班牙の殖民地は純然たる官權及貴金主義の下に副王又は總督に依り支配せられ其豊富なる金銀鑛は莫大なる貴金屬を産出し「カール」五世及「ヒリッピン」世は極めて驕奢なる政治を行ひたり而して其榮華を極たるの暴富は西班牙國運の衰頽を速かに招致せり何となれば國民の多數をして殆んど驕奢に耽溺せしめられたるはなり西班牙は當時生産力を有する人口に富ますして多數の移住民を送るに困難し其殖民地に於ける移住は常に其乏しきを訴へ其占領地をして單に表面上「スパニヤ」化するに止めたり此に於て其經濟的天才の不足、其施政の專恣、其宗教上の苛嚴なる壓迫、其土人に對する利益獨占の過急、其嚴格なる排他的の強壓干涉か自由なる經濟的發展を阻止したること等相合して十九世紀の

始めに其亞米利加殖民地をして殆んど全く西班牙の羈絆を脱せしむるの大原因を成したり此の如くして西班牙は其領地の大半を失ひ千八百九十八年には苦痛多き戦役の後に其最終の價值ある領土「クイーバー」「プエルトリコ」「ヒリッピン」及「グアム」を北米合衆國に奪はれ「カロリーネン」及「マリヤネン」は千六百萬「マルク」を以て獨乙に賣渡すを強要せらるゝに至り最古の最大なりし歐洲殖民國の西班牙は現時に於ては殖民地として僅に亞弗利加に於て「ヘルナンドポー」島「アンノボン」島「カナール」島「カメルン」の南なる「リナムニー」、北西亞弗利加の海岸「リヲデルヲロー」及「モロッコ」海岸に於ける「プレジヂヤス」を有するに止まり佛國との協約に依り「リオデルヲロー」地方の面積は十九萬平方「キロメートル」ムニ「地方」は二萬五千平方「キロメートル」に制限せられたり

「ポルトガル」は曾て一等級の殖民國に列し亞弗利加西岸東岸「アラビヤ」海沿岸、印度西岸、後印度及支那海岸及「モルツケン」群島等に其殖民地を有し南米に於ては金及「ダイヤモンド」に富む「ブラジリエン」を領有したるも「ブラジリエン」は千八百二十二年に本國より獨立し「阿弗利加」及「亞細亞」に於ては十六世紀以來其領土の

大部を「アラビヤ」和蘭及英國の爲に奪はれたり現時「ポルトガル」の領地に屬するものは僅に「阿弗利加」に於て「カツブウェルデー」「サントトローメー」「プリンチプ」諸島「ポルトガル」領「グイニヤ」「アンゴラー」「ポルトガル」領東「アフリカ」を「亞細亞」に於ては「ポルトガル」領印度「ゴア」「ヂウ」「ダーマン」「チモール」東半及澳門等を有するに止まる「ポルトガル」は近年其「阿弗利加」に於ける殖民地を擴張せんことを力とめたるも其本國の政治關係と共に其殖民地も亦英國に經濟上從屬することを免かる能はざりき然れども近時各國に於ける不斷の殖民競争熱は遂に「ポルトガル」の政策にも變更を及ぼし千八百五十二年度豫算は其殖民地の開發に對し僅に十八萬「マルク」を支出するに止まりしものか千八百七十年以後二十七年間の總支出は一躍して其狭小なる殖民地の上に一億四千八百萬「マルク」を數ふるに至れり從て千八百五十三年以來關稅及其他の收入を六倍の多きに上ぼし其歳出も一躍して三百七十三萬「マルク」より二千三百三十萬「マルク」の多額に上ぼり其收入の不足は常に其本國の負擔を爲すに至れり

和蘭は其本國の小なるに拘はらず今日尙ほ殖民國としては第二階級にあり然

れども之を其從前の廣大なる領地に比すれば現時は固より衰運に向ふもの云ふへし十七世紀の終に在ては其領地は「ニューヨルク」「ノイアムステルダム」「北ブラジリオン」「グイニヤ」「アンチルレン」「セイロン」「喜望峯」及「ズンダ」諸島に及へり「ズンダ」諸島に於ては和蘭は千六百十一年に「バタウィヤ」を設立したるに始まり爾來其貨物を盛に前印度、支那及日本に輸出せり其後和蘭は「ニューヨルク」「セイロン」「喜望峯」等の大殖民地を英國の爲めに割取せられたり和蘭は「スバニヤ」及「ポルトガル」と異なり其殖民地たる「ズンダ」「諸島」「ニューグイニヤ」の西半、蘭領「グイニヤ」「クラサヲ」等を經濟的に發展せしめ其本國の狭小なるに拘はらず其殖民地に依り其國富と商業の繁盛とを贏ち得たり然れども和蘭は近時漸く殖民地の歳計に付其不足を見るの狀あり即ち蘭領東印度に付ては千九百〇四年に千二百三十三萬七千二百十八「グルデン」の不足を見たり又蘭領「グイニヤ」及「クラサヲ」に付ては千九百〇二年には四十四萬四千八百七十二「グルデン」の不足を見たり蘭領東印度の守備兵は全く義勇兵を以て組織す千九百〇四年の調査に依れば千五百四十三人の士官と三萬六千六百四十九人の兵士を有す其中歐人は一萬

二千九百四十人に過ぎず其東印度に於ける派遣軍艦は千九百三年の調査に依るに其數大小合計二十六艘乗組人員三千五百十三人を有するに止まる爪哇及「スマトラ」に於ける鐵道延長は千九百二年に於て二千三百六十七キロメートルに達し東印度全體の電信線延長は千九百二年に一萬二百七十三キロメートル同電話線延長は二萬四百六十七キロメートルに達せり

英國は世界の最大殖民國なるも十七世紀前は寸毫の殖民地も之を有せざりき始て千六百二年東印度會社に特許狀を交付するに依り殖民國の列に入れり英國は忽ち各國に超越するの海軍力を養成し之に依り漸く他の殖民國と力戦を試み遂に廣大なる殖民地を割取したり即ち西班牙より西印度諸島を、和蘭より「ノイアムステルダム」を、佛國より「カナダ」及前印度を奪取せり英國の殖民政策は西班牙及ポルトガルとは全く其根本觀念を異にし金銀以外に豊饒なる土地の上にななる富源の存在することを確認せり然れども英國も亦他の殖民國と同じく其始は獨占的政策を採りしも北米合衆國の獨立に依り其迷夢を覺醒し速に此方針を改め爾來は大殖民地には出來得る限り大なる自治を保有せしむる

に依り米國の覆轍を見ることを避けたり而して其米國に於ける喪失は其後亞細亞「アフリカ」及濠州に於ける偉大なる成功により優に之を補ふて餘りあり現時は何れの大陸、何れの大洋にも英國の殖民地を見ざるものなきに至れり千八百九十九年には「トンガ」島及獨乙より取得したる南「サルモン」島を英領と爲し南洋に於ける政治的分割を終了せり千九百一年には濠州大陸の五殖民地及「タスマニヤ」を一團結せしむることを得たり英國は今や凡ての殖民地を以て本國と共に強固なる一大帝國及一大經濟團を形つくらんことを努力したるも各殖民地の利害の衝突は其成功を急に收めんことは甚た困難なるか如し關稅同盟の實行計畫の如き其一例なり

英領殖民地は印度を除くの外總て殖民省の管理に屬し各地に總督を置き其行政の責に任せしむ駐在軍隊の數は印度を合し歐人の數十六萬六千人にして其他は土人より成る軍隊を以て組織す兵數より云ふときは土人兵其中心を占む大殖民地には常備兵あり、即ち「カナダ」には四萬七千人、濠州には二萬人を備へり英國か其殖民地及外國に於ける勢力範圍を艦隊に依りて保護するは盛にして

千九百四年には百五十五艘を下らざる艦隊を存し地中海に五十七艘、米國の東岸には十七艘、米國の西岸に四艘、喜望峯に九艘、印度及東アフリカに八艘、支那に三十九艘、濠州に十二艘出動せり其他「カナダ」印度及濠州には殖民地の特別艦隊あり其乗組員は總て英國の海軍々人を以てせり英領殖民地の經濟上の發達は西印度諸島を除くの外は概して頗る良好なり英國の殖民地は各自特別の豫算を有し其特別會計の収入か支出を辨する能はざる場合に限り本國の補助を求むるものとす又英國殖民地の擴大に力ありし殖民地會社は一切其經費は自辨として本國の補助を求めざるを原則とせり故に英國か其廣大なる殖民地の爲めに負擔する費用は極めて少なく即ち千八百九十九年—千九百年には百四十五萬八千八百四十「ポントステレーリング」千九百三年—千九百四年には百四十二萬千七百六十八「ポントステレーリング」を數ふるに過きざりき固より此以外に於て英國は其殖民地に出動せる艦隊及常備軍隊の爲めに巨額の支出を要するは勿論なりとす英國殖民地の財政は甚た佳良にして唯「キペルン」島か不斷補助を要すると一、二の西印度諸島か砂糖の産出の不良なる爲め財政上の補助を要す

るあるのみ印度及濠州の國債は著しく増加せるも之か爲めに必要なる生産的事業即ち鐵道、電信、灌漑事業等か施行せられたり千八百九十九年の調査に依るに英領殖民地の總收入は一億四千八百三十六萬二千七「ポンドステレーリング」にして其中印度一億四百九十五萬五千八百十九「ポンドステレーリング」濠州三千三百三十五萬三千五百六十二「ポンドステレーリング」を占め其總支出は一億四千四百六十七萬四千七百七十六「ポンドステレーリング」にして其中印度は一億八十三萬五千八百三十六「ポンドステレーリング」濠州は三千八百八十萬四千七百六十七「ポンドステレーリング」を占めたりき國債は亦千八百九十九年の調査に依るに總額五億六千六百五十一萬九千三百三十「ポンドステレーリング」に上はりたるも其大部は印度及濠洲に關するものなりき

佛國は十七世紀に於て亞細亞及亞米利加に大なる殖民地を有し「ルドウイヒ」十四世の時は最も熱心に其擴張を經營したりき即ち北亞米利加に於ては千六百八年に「ケーベック」を設けたるを始とし漸く「カナダ」「アカヂェン」及「ニューファンドランド」等に殖民し千六百八十二年には「ルイジャナ」を設くるに至れり亞細亞に

於ては佛國貿易會社をして先つ後印度に着手せしめたり中央亞米利加及南亞米利加に於ては「スバニヤ」より「ハイチ」島を取得したるを始とし小「アンチルレ」島及南米に漸く其殖民地を取得せり然りと雖此等の殖民地の大部は佛國の革命及「ナポレオン」戰役中に英國の奪取する所と爲り「ルイヂャナー」は亦千八百三年に於て北米合衆國に讓渡するに至れり而かも佛國は千八百三十年に亞弗利加に於て新に「アルゼリー」を取得したる以來再び殖民地の獲得を力ごめ今は其殖民地の大きは英國の次位に列するを得たり即ち南洋に於て千八百四十二年に「ゲゼルシャフト」及「マルケサス」諸島を千八百五十三年に「ニューカレドニヤ」島を取得し亞細亞に於て千八百六十二年より八十四年に至るまでに「コーチンシナ」「カンボチャ」「アンナン」及東京を取得して佛領印度殖民地を設立し之を基礎として「シイヤム」及南支那に其勢力を開展せんとせり亞弗利加に於ては千八百八十一年に「トニス」千八百八十三年に「ラボック」を取り北「アフリカ」と「スダン」地方との連絡を「サワラ」に依り恢復せんことを力ごめ千八百九十三年には「チムバツク」を取り「ダホーム」を征服して「ニゲル」の中流に達し更に「サドベ」地方を征服し

佛領「スダン」と佛領「コンゴ」を合して一の北「アフリカ」大殖民地を成立せしめんとしたりしも英國の利益「ハシヨダ」と衝突し千九百四年に於て英佛二國の協約に依り其阿弗利加に於ける双方の勢力範圍を確定せり前數世紀以來佛國の殖民熱の目的たりし「マダガスカル」島は千八百九十五年に於て全く佛國の征服する所と爲れり此の如くして佛國は其殖民地の爲に莫大の支出を負擔せり千八百九十四年には「アルゼリー」を加へ其支出總額一億四千四百萬「フラン」に達し千九百四年には亦一億八百萬「フラン」を數へたり其中軍事上の目的の爲にするの支出は千九百一年に七千九百萬「フラン」を超へ其殖民地支出總額の約七十七「プロセント」を占たり民政費は其の殖民地支出總額の約十八「プロセント」を占めたり佛國は殖民地の爲め已に千八百五十一年より九十八年迄に十二億三千六百萬「フラン」を支出せり此中には「アルゼリー」の經費を含ます若し之を加ふるとせは五十億「フラン」に上ほれり佛國殖民地は其土地の廣大なるに拘らす其經濟上の價値は著大ならず「アルゼリー」を除くの外は本國民の移住亦多からず故に佛國の殖民地は既して英國殖民地の如く自治を享有するに至らす其行政も亦

純然たる官僚主義なり而して佛國殖民地は貿易上未だ十分なる効果を收むるに至らざりき何となれば佛國と其殖民地との貿易は千九百二年に「アルゼリー」及「トニス」を合して十億千五百萬フランに上ほり毎年其總額に於て増加するを認むと雖其殖民地と外國との交通は年々著しく退歩の狀を顯はし其總計に於て未だ眞正の進歩あるを認むる能はされはなり殖民地鐵道の建設に關しては佛國政府が二十年來計畫する「アフリカ」の「サワラ」鐵道は未だ完成に至らず唯「アルゼリー」「トニス」間の鐵道圈及「セネガムビエン」「ニーゲル」地方間の鐵道圈は最も熱心に經營せられたり佛領印度支那に於ては大なる鐵道計畫の設計あり之か爲に佛國政府は七十五年賦償還を以て二億フランの大公債を起せり又支那との協定に依り更に雲南鐵道をも計畫せり佛國の殖民地鐵道の延長は千九百二年には凡そ二千二百二十四キロメートルに達せり殖民地の軍隊は陸軍省の管轄に屬し本國の軍隊と土人の軍隊との二種に分たれたり佛國は殖民地防衛の爲に千九百四年に地中海に三十五艘、大西洋に七十艘、印度洋に六艘、東亞細亞に二十三艘、太平洋に四艘の軍艦を配置せり

獨逸國は千八百八十四年迄は全く海外殖民地を有せざりしも今日は英國佛國に次て第三の地位に立つの殖民國と爲れり千五百二十八年より五十五年迄に於て「ウエネズラ」の一部を「スペイン」の帝室より分配せられしことあり又「ブランドンブルグ」大侯が千六百八十年に「ゴルドキユステール」八十七年に「アルグインキユステール」に殖民を試み「デネマルク」より西印度の「サントトマス」島を租借したることありしも「フリードリヒ・ウイヘルム」第一世は千七百十八年に一切此等の殖民を廢止せり「フリードリヒ」第二世亦殖民に關して消極論を唱ひたり然れども十九世紀に於ては獨逸人の毎年海外に移民するもの數千人を超へたるも（北米合衆國の移民中獨逸人は實に其五百萬人を占むるに至れり）當時の政治狀態は政府をして殖民的活動を試ましむるを許さざりき固より移民組合又は移民會社等か其移民に關し特別の努力を用ひ貧民又は無業者の方面に向て大に奨勵する所ありしは明かなるも政府が全く之に干與することなかりしは其效果をして偉大ならしむることを得ざりき獨佛戰爭後に至り始めて獨逸の殖民は其發展を見たり然れども其始めは宰相「ビスマルク」は單に南洋諸島「トンガ、サ

モア等の諸島の會長と通商和親條約を結ひ、サモア島の「サルハタ」「マルシャル」島の「ヤルイト」「ノイブリタニア」群島の「ミオコ」等を石炭貯藏所として取得するに止めたり千八百八十年に於て帝國議會が「サモア」問題を否決したるより政府は始めて千八百八十四年より新なる殖民經營を政府の保護の下に計畫し外敵殊に英國政府の抵抗に對して防護すへきことを決定せり獨乙殖民會社の設立は此結果なりとす即ち千八百八十四年四月二十四日の帝國宰相の電報は「ブレーメン」の商人「アドルフ、ユデリツツ」が千八百八十三年より南西「アフリカ」に占領したる領土の保護を宣言し之を以て新なる獨乙殖民政策の誕生日と爲せり同年に於て「ハンブルグ」の商人が「カメルン」に於ける（千八百八十四年六月十四日）占領地及「トゴ」に於ける（千八百八十四年七月五日）占領地を獨乙政府の保護の下に置き同時に「カール、ペーテル」は獨乙殖民會社（後の獨乙東アフリカ會社）の爲に「サングバル」の後方地域を「オットー、ヒインシュ」は「ニュギニア」會社の爲に「ニューグイニヤ」の北東岸を「ニユブリタニア」群島（自今ビスマルク群島と稱す）と共に取得せり千八百八十五年「サロモモン」四月六日及「マルシャル」島十月十五日を獨

乙の保護の下に置き又千八百八十五年五月十七日及二月二十七日の勅定保護狀に依り曩の二會社の占領地を獨乙の保護領として公認せり「ビスマルク」の老練なる手腕は速に獨乙殖民地の境界に關し英國及佛國との間に平和なる解決を告げ何等紛擾を見ることなかりき唯其後方地域に關しては其後左に掲ぐる數多の條約に依り之を解決し獨乙領殖民地をして現在の狀態に到達せしめたり

「トゴ」

千八百八十五年十二月二十五日、千八百九十年七月一日、千八百九十七年七月九日、千八百九十九年九月十四日の條約

「カメルン」

千八百八十五年十二月二十四日、千八百九十三年九月十五日、千八百九十四年三月十五日の條約

獨領南西「アフリカ」

千八百八十六年十二月三十日、千八百九十年七月一日の條約

獨領東アフリカ

千八百八十六年十二月三十日、千八百九十年七月一日、千八百九十年七月三十日、千八百九十三年七月二十五日の條約

獨領「ニューグイニヤ」

千八百八十六年四月十日、二十五日、二十九日、及千八百九十九年九月十四日の條約

「マルシャル」島

千八百八十六年四月十日の條約

千八百九十九年四月一日に政府は「ニユギニヤ」會社の領地の全部を四百萬「マルク」の補償及五萬「ヘクタール」の土地提供に代へて政府に回收せり爾來更に左に掲ぐる所得を加へたり

(一) 千八百九十八年三月六日の條約に依り千八百九十七年九月に占領し千八百九十八年三月二十七日の勅令を以て獨乙保護領たることを宣言したる膠州灣

(二) 千八百九十九年六月三十日「スペインヤ」より買受け「ニユグイニヤ」總督の下に置きたる「カロリナー」「パラウ」「マリヤネン」諸島

(三) 千八百九十九年九月八日獨英米の「サモア」問題に關する取極に依り取得せる西方「サモア」島たる「ウポルー」「マナノ」「アポリマー」及「サワイイ」諸島

此の如くして獨乙領殖民地は遂に二百五十九萬七千八百八十平方「キロメートル」の面積と千二百萬の人口を有するに至れり即ち左表に示す如し

獨領殖民地

アフリカ所在	面積	人口	一平方キロメートル當人口
トゴ	八七、二〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	二三人
カメルン	四九三、六〇〇	三、五〇〇、〇〇〇	七
獨領南西アフリカ	八三〇、九六〇	二〇〇、〇〇〇	〇・二
獨領東アフリカ	九四一、一〇〇	六、一六四、〇〇〇	六
(二) 大洋州所在			
ウイヘルム皇帝地方	一八一、六五〇	一、一〇〇、〇〇〇	〇・六
ビスマルク群島及サロモソネン島	五七、一〇〇	二五〇、〇〇〇	四

カローリーネン諸島	一、四五〇	三九、〇〇〇	二七
マリヤネン諸島	六二六	一、九三八	三
マルシャル群島	四〇五	一五、〇〇〇	四
サモア諸島	二、五八八	三二、八一五	一二
(三) 亞細亞所在			
膠州	五〇一	八四、〇〇〇	一六八

獨乙の殖民地は膠州灣を除くの外は皆獨乙帝國の領土なりとす唯膠州灣は支那の領土にして無償を以て九十九年間租借の形式の下に支那より其主權を引渡されたるものとす各殖民地には總督を置く唯「マルシャル」群島には地方長官のみを置けり此等は皆帝國宰相に直屬す帝國宰相の下には殖民地の事務を行ふか爲めに拓殖局及拓殖會議を置く

膠州灣の總督は海軍士官にして海軍省の監督の下にあり各殖民地は之を數地方に分割し各地方に長官を置く即ち「トゴ」は二、「カメルン」は四、「南西アフリカ」は六、「東アフリカ」は八、「ニュギイニヤ」は四、「マルシャル」は一、「サモア」は十一、膠州灣は二の地方に分たる秩序の維持及奴隷賣買の禁止の爲め一般に殖民地には土人よ

り成る警察官及軍隊を置き獨乙人の士官及下士をして之を指揮監督せしむ唯南西アフリカ及膠州灣には専ら獨乙人の兵士を以て組織する軍隊を置けり千八百九十六年七月十六日の防備軍條例に依れば防備軍は陸軍及海軍より分割せられ其任務終了と共に再び其本隊に復歸するの條件を以て全く帝國宰相の監督權の下に立つものとす

伊太利は「ロマネン」人種中最も強き移住力を有し且人口夥多なるを以て亦殖民國の資格を有するものと云ふへし千八百八十一年に紅海沿岸に於て「アサターブ」灣を取得し千八百八十五年に紅海に於ける最良天然港たる「マスサナー」を取

得し此二港の附近及後方地帯を「エリトリア」殖民地の名稱の下に統轄せり同時に「ダナキール」及「ソマール」地方を「グアルタフイ」岬より「ズエブ」河に至る迄其保護領に移し之を「ソマリヤ」と稱せり伊國は更に其勢力を内地に侵入せしむるの目的を以て千八百八拾九年に一時「アベシニエン」地方を其保護國と爲せしも千八百九拾六年に「アベシニエン」は天佑多き戦闘に依り伊太利の羈絆を脱することを得たり「エリトリア」地方の歳出は千九百三年より其軍事費に關し大削減を加

へたるも尙ほ千九百四年及五年の豫算に於て収入二百五十萬「リル」に對し支出七百二十五萬「リル」に上ほるを見たり伊太利は北「アフリカ」に於て多年の苦心經營其效を奏し千九百十一年九月五日「トリポリス」を併合し土耳其との間に數多の辛勞的戰鬪を経たる後權利の確認を得たるは實に近時に於ける大成功と云ふへし今伊國殖民地の面積及人口を擧ぐれば次の如し

地方別	面積	人口	一平方キロメートル當人口
トリポリ地方	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一
エリトリア地方	一一八、六一〇	二七八、八九三	二・一
ソマリヤ地方	三五七、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇	〇・八

米國は最も新しき殖民國なるも廣大なる海外の領地を有せり千八百九十七年に布哇列島を占領したるを始とし千九百年に其米領たることを宣言せり其後米西戰爭の結果西班牙より「プエルトリコ」「ヒリッピエン」「マリヤネン」「グアム」諸島を取得し又新に成立したる「クーパー」共和國に對しては其勢力を擴張せり千八百九十九年「サモア」島の分割に際し「トゥトウイラ」及其附近の諸島を取得し

千九百四年には「パナマ」海峡の兩岸各十英里の地方を獲得せり今米國の殖民地の面積及人口を擧ぐれば即ち左の如し

所在地	面積	人口	一平方キロメートル當人口
布哇	一六、七〇二	一九一、九〇九	一一・一
ヒリッピエン	二九六、三二〇	八、四六〇、〇五二	二九
ホルトリコ	九、三三四	一、二五一、五七九	一二・五
グアム	五・四	一一、二四〇	二四
サモア	一九九	七、二五一	三六
パナマ海峡地帯	一、一六〇	六二、八一〇	五四

第二節 英國殖民史の概要

英國殖民史の概要に付ては千九百八年發行「マイエル」氏百科字典中第八卷第三八二頁以下に掲ぐる所は善く其大綱を明にせり故に以下之を抄譯することゝせり
英國の殖民經營は「エリサベス」女王の時代より多少の企を見たるも當時は未だ

確實なる海外殖民を爲すものと云ふ能はず「ヤークコップ」第一世が千六百六年に「ロンドン」及「プリマウス」の二會社に北米殖民の特許狀を附與したるときを以て始めて英國殖民史の第一頁を開けり「ロンドン」會社は千六百七年「ジェムスタウン」を根據地として「ウイルギニヤ」方面に殖民せり「プリスマウス」會社は千六百二十年に「ニューイングランド」地方即ち今日の「マサチウセツト」に於て「ニュープリマウス」殖民地を設けたり爾來英國人は主として其本國に於ける宗教上の壓迫を脱せんか爲に自ら進みて北米に移住を企つるもの非常に其數を増加し十七世紀の終には北米の大西洋海岸を「メイン」より南「カロリナ」に至る迄全く英國殖民の占領に收めたり此地方に於ては英國より移民し其地方在住の土人と戦鬪の結果直接に其土地の支配權を得たるもの多し唯「ニューヨルク」及「ニューイエルセイ」のみは一度和蘭の殖民地に屬したるを千六百六十四年以來英人が攻撃を加へ千六百六十七年の「ブレダ」條約に依り之を英領と爲せしものなり

英國が南米に確固なる根柢を設けんとするの企は十七世紀に於ては特に稱すへきの成績なかりしと雖も西印度に於ては千六百十二年に「ベルムダス」島、千六百二十三年及二十四年に「セントクリスパエル」島及「バルバドース」島に殖民したるを始として漸く「レワード」ウイルギニン及「バハマ」の諸島に殖民を及ぼせり其中最も價值ありしものは「ジャマイカ」島にして從來西班牙領に屬したりしを千六百五十五年英國に奪取せるものなり

英國殖民史の第一期に於ては其重を米國の上に置きたりしも尙ほ亞細亞及亞非利加に於て二三の殖民地を有せり此等の殖民地は英國の移民を以て純然たる英領殖民地を組織せんとするものにあらずして單に軍事上又は貿易上の中心點を發見するを以て其目的と爲すものなり即ち東印度に在りては千六百年より特權を附與したる東印度會社をして貿易に従事せしめ千六百十二年「スラート」に於て最初の互市場を設け千六百三十九年に「セントジョージ」に城塞を設け千六百五十一年に和蘭より「セントヘレナ」島を取得し其印度航路の中間碇泊地に供せり千六百六十八年には「ボムベ」島を占領し千六百九十一年には「セントダウイ」の城塞を佛領「ボンデヘリー」の南方に設け其後數年にして「カルカッタ」に「セントウイリヤム」の城塞を設けり此等の僅少なる地點と新に英國が「ス

マタラ島上に設けたる殖民地とは共に十七世紀に於て英國が軍事上の目的よりして東印度に占領せる殖民地の主要なるものに屬せり亞弗利加の西岸に於ては「アフリカ」會社に貿易上の特權を附與し「ガムビヤ」「ゴールドキユスター」及「シルラレーナー」等に於て殖民に着手せしめたるのみ

第十八世紀の始に至り英國の殖民政策は全く性質を一變せり英國の海外殖民は其第一期に在りては全く之を私人又は會社の經營に放任し政府は單に之を公認するか又は其の特權を附與するに依り一時若は繼續的に保護を加ふるに過ぎざりしか十八世紀に於ては英國は全く其態度を改め其殖民地の擴張を以て國家政策の最も重要な急務なりとし先づ英國海軍の大擴張を斷行して英國をして當時第一位の海軍國たらしめ佛國和蘭及西班牙等の競争國に對し優勝の地位を占めたり其結果は英國軍をして歐大陸上に勝利の月桂冠を戴かしめたり即ち十八世紀の大戦たりし西班牙の繼承戰役に於て千七百四年に「ジブラルタル」を取得して地中海西方の門口を扼し千七百八年には「メノルカ」島を取得し其軍事上の地位を強固ならしめたり此戰役の終結を告げたる「エトル

ヒト」條約は英國をして此二箇の占領地を確的に取得せしめ且米國の方面に於て著しく其領土を擴張せしめたり即ち佛國が千六百七十年以來「フドンソベイ」會社をして其移民を力めしめたる所の「フドンソベイランド」及「千五百八十三年以來より争はれつゝある「ニユフンドランド」を佛國より取得し次て千六百二十一年より二十三年の間に小殖民地を設けたる「アカヂェン」地方を獲得し其他西班牙より黒人輸入の特權を得て西印度の上に著大なる貿易上の特權を保有したり

英國の殖民地擴張に關し重大の影響を與へたるものは千七百三十九年以來西班牙に對し及千七百四十一年以來佛國に對し起りたる戰役なりとす此戰役は歐洲に於ては千七百四十八年の「アアヘン」條約に依り一時鎮靜を見たるも再び東印度及米國に於て開始せられ千七百六十三年の「巴里條約」に依り漸く其終結を告げたり此戰役中英國は北米及東印度に於て其反抗の強大なるものありしに拘はらず莫大の收獲を得たり即ち「カナダ」地方に在りては千七百五十九年「リエベック」に於ける「ウォルフ」大將の大勝が終局の決定を爲し東印度に於ては始

め佛國人が大勝を得千七百四十六年には「マドラス」を奪ひ殆んど南印度の大部を制服せんとしたるに拘はらず「ローベルト、クライブ」の努力大成功を爲し千七百五十七年「プラッシー」に於て佛國及之と同盟せる「ナポール」の軍に對して大勝を制したるは實に東印度の將來を確的に決定するものなりき「巴里條約」は英國が北米に於ては「カナダ」全部「カッパブレトン」及「ノイブラウンシュエワイヒ」を獲得し「ルイジャナー」「ミッシュピ」及「フロリダ」を其版圖内に加へ、西印度に於ては「グアナダ」「サントウインセント」「ドミニカー」及「トバコ」諸島を取得し且東印度に於ては英國が全權を占握せることを公認せり佛國は爾來東印度に於ては僅に「ポンドヘリー」及「二三の小區域」を保留するに過ぎずして殆んど全く東印度を抛棄し千七百七十年には其佛國東印度會社をも解散するに至れり

東印度に於ける英國の支配權は爾來非常の速力を以て擴大せられたり即ち「ベングル」は「クライブ」時代より英國東印度會社の支配に屬し、南印度は數多の苦戦を経て千八百三十二年より全く英國の行政の下に立てり、「マラッテン」は千八百十八年迄に征服せられ「シント」及「パンジャブ」は十九世紀の上半期に於て占領せ

られ「アウヂー」は千八百五十六年に英國の直接管理の下に置かれ「カシユミール」は千八百四十六年より亦英國の保護國と爲れり後印度に於ては一千八百五十二年に「ベグ」州を占領し千八百八十六年に上部「ビルマ」を英領に移せり東印度の西方に於て千八百七十六年より「ベルチスタン」を英國の保護權の下に置き又北方に於ては「アフガニスタン」の上に露國と争ひつゝ其勢力を發展せり千九百四年よりは從來全く閉鎖せられたる西藏に向て猛然其勢力の伸張を力めたり千七百六十三年の「巴里條約」は此の如く英領印度の著大なる發展を齎らせるも其間に英國は又北米に於ける大領土を喪失せり即ち千七百七十四年に發生したる北米十三州の一揆は英國をして其北米に於ける重要な領土の一半を失はしめ「ウエルサイユ」條約に於て北米合衆國の獨立を公認するの止むを得ざるに至らしめたり佛國及「スパンニヤ」は此戰役に於て北米合衆國の獨立を補助したるに依り「ウエルサイユ」條約は英國をして此二國に對しても數多の犠牲を拂はしめたり即ち佛國に「ニュフントランド」の附近に在る「サントピルレー」及「ミクエロ」島、西印度に於ける「トバコ」島を割讓し西班牙には地中海に於て「メノルカ」島、北

米に於て「フロリダ州」を與へたり然れども英國は其後幾許ならずして「ナポレオン」二世及其同盟國に對し大勝を得たる結果千八百十四年の「巴里條約」は英國をして印度以外に於て亦世界第一の殖民國たるの地位を獲得せしめたり即ち英國は歐洲に於ては千八百年に佛國より地中海上の第二前衛とも謂つへき軍事上の要地「マルター」島を割き千八百七年には北海に於ける軍事上の要地「ヘルゴーランド」島を得、中央「アメリカ」に於ては「トバゴ」島を恢復し「セントルキヤ」島を佛國より「トリニダ」島を西班牙より割取せり、南米に於ては和蘭の領地を削り英領「グイニヤ」を設置して始て其大陸に着手するを得たり、印度洋に於ては千八百十年に佛國の押領せる「マウリチウス」島及和蘭か千七百九十五年より占領せる「セイロン」島等を奪略し「アフリカ」に於ては和蘭の大殖民地「カププラント」を千八百六年以來占領して英領に移したり此「カププラント」の取得は英國をして將來南「アフリカ」に於ける主權者の地位を占握するの基礎を爲さしめたるものにして佛國革命時代に於て英國の最も顯著なる成效と謂ふへし

此時の終と共に新なる英國殖民史の第三期を開始せり即ち英國か其競争國た

る歐洲諸國の負擔を以て其領土を擴張するの時代は茲に其終を告げ英國は千八百十四年以來武力に依り歐洲諸國より殖民地を奪ひたることなかりき千八百七十八年に「キイペルン」島を取得せるも是れ土耳其より其同盟國として平和に取得せるものなり英國の殖民的運動は此時代より其方面を大變轉し從來は主として米國に向たるも之よりは東方に轉して「アフリカ」「アジア」及濠州の上に大發展を求めたり

北亞米利加に於ては英國の殖民地は漸次再び擴張せられ千八百十一年には「セント河」に沿ふて「マニトバ」殖民地、千八百四十九年には「ワンタビー」島殖民地、千八百五十六年より「ロッキー」山と太平洋との中間に「コロンビヤ」殖民地を設けたり「カナダ」は千七百九十一年に上部「カナダ」下部「カナダ」の二州に分割されしも千八百四十年より再び合同し「ニュスコットランド」は千七百八十四年には「ニュブラズンシユワイヒ」及「カププラント」の二州を分立せしも「カププラント」は千八百二十年より再び「ニュスコットランド」に合同せり「プリンツエドワード」島は千七百七十年以來獨立の殖民地と爲れり此の如くして北米に發達したる數

多の英領殖民地は十九世紀の中間より大合同を爲さんとするの形勢を生し千八百六十七年先づ「カナダ」「ニューブラウンシュウイヒ」及「ニュスコットランド」の三州が合同して「ドミニオンオフカナダ」なる聯邦を形作りしを始とし次て千八百六十九年には「フドソンベイラント」を合し千八百七十年には「マニトバ」州千八百七十一年には「コロンビヤ」及「ワシントン」千八百七十三年には「プリンツ、エドワード」島を合併せしめ千八百八十年には終に「ニューファンドランド」を除くの外其他の北米に於ける英領殖民地を全く合同團結せしめ茲に北米に於ける大聯邦「カナダ」領の成立するを見たり

西印度に於ては英國は其領土内に千八百三十四年の法律を以て奴隷廢止を斷行せり此地方に於ける英領殖民地は爾後特別の擴張を見ざりき此地方は行政上(一)「ベルムダ」(二)「バハマ」(三)「ジャマイカ」(四)「レワード」(五)「バルバドース」(六)「ウインドワルド」(七)「トリニタト」及「トバゴ」の數者に分割せられたり、中央「アメリカ」及南「アメリカ」に於ては英領「ホンドラス」及英領「グイニヤ」の二者獨立の殖民地を形作り「アメリカ」の最南端に在りて千五百九十二年に發見せられたる「フアルクランド」

島は亦英國の主權の下に置かれ其南方に在る無人島「南グラルギヤ」亦英領に屬せり

「亞細亞」に於ては東印度「セイロン」島及「マレヂウエン」群島を除くの外は英領殖民地は概ね極東一帯の多島海中に散在せり即ち「マレイ」海に在りては英國東印度會社は千七百八十六年に「ピナン」千八百年に其對岸地方を土人より取得し千八百十九年には「シンガポール」を占領し千八百二十四年には「ジョホール」の「ズルタン」より其權利を取得せり同年に蘭領「マラツカ」殖民地と「スマタラ」に於ける英領殖民地とを交換し其上に千八百六十七年以來東印度より分離して快速の發達を爲したる海峽殖民地を成立せしめたり其附近の「マレイ」土人國は此時より海峽殖民地政府の保護の下に立ちしもの頗る多し英國が「ボルネヲ」島に殖民地を得んとするの企は英國の東印度會社より試まれしも第十七世紀及第十八世紀に於ては十分なる効果を見る能はざりき然るに千八百四十一年に於て英國の代表者「ジエムス、ブルウク」「アルナイ」の「ズルタン」より「サラワーク」附近の地帯を取得し千八百六十一年、千八百八十二年及千八百八十五年には漸く其地域を擴大

せり此地方は今日に在ては英國の保護の下に立ち、ブルークの甥か英國士官の官職の下に之を支配せり千八百四十六年には、ブルナイの「ズルタン」が「ラプアン」島を英領に移し、ブルーク「其最初の總督に任命せられたり千八百七十二年及千八百七十八年には男爵「フーパーベック」及「サーアルフレット、デント」が「ボルネオ」島の北方に於て廣大の土地を取得し其管理の爲めに千八百八十一年に北「ボルネオ」會社を設立せり、海峽殖民地と共に驚くべき大發展を見たるものは千八百四十一年支那より割取したる英領殖民地香港なりとす此殖民地は千八百六十一年以來其對岸に向て其領土を擴張せり、千八百九十八年に於て英國は朝鮮の對岸なる威海衛を九十九年間租借せり、「スエス」の地峽の開通以來其印度に對する航路の安全を保持せんか爲に英國は印度洋の西方に於て數多の小殖民地を設けたり即ち千八百三十九年に「アデン」半島を得て之に強大なる要塞を設け千八百五十七年には要害堅固の「ペリム」島を占領し其後漸次に「アデン」地方を擴張し千八百五十四年には「クリヤムリヤ」島、千八百七十六年には「ソコトラ」島を取得し且千八百八十年以來數多の條約を締結して英國の保護權を「アデン」地方附近の

「アラビヤ」人及「アフリカ」の「ソマリヤ」海岸の一部に擴張せり千八百八十七年の取極は此地方に於ける伊國の勢力範圍との限界を協定せり此地方の英領は印度に對する航路の保全を主眼とするを以て其行政は全く之を英領東印度政府の管轄に屬せしめたり

十九世紀に於て濠州に成立せしめたる英領殖民地は其廣大なる地域に於て全く新なる大「アングロサクセン」の國家を發達せしめたり千七百七十年「ジエムスクツク」が濠州の東岸に於て英國國旗を掲げ「ノイジウドワールス」の名稱を定めたるごきより先づ犯罪移民を以て其殖民を開始し千七百八十八年一月には其最初の犯罪移民は「シドニー」港に到着せり、言ふへからざる艱難の下に殖民の基礎を開きたるは實に濠州の最初の總督「アーサー、ヒリツプ」の功績と云ふへし牧羊の輸入は實に濠州殖民地大發展の種子にして爾來自由殖民一時に増大し千八百三年には此地方より更に「タスマニヤ」地方の移民を企つるに至り「タスマニヤ」に千八百二十五年より一の特別殖民地を形作り而して英國は千八百二十六年に西濠州及「クインズランド」に千八百三十四年に「ウイクトリヤ」千八百三十

六年に南濠州に於て其殖民を擴張せり「ニューゼーランド」に於ては最も眞面目なる殖民戦争行はれ千八百四十年より全く英領に歸屬したり其地方に於ける土人の頑強なる反抗は千八百六十二年「サー、ジョージ、グレイ」に依り鎮定せられたるも尙ほ小なる一揆は千八百八十六年までに屢繰返されたり濠州の開発に最も力ありしは千八百五十一年以來「ノイジエドワールス」に始まり次て各地方に顯はれたる大金鑛の發見と千八百四十年に「ノイジエドワールス」に始まり千八百六十八年には西濠州にも及ひたる犯罪移民の禁止の二者なりとす千九百一年には「ニューゼーラント」を除くの外濠州の英領殖民地を團結して一大聯邦を形作り即ち「コムモンウェルス、オフ、アウストラリア」之なり

大洋州に於ては千八百七十四年に「ヒジー」島を千八百八十八年には「ニユグイニヤ」の東南部を英領と爲し千八百八十七年には佛國との條約に依り「ニューヘブリヂユ」島を英佛共同の保護國と爲し其他數多の小島を英國の勢力範圍内に移したり

此の如くして英國は十九世紀の前半に於て濠州の占領を終了し後半期に於て

は其方面を轉して其全力を「アフリカ」大陸に傾注したり「アフリカ」大陸の分割は歐洲列強國間に於ける最近世の最も重要な問題なりき「アフリカ」大陸の北部に於ける埃及は眞正の意義に於て英國の殖民地にあらずと雖千八百八十二年以來全く英國の支配權の下に在り此に於て從來佛國より盛に争はれたるに拘らず千九百四年の條約は英國の埃及に於ける優先權を完全に公認せり

西「アフリカ」に於ては英國は千八百五十年に「デネマルク」より千八百七十一年に和蘭より「ゴルドキユステール」に於ける殖民地を買取り千八百六十一年に「ラゴース」地方及其後方地帯を買取り千八百六十六年には西「アフリカ」に於ける四箇の英領殖民地を「シルラレナー」の總督の下に統一したりしか千八百七十四年「アシヤンチー」戦争後再び「ゴルトキユステール」地方は「ラゴース」地方と共に「シルラレナー」より分離し千八百八十八年に「ガムビヤ」は亦「シルラレナー」より分離し、各獨立の英領殖民地を形作り千八百八十六年には「ラゴース」地方は亦「ゴルドキユステール」地方と分離せり千八百七十九年以來英國商會社後に「ニーゲル」會社と稱すは「ニーゲル」河地方に於て土人と數多の保護條約を締結して千八百八

十四年及千八百八十五年に「エール河」保護國を設立し、千八百九十三年より之を「ニーゲル」河沿岸保護國と改稱せり。西「アフリカ」に於ける各國の占領區域は千八百八十五年―九十九年に於て英國、佛國及獨逸國の協定に基く數多の條約に依り確定せり。「シルラレナー」地方も此時より七萬平方「キロメートル」の後方地帯を確定せられたり。千八百九十九年には「ニーゲル」會社は其財政上の打算よりして其行政權を抛棄して單純なる商事移民會社に變更せり。之より「ニーゲル」河地方には二箇の新なる英國直轄の殖民地、南「ニーゲル」及北「ニーゲル」を成立せしめ、千九百年一月一日より英國は西「アフリカ」に於て六箇の獨立の殖民地を有するに至れり。「サントヘレナ」島、「アスセンション」島及「トリスタン、ダー、クンハー」島亦英國の管轄に屬せり。

東部及中央「アフリカ」に於ては英領殖民地は十九世紀の下半期より其形を成せり。獨逸か曾て此地方に於て其立脚點を見出したるより英國は大に此地方に於ける領土の取得に注目し、千八百八十六年の英獨條約は此地方に於ける雙方の勢力範圍を確定せり。此條約に依り英國に許容せられたる地方は「サー、ウ、マツキ

ンノン」より指揮せられ、千八百八十八年に特許狀を附與せられたる東「アフリカ」會社の管理に放任せられたり。其獨逸國との間に起れる新紛擾は千八百九十年七月一日の條約を以て解決せられたり。此條約の結果獨逸國は「サンジバル」、「ベムバー」、「ウガンダー」及「ワイトランド」等を抛棄せり。此の如く擴大せられたる會社の領土は千八百九十一年に伊國殖民地「ソマールランド」に對し、千八百九十四年に「コンゴ」國に對して其境界を定めたり。然れども會社か此地方の管理を繼續するは甚だ困難なるを以て、千八百九十五年には會社は名義上の補償の下に特許狀を抛棄せり。會社の領地中「ウガンタ」地方は其以前に放棄せられ既に千八百九十四年より英國の保護領と爲れり。故に會社の其他の地方は此時より東「アフリカ」保護領の名稱の下に合一せられ土人の「ズルタン」は名義上の支配者と爲り實際は「サンジバル」及「ベムバー」の英國官吏に依り其行政を執行せられたり。英領東「アフリカ」は獨逸東「アフリカ」に依り英領中央「アフリカ」と區別せらる。其境界は獨逸「コンゴ」國との條約の外、千八百九十一年七月に於ける「ポルトガル」の協定に依り定まれり。而して「ニアサー」湖の西方の土地は英國の直轄領地と爲り千

八百九十三年より英領中央「アフリカ」と稱せらるる又其西方の土地は英國南「アフリカ」會社に依り管理せられたり

南「アフリカ」に於ては英領殖民地の擴張は不斷に強力なる和蘭殖民の抵抗を受けつゝ行はれたり即ち「カツプラント」に於ける「ビュレン」人は千八百三十六年以來「カツプラント」を出て一方は「ワランジュ」及「パール」河地方に一方は「ナタール」地方に殖民を試みたり「ナタール」地方は千八百二十四年に英國の殖民を見たるも英國政府は未だ其政權を主張せざりし地方なりき蘭人の此殖民運動に對する英國政府の態度は其始は甚だ不明にして何等の行動を見ざりしか「カツプラント」の總督は其新占領地に於て土人と苦戦しつゝある「ビュレン」人に對して今後は英國臣民と看做すことを宣言したり當時の英國本國政府は「アフリカ」に於ける領土擴張を喜はざるの狀ありたり此に於て「ブユレン」人は總督の宣言に拘はらず新占領地に於て獨立の政府を設け共和制の憲法を施行せり千八百三十九年「ロルド、ジョン、ルツセル」が殖民大臣たるに至り「ナタール」地方の占領の必要を決定し千八百四十二年に英國軍隊を進め千八百四十三年より「ナタール」地方を

英領殖民地と宣言せり此結果は「ブユレン」人の多數は其新移住地を見捨て更に「オランジュ」及「パール」河地方に集合し茲に奮闘苦戦を経て其獨立を主張し千八百四十八年に「オレンジュ」共和國千八百五十二年に「トランスワール」共和國の二國を成立せしめ「トランスワール」共和國は千八百五十二年「オレンジュ」共和國は千八百五十四年より其獨立自由國たるを公認せられたり然れども「オレンジュ」及「パール」河地方に於ける「ダイヤモンド」の發見は南「アフリカ」地方の價値を暴騰せしめたるより英國政府は再び其占領を計畫せり千八百六十八年に「オレンジュ」共和國の東方なる「バストラント」の併合を決定し「オレンジュ」共和國の之に異議あるや千八百六十九年の條約に依り兩國の間に之を分割したり其英國に屬したる部分は直に之を「カツプラント」に併合したるも千八百八十四年には再び分離して獨立の殖民地と爲せり千八百七十一年には英國は「ブユレン」共和國の反抗に拘はらず西「グリツカラント」を占領せり千八百七十四年より英國は南「アフリカ」に於ける英領殖民地と他の共和國の合同を計り之を一箇の英國直轄の一聯邦たらしめんことを企たり「ブユレン」共和國は之に對して大に反抗せるか爲

め英國政府は「ブレン」共和國と争ひつつある土人と握手して千八百七十七年に「サー、トマス、セプストン」をして「トランスワール」共和國は英領たることを宣言せしめたりと雖千八百八十一年に再ひ「トランスワール」共和國の獨立を認むるの止むを得ざるに至れり此に於て千八百八十四年英國は新に條約を結ひ南「アフリカ」共和國(是れ「トランスワール」共和國の自稱するところなり)か歐洲諸國又は土人と締結すへき條約の上に認可權を有するを以て満足するに止めたり「ブレン」人は此時より「ベツツウアンランド」を抛棄し(其南部は英領殖民地に編入せられ其他の部分は保護國として存在す)新に「ズルラント」を占領して海岸に到達せんことを力めたり此間に「トランスワール」に於ける大金鑛の發見は千八百八十五年以來亦南「アフリカ」に於ける領土獲得に關する慾望を高めしめ英國政府は千八百八十八年に「マダベール」及「マシヨナランド」を英領なりと宣言し其管理は千八百八十九年「セシルロード」に依り設立せられたる南「アフリカ」會社に委任し土人の頑強の抵抗あるに拘はらず千八百九十七年に其土地を全く征服するを得たり其後他の殖民國との條約に依り會社の占領地は英國の勢力範圍なる

ことを確認せられ千八百九十五年より其地方に「ローデシヤ」の名稱を付したり千八百九十六年の始より「シャムソン」は此地方(ローデシヤ)を根據として不斷に南「アフリカ」共和國に對して攻撃を加へたり而して南「アフリカ」の英領殖民地の最終にして且最も顯著なる擴張は終に長き時間準備せられたる後千八百九十九年十月を以て開始せる二箇の「ブレン」共和國に對する戦争に依り其效果を顯はせり即ち千九百年三月「オランジュ」自由國は英國殖民地として宣言せられ爾今「フランジュリバー」殖民地と改稱せらる同年九月南「アフリカ」共和國は亦英領殖民地として宣言せられ爾今「トランスワール」と改稱せられたり此の如くして強硬にして勇往勵進せる「セシルロード」及「チャンパーレン」の大活力は遂に南「アフリカ」を英領に統一するの事實を成就せり

英國殖民地内の政治に關しては先づ東印度と其他の英領殖民地との間に大なる區別を存することを知らざるへからず東印度は本來の意義に於て英國の殖民地を以て論すへからず東印度は畢竟英國の征服したる廣大の領土にして特に英國の武器に依り支配され英國の官吏を以て行政せらるゝ地方なり是れ東

印度か他の英領殖民地と異なり特別の政治の行はるゝ所以なり而して其行政は第十八世紀の後半迄は政府の干渉を用すして一に東印度會社に放任せり千七百六十七年に至り始めて英國議會は干渉を試み東印度會社の株券の配當は一年一割を超過することを許さず且會社は其所有地に對し毎年高率の課税を負擔することゝ爲れり爾後六年にして東印度會社は其經營上の失敗の爲め財政上の困難を惹起するに至れり此に於て千七百七十三年には法律を發布して其行政に關し嚴重なる監督を加へ千七百八十三年には一層其監督を嚴密ならしめ特別の監督官廳を東印度に設置せり此監督官廳は六人の勅選せられたる委員を以て構成し必要の場合若は秘密を要する場合に於ては東印度會社の社長を經由せず直に印度駐在の官吏に命令を發するの權限を有せり此監督狀態は爾來八十年を存続したるも千八百五十七年に起りたる印度大一揆は大に英國本國の輿論を喚起して東印度會社を廢止し英國皇帝の直轄政治を要求するに至れり此に於て千八百五十八年の法律は東印度の行政權を全く東印度會社より奪ひ之を印度大臣に附與し其行政の責に當らしめたり印度大臣は十五人の

議員を以て組織する印度評議會を諮問機關として直轄の政治を執行せり英國女王は千八百五十八年九月を以て東印度の現實なる支配者と爲り千八百七十六年以來東印度女帝の尊稱を受けたり此時より東印度の政治に關しては議會に責任を負ふの印度大臣の下に印度總督一人を置くことゝ爲れり總督は副王の位地を占め六人の行政部長官を以て組織せる印度評議會を其諮詢機關と爲せり立法に關しては他の十六人の議員を加へ鄭重に審議を爲さしめたり評議員は總て政府の任命に係り選舉に依るものにあらず要するに東印度は征服せられたる國として行政せられたり

東印度外の英領殖民地行政に關しては其最高の指揮監督を爲すか爲めに「カール」第一世の時代より特別の監督官廳を設けたり其組織は十七世紀及十八世紀に於て屢變更せられ或は一局を爲し或は委員組織を爲せり千七百六十八年には特に亞米利加殖民地の爲に一大臣を任命したることありき千七百八十二年—八十六年に在りては殖民地行政の監督は内務省の主管と爲り千七百九十四年—千八百五十四年に在りては軍務省の主管と爲れり千八百五十四年には特

に殖民省を設けたり殖民省の権限及殖民省の選任に係る總督の各殖民地に於ける権限は時代及場所により異なり一定せず且十八世紀及十九世紀の間に種々の變更を見たり即ち十七世紀に成立したる「アメリカ」殖民地は殆んど皆自由にして代議院を有する憲法を發布せり之に反し十八世紀に占領したる殖民地には其権限に制限を加へ従前と同一の自治權を附與せざりき例へば「グレナダ」の總督に統一せらるゝ西印度殖民地に於ては選舉せらるゝ立法機關を有し其殖民地の課税に付ては其協賛を要せざるも「カナダ」に在りては千七百九十一年以來選舉せられたる立法議會を有せしも其財政に關しては大に制限せられたるか如し近眼ならざる英國の政治家は米國の獨立戰爭に依り大教訓を得「アングロサクセン」の殖民を以て組織せる大殖民地に於ては完全なる自治を許與するの必要あるを明にせり然れども此觀念か世論に公認せらるゝに至る迄は尙ほ多數の時日を要せり千八百三十七年―三十八年に「カナダ」の一揆を鎮定したる「ロルド、ドルハム」は千八百三十九年一月三十一日の報告書に於て殖民地と本國との紛争は殖民地に十分なる自治を附與するに依り自ら之を消滅せしむ

ることを得この意見を發表せるか之れ最も有力なる發明說にして此議論は盛に朝野の政治家の間に討論せられ遂に一般の是認する所と爲り其結果は千八百四十年「カナダ」に新憲法を附與し殖民地の内閣は殖民地議會に對して責を負ふべきことを明にせり北米の「カナダ」以外の英領殖民地も亦千八百五十五年迄に大抵同一の制度を執れり千八百五十三年には「アフリカ」の「カフプランド」も亦代議制憲法を施かれ千八百七十二年より完全なる自治を認められたり千八百四十二年―五十五年には濠洲英領殖民地も亦代議制憲法の發布を見千八百六十七年には「カナタドミニオン」に千八百九十三年には「ナタール」三、千九百年には濠洲の「コムモンウェルス」に完全の自治を認容せるに至れり

此の如くして英國の殖民地は東印度を除くの外憲法上之を三種に分類せらる
 (一)は帝國直轄殖民地にして其立法及行政權は一切政府の手に在り其立法に參與するの議員は選舉に依らずして任命せらるゝものとす
 (二)は選舉せられたる議員を以て組織する殖民地議會を置くも其殖民地の政府は殖民地の議會に責を負はずとするものにして英國皇帝は其立法に關しても完全の否認權を有す

るのみならず其殖民地の行政の執行に關して直接干渉の權限を有するものなり(三)は完全の代議制的自治を認められたるものにして其殖民地の内閣は殖民地議會の多數より信任せられたるものを以て組織し英國皇帝は總督の任命權を有するのみにして其立法に關しては全く無意味の否認權を有するに止まり唯外交政策に關するものに付き制限あるのみ事實上殆んど獨立の國家を以て視るを得るものなり、最後の所謂完全の代議制を有する自治を許與せられたる英領殖民地は米國の「ドミニオン、オフ、カナダ」「ニューファンドランド」「濠洲の「コモモンウェルス」「ニュージーランド」「アフリカ」の「カフプランド」及「ナタール」とす、第二種の英領殖民地に屬するものは西印度諸島の一部、英領「グイニヤ」「マウリチウス」「キペルン」及「マルター」島等とす第一種の英領殖民地に屬するものは其以外の英領殖民地にして其中「セーロン」島は最も重要なものとす、完全の代議制を有する自治を許されたる英領殖民地中北米の「カナダ」及「濠洲」の「コムモンウェルス」の二者は大なる聯邦を形作りと雖南「アフリカ」の殖民地は未だ此域に至らず今後には實に此等完全の自治を許されたる大殖民地と其本國とは如何にして其關係

を一層親密且確固ならしむるを得るやの問題か最近時に於ける英國の殖民政策上の緊要なる案件なりとす英領殖民地は原則として其本國の補助を受けし加之其殖民地の防備に要する軍事費及總督以下殖民地官吏の費用の大部をも負擔するものとす英國は其殖民地の爲に歐洲軍人十六萬六千人の派遣を要せり其内七萬四千四百人は印度に駐在し、四萬千五百人は南「アフリカ」及「ソマランド」に駐在せり

今二十世紀の初頭に於ける英領殖民地の歳入出、國債、及外國貿易の状態を擧ぐれば即ち下表に掲ぐる如し

殖民地	單位	歳入	歳出	公債	輸入	輸出
歐羅巴	1000ポンド	72	63	元	—	—
シブラルタル	同上	36	35	76	995	863
亞細亞	1000ルピ	1,155,566	1,012,911	二億(トスガ)位(トスガ)位(トスガ)位	76(百萬ポンド) (トスガ) (トスガ)	95(百萬ポンド) (トスガ) (トスガ)
英領印度	同上	26,337	25,897	三億(トスガ)位(トスガ)位(トスガ)位	111,277	101,800

結論 第二節 英國殖民政史の概要

海峡殖民地	1000ドル	7,000	7,000	—	3,000,000	3,000,000	2,700,000
馬來保護國	同上	1,750	1,750	—	3,500	3,500	2,500
北ボルネオ及ラブアン	同上	700	1,000	—	100	—	5,200
サラソーク	同上	1,000	900	—	—	—	5,200
香港	1000ドル	4,000	4,000	—	3,000,000	3,000,000	5,000
アチン及ペリム	1000ルビム	—	—	—	—	—	—
キメルン	1000ポントスタ	100	100	—	—	—	—
亞弗利加	1000ポントスタ	900	900	—	—	—	—
アフリカ西海岸	1000ポントスタ	300	300	—	—	—	—
ニゲル河流域	同上	—	—	—	—	—	—
ソマール海岸地方	1000ルビム	—	—	—	—	—	—
サナンシバル	1000ポントスタ	—	—	—	—	—	—
喜望峯殖民地	同上	8,500	10,000	—	—	—	10,000
ナタール	同上	2,000	2,000	—	—	—	10,000
オランシエ殖民地	同上	—	—	—	—	—	—
トランスワール殖民地	同上	4,000	3,000	—	—	—	—
ロデシヤ	同上	4,000	3,000	—	—	—	—
中央アフリカ	同上	—	900	—	—	—	—

マウリチウス	1000ルビム	—	—	—	1,000,000	1,000,000	2,700,000
セシヘルレン	同上	400	400	—	—	—	1,000
セントヘレン	1000ポントスタ	200	200	—	—	—	—
亞米利加	1000ドル	5,000	5,000	—	—	—	—
カナダ	1000ポントスタ	400	400	—	—	—	—
ニューファンドランド	同上	600	600	—	—	—	—
バハマ島	同上	900	800	—	—	—	—
ジャマイカ	同上	700	800	—	—	—	—
バルバドース	同上	100	100	—	—	—	—
トリニダット及トバゴ	同上	700	700	—	—	—	—
ホンドuras	同上	600	500	—	—	—	—
英領グイニヤ	同上	500	500	—	—	—	—
フアルクラント島	同上	200	200	—	—	—	—
漆洲	1000ポントスタ	200	3,000	—	—	—	—
ニューギイニヤ	同上	500	3,000	—	—	—	—
ニューゼーランド	同上	5,000	5,000	—	—	—	—
ヒューシ島	同上	200	200	—	—	—	—

第三節 蘭領東印度殖民史の概要

蘭領東印度殖民史の概要に付ては千九百八年發行「マイエル」氏百科字典中第十四卷第六五〇頁以下に掲ぐるもの其要領を盡くせり故に其以下之を抄譯することゝせり

和蘭の殖民地は之を東印度殖民地と西印度殖民地との二に分つ東印度殖民地は瓜哇「スマタラ」ボルネヲ及「セレベス」等を包容せる大「ズンター」諸島「バリ」ロンボック「ズムバワ」フロレス「チモール」ズムバワ等を包容せる小「ズンダー」諸島「モルツケン」群島及「ニユグイニヤ」島の西部、之を以て成るものにして其面積百九十一萬五千四百七十七平方キロメートル、人口三千七百七十万人を有す、西印度殖民地は「クラサヲ」アルバー「ボナイレー」セント、マルチン「セント、オイスタツハ」「サバー」等の西印度諸島及蘭領「グイニヤ」より成るものにして、其面積十三萬二千三百十平方キロメートル、人口十四萬四千六百五十二人を有す、東印度殖民地は千九百五年の豫算に依れば歳入一億四千七百萬「グルデン」、歳出一億六千百萬「グルデ

ン」に上ほれり、西印度殖民地は同年に蘭領「グイニヤ」は歳入三百七十七萬千三百六「グルデン」、歳出四百二十七萬千七百十八「グルデン」、西印度諸島は歳入四十九萬七千五百九十「グルデン」、歳出八十萬八千七百六十三「グルデン」を算せり、今其殖民地中の最も重要な東印度殖民史の概要を擧ぐれば即ち左の如し

蘭領東印度殖民地の端緒は和蘭の政治上及貿易上の地位と伴ひ第十六世紀の終に起源するものと云ふへし當時「スパニヤ」王は千五百八十年以來「ポルトガル」王を兼ね同時に又和蘭の支配者なりき和蘭の貿易は當時中間貿易の状態に在り「スパニヤ」及「ポルトガル」か他の歐洲諸國との間に於ける通商上に基礎を置き、「ポルトガル」か東印度より輸出せる貨物例へは香料を、更に和蘭及歐洲の北東部に輸出するに關して専ら其力を用ひたり、然るに此通商關係は「スパニヤ」どの戦亂發生に依り變更を生し、千五百八十五年には「スパニヤ」及「ポルトガル」の港灣は全く和蘭に對して閉鎖せられ、和蘭貿易の上に大妨害を爲すに至れり、此に於て和蘭は千五百九十二年以降東方亞細亞に對して「アムステルダム」より直接貿易を開始するの決心を爲したり、即ち千五百九十四年に一株式會社「ファンウエル

レーを設立し會社をして一小艦隊を用意して先づ馬來群島を訪問せしめたり、其馬來群島より歸來するや其貿易の有利なるに促され忽ち數會社の新設あらんとしたるも、其間に於ける無益の競争は將に發達せんとする印度貿易の萌芽を抑壓するの虞あり、又東印度に於ける和蘭貿易を「スパニヤ」の特別保護の下に立つ「ポルトガル」貿易に對抗せしめんには、極めて堅固なる結束を必要とするに依り、「オルデンバルネウエルト」及「プリンス、モリッツ」の協力を以て、千六百二年三月三十一日數會社を合同して基礎強固なる東印度會社の成立を見るに至れり、此會社は二十一年間貿易獨占の權を有し且海上に於て喜望峰より其東部蘭領殖民地に到るの航路及南米の「マガールヘッス」に到るの航路を獨占せり、會社は同時に其東亞の殖民地に於て本國主權の一部行使を委任せられたり、此に於て千六百九年には印度總督及印度評議會より成る中央政府の組織を見たり、總督「ジャン、ピーテルスツオン、コン」は千六百十九年に西西瓜哇の「チャガタラ」を占領し、茲に「バタウイヤ」を新設して蘭領東印度殖民地の中心と爲せり、千六百五十年より「バタウイヤ」に新制度を施行せり、此制度は千八百年に至るまで其儘行は

れたり

東印度會社の殖民政策は通商上の利益を占握するを主眼とし、其政策の旗幟も亦貿易の獨占に在り、馬來群島及日本及「セイロン」は即ち其貿易の目的地なり所謂貿易の獨占は會社が政權を奪取せる地方又は壓迫的條約に依り政權を讓受たる地方に在りては頗る完全に之を主張維持することを得たり、瓜哇「モルツケン」群島に於けるものは即ち其適例なり、會社は尙ほ瓜哇に於ては貿易上特に多大の利益を壟斷せんか爲め土人に對して特定物産を指定し、其收穫の全部又は一部を低價を以て獨占買收の權利を得たり、其供給條件は土人諸侯の存在せる地方に在りては諸侯又は其代理官と協定し、土人の諸侯の存在せる地方にありては土人の最高官吏と協定を爲したり、東印度會社は歐洲よりの輸出のみならず歐洲への輸入に付ても之を獨占せんことを力めたり、所謂歐洲への輸入貨物は其大部は東洋通商國の生産に屬す即ち香料、絹、コーヒ、阿片及布帛等是れなり、東印度會社は其始は「スパニヤ」及「ポルトガル」に對し防禦的の態度なりしも、其漸く政權占握の必要を認むるに従ひ、其方針を一變して積極的に攻撃的の態度を

採り、終に「スバニヤ」及「ポルトガル」をして其馬來群島に於ける領地の大部を會社に割讓せしめ、且千六百四十一年には「マラッカ」前印度の一部及「セイロン」島をも會社の所領たらしむるに至れり、和蘭は此等の新領土に於て更に土人諸侯及人民を征服する爲めに多少の戦闘を用ゆるの必要ありしは明かなり、唯和蘭の方針とする所、政權の取得は單に其貿易の維持及擴張に必要とする限度に於て之を主張し、其以外に超ゆることは力めて之を避けたり、此殖民政策は總督たる「コエン」アントニー、ファンデーメン、「イヨアン、メトジツケル」等の沈勇にして耐忍、組織的にして軍略的、政治家にして商業家たる、絶倫の才幹に依り巧に實行せられ、十七世紀に於ける和蘭殖民史は著しく光彩を放ち大成功を收めたり、然れども他面に於ては甚た残酷なる暗黒面の歴史も存在せり、例へば「バンタ」島の掠奪「モルツケン」群島の大部に於ける丁香の根絶、十八世紀に於ける瓜哇「コーヒ」生産の制限等是なり

和蘭政府は東印度會社時代に於ては、本國政府をして其財政上寸毫も憂ふる所なからしめたり、而して其殖民地の政治は主として土人に委任したるも、亦必要の改良は適當に之を行はしめたるを以て、土人をして從來の土人諸侯、豪族其他政府の暴政を免かるゝを得せしめ、且土人の奴隸的狀態にも多少の改善を加へたり、東印度會社は其隆盛期に於て、西は喜望峯より、東北は日本、南は濠洲に至るまで、を其貿易圏内とし、喜望峯「アラビヤ」「ペルシヤ」「東印度」「セイロン」「ベンガル」「マラツカ」後印度、支那、日本、臺灣及馬來群島等に於て其貿易互市場を設立し總て之を「バタウィヤ」に於ける蘭領東印度中央政府の指揮權内に置きたり、此の如くして第十七世紀は眞に東印度會社の最盛期にして亦和蘭殖民地の黄金時代なり、十八世紀に於ては之に反し和蘭政府及東印度會社の衰亡期に屬す、和蘭政府か君主と商人との兩資格を具有する状態は其効果甚た良好ならず、内に在りては漸く官吏の紀綱紊亂し貿易不取締等の弊害百出せり、外に在りては外國殖民地殊に英國の壓迫的競争益強烈と爲れり、終に東印度會社は第十八世紀の後半に於ては全く衰運に向ひ、千七百八十年より千七百八十四年の間に英國と戦端を發したる以來、一層其衰弱を來たし、千八百年には和蘭本國の爲めに大債務を負擔するの止むを得ざるに至れり

千八百八年ダエンデルス¹が總督として任に就くに當りては、爪哇以外の多數の領土は、千七百九十五年來の英國との戦役の結果全く之を失ひ唯爪哇を維持したるのみ、ダエンデルスの施政は善く爪哇内の土人諸侯をして和蘭政府に臣服せしめ、司法制度の改良、徵税法の制定等財政の改革も亦其緒に就けり、ダエンデルスの後任としてイ、ウエー、ヤンセン²の就任するに當りては、英國政府の強壓一時に加はり千八百十一年には爪哇、及當時蘭領及佛領として殘存せる殖民地を擧て英領に讓渡するの止むを得ざるに至れり

蘭領東印度殖民地が英領に移さるゝや、數多の部分に分割せられ其各部は獨立して「カルカッター」に於ける印度總督の直轄支配を承けたり、千八百十六年に至るの間は「トーマス、サー、ラハエル」に依り支配せられたり「ラハエル」は從來の和蘭政府の獨占貿易主義を排斥し、之に代ふるに自由貿易主義の原則を以てせり、「ラハエル」は曾て和蘭人より稱賛せられたる英領印度地租法の制定者にして其地租法は爪哇に於ても之を行ひたり、此地租法の主義とする所は、國家にのみ土地の所有權を認め、人民は唯其土地を占有使用するの利益を有するに過ぎずと

せり、故に人民は土地の使用に對して、當然其土地の收益の一部を國家に提供すへきものにして、地租は地代又は土地利用の利子に該當すへきものとするものなり

「ナポレオン」戦役後千八百十四年八月十三日に締結の倫敦條約は、英國が奪取せる蘭領東印度殖民地をして一切和蘭に返還せしめ、英國は唯「セイロン」島及喜望峯殖民地を保留せり、英國は千八百二十四年三月十七日新に東印度殖民地の境界を協定し其「スマタラ」に於ける領地を「マラツカ」半島に於ける蘭領殖民地と交換し且「シンガポール」を新に取得せり、此の如くして十九世紀の上半期より馬來群島上の蘭領東印度殖民地は、再び歐洲各國の公認する所となり、爪哇「スマタラ」、「ボルネオ」、「バリー」、「ロンボック」、「セレベス」等の上に完全の和蘭の支配權の活動を見るに至れり、此に於て爪哇には千八百十四年より「スマタラ」には之に次ぎ、其他の馬來群島に於ては千八百五十年頃より、著しく蘭領東印度殖民政策の發展を見たり

十八世紀の終及十九世紀の始に於ては、蘭領東印度殖民地の政策に關し、東印度

會社流の政策を主張するものと、自由主義の殖民政策を主張するものとの二派を生し其間に大論争ありたり、元東印度會社の事務員たりし「ネテルブルグ」は前説の代表者にして、「ダーク、フアン、ホーゲンドルプ」は後説の代表者なり、此論争は畢竟自由貿易と獨占貿易、土人の強制的勞働と自由勞働との何れか適當なりやを解決せんとするものにして、同時に瓜哇人の土地占有問題歐洲の私人的資本を瓜哇工業に輸入するの可否及未墾地に關し歐洲の資本家に對して永代借を許すの可否等の問題に論及するものなり、所謂貿易の獨占は政府も終に其廢止の止むへからざるを認め、唯「モルツケン」群島に於ては例外として千八百六十年迄之を維持したり、其他の問題に關しては純然たる自由主義の解決を爲すは、尙ほ熟考を要すと認めたるか如し、千八百三十年に於て總督「ヤー、フアン、ボツシユ」は蘭領東印度の開拓方針を發表せり、是れ主として本國の利益より打算し、土人に對しては寧ろ高壓を加へ、出來得る限り本國に利益を收んとするものなり、此に於て千八百二十四年に設立したる和蘭貿易會社をして殖民地貨物の販賣の媒介に關し此政策の實行を盡力せしめたり

十九世紀の中間より「ボツシユ」の開拓方針に對し抗議を加ふるものを生せり、例へば「フアン、ヘーウエル」「ドウウエス、デツケル」及「フランゼン、ハンデー、ブツター」等の如し、千八百四十八年の和蘭土地規則は、從來の土地の所有權は總て帝王にありとするの原則の一部を破壊せり、千八百四十八年以來自由主義の思想は和蘭の殖民政策上に活躍せり、千八百五十四年の政府訓令は實際に於て自由主義の概念に傾けるものと云ふへし、此の如くして所謂「ボツシユ」氏の開拓方針は、漸く勢力を失ひ土人の奴隸制度も亦法律上廢止する所と爲り、土地の共有制は漸く個人有制に變遷しつつあり、概して云へば和蘭の殖民政策は近年に於て一變し、本國の利益のみを以て主眼とする能はずして、大に土人の利益を尊重するの必要を認むるに至れり、蘭領東印度殖民地の財政は、近年に於ては常に其本國に益金を提供する能はざるのみならず、却て本國より東印度殖民地に對して、財政上の補助を要するに至れり、即ち千九百二年の豫算に依れば一億五千八百萬「グルデン」の總支出中、六百萬「グルデン」の補充を要し、千九百六年の豫算に依れば一億六千萬「グルデン」の總支出中、一千百萬「グルデン」の補充を要するは其例證なり

第四節 馬來群島史の概要

馬來群島史の概要に付ては千九百十三年發行「ヘルモルト」氏世界歴史第一卷第五三一頁以下に詳かなり、今之を左に抄譯せん

馬來群島には二箇の主たる人種存在す、一は茶褐色の皮膚を有し且直毛を有する馬來人にして、一は黒色の皮膚及縮毛を有する黒人なりとす、黒人は赤道下の黒色人種の一部にして「アフリカ」の大部、南印度「メラネシヤ」及濠洲に涉りて其住所を有するものなり、馬來群島上に住する黒人は其骨格より見るも、其地理上の位地より考ふるも、今日「ニューギニヤ」及「メラネシヤ」群島に住する「パプア」人に酷似せり、是れ「パプア」人が曾て西方一帯の諸島に弘まれるも、馬來人との戦闘に依り敗北し、其現在の狀況に縮少したるものなることを推想せしむ、「アルフレット、グランデヂエル」の見解に依るも、黒色なる「マダガスカル」の住民は「メラネシヤ」人と甚た近似せりと云ふ、固より現今の「パプア」人は黒人種と言ひ難きものあることを免れず、何となれば馬來人との雜婚を爲すの久しき、殆んど其特性を失ひた

れはなり、馬來群島の東方諸島即ち「ヒリツピン」には今日尙ほ黒色人種あるも其人數の少きと、他人種との混種との爲に殆んど其獨立の存在を疑はるるに至れり、「パプア」人は大膽なる航海者及掠奪者として、西方「ニューグイニヤ」より、東方「ズンダー」諸島の海岸に侵入して殖民を爲せり、「パプア」人は其始めは特別の文明を有し、漸次に馬來人に對し其文明を擴張せんとしたるもの如し

馬來人の中心は馬來群島に在り、其一部及「モンゴリヤ」人との混血種の大部は、亞細亞大陸に向て蔓延せり、此意味に於て馬來群島は馬來人なる特種人種の濫觴なりと云ふことを得へし、馬來群島中大なる島嶼は其住民の上に特別なる影響を與へ、「スマタラ」島の「バツタツク」人、「ボルネヲ」島の「ダイヤツク」人、「ヒリツピン」島の「タガレン」人等の如く、皆特有の人種を發生せるも、亦大體に於て馬來人たることを失はざるものなり

馬來人は馬來群島中より數回の大移動を爲せり、第一回の移動は先づ群島より北に向て之を試まれたり、即ち「ヒリツピン」島には大「ズンダー」島に故郷を有する馬來人殖民し、其航海に長するの特性は彼を驅て「ヒリツピン」の北方臺灣島に向

はしめたり、臺灣島に馬來人の血統を存在するは、今日尙ほ明瞭なり、次て南方支那の大陸上にも亦馬來人の移住に關する明白の痕跡を認め、日本國亦馬來人移住の跡あるもの如し、蓋し日本には其太古より已存の住民の外、一は北西の方朝鮮を經由する北方移住民と、一は南方諸島に起源し航海に長せる馬來移住民とを認むればなり、日本の國家的發達の起源は、凡そ紀元前六百六十年頃にあるを以て、此等馬來人種の移動も尙ほ其以前にありしことを推想せらる。

第二回の移動は馬來群島より東に向て之を爲されたり、即ち古代より黑人に占められたる「メラネシヤ」諸島に無數の馬來殖民地を發生し「メラネシヤ」島に深大の影響を與へり、濠洲大陸亦明かに馬來人種の強大なる混血を見出せり、其他馬來人の大移動性は、太平洋中の無數の島嶼に其人種を蔓延せしめ、北西「アメリカ」の海岸に迄馬來人の移住を認むるに至れり、其如何なる航海に依りしや、如何なる時間を之に用ひたるや等は、總て不明なり、濠洲の「ニューゼーランド」に於ける口碑は、半は小説的に最初馬來人の移住者か、其家族及諸神と共に一對の「大ポト」に依り「サファイイ」及「ラロトンガー」より新故郷に向て、最も危険多き航海を企て

たることを傳へり

第三回の移動は馬來群島より西に向て印度洋を越へ「マダカスカル」地方に馬來人を移植せり、恐らば之と同時に亦「アフリカ」の海岸にも移民したるもの如し、此の如くして紀元前一千年に於ては馬來人種は東は亞米利加の海岸より、西は阿弗利加の大陸に至るまで、殆んど地球の三分の二を蔓延したるの事實あることを認めしむ。

馬來人の最古の發源地は「スマタラ」島の「メナンダカバウ」地方に在るもの如し、即ち「マレニ」の名稱は「プロトメイヤス」の時には「スマタラ」島を指したりき、馬來人の口碑に依れば其後印度又は瓜哇の血統を有する「スリー、トゥリー、ブマナー」は馬來人の一部を率ひ、海を越えて「マラツカ」半島に上陸し、千百六十年には「シンガポール」を其勢力の中心地とするに至れり、當時其勢稍盛なりし瓜哇「モデラバヒット」は之を嫉視して千二百五十二年に於て「シンガポール」を征服し、「マラツカ」半島上に於て新に「マラツカ」を其首府と爲せり、爾來西方「インドネシヤ」海岸に向ひ盛に馬來の商人及移住者の出顯を見たり、此の如くして十三世紀の終には「マ

ラツカーは古の「メナングカバウ」よりも、強勢の位地を占め馬來人の政治上の中心と爲れり、此に於て從來純然たる島嶼的の馬來人は一變し、大陸的馬來人と爲り、大陸より號令して馬來群島上に其勢力を擴張せんとせり、馬來人の移住者は到る所に國家を設立し、例へば「ボルネヲ」島に於ける「ブルナイ」の如く、純然たる馬來國を形作り、善く其移住地の土人と同化親和し、遂に馬來語を以て一般に馬來群島の共通的交通語たらしめたるは洵に其成功と稱すべし。

馬來群島の地勢が、交通上極めて便宜の地位に在るは自然に此群島上に外方よりの侵入者を誘起せり、即ち先づ亞細亞大陸の住民たる支那人、印度人、及「アラビヤ」人が其東西より相競ふて馬來群島上に殖民地を設け、政治上及商業上の勢力を擴張せり、此に於て馬來群島は東方亞細亞、及西方亞細亞の通商交通上の基點と爲ると共に、亦印度貿易の重要點たる香料、金銀、ダイヤモンド等の供給地と爲り、終には歐羅巴人たる「ポルトガル」人、「スペイン」人、英人及和蘭人等が續々渡來して、茲に重要な政治上及經濟上の勢力範圍を設定するを見るに至れり、左に其外方よりの侵入者に關し簡單なる説明を試むべし。

一、支那人

支那人は其始めて南方支那を征服するに至り、南方土人の航海に巧なるを利し、馬來群島上の豊饒なる熱帶地方と海上貿易を試みたり、支那人が其南方支那を征服したるは、漢時代即ち耶穌紀元前二百二十年頃に始まる、故に支那人の馬來群島に及ぼすの影響は、此時代後に起源するものと云ふべし、支那人は海上生活は固より其好む所にあらず、唯貿易上の慾望が彼を驅て馬來群島上に向はしめたるに過ぎず、之を以て支那人は漸く其航海權を、航海に長せる馬來人に譲り、徐ろに自國の港灣に在りて、坐して貿易の利益を占めんことを力めたり。

支那人の馬來群島上に於ける貿易の紀元に付ては、數説あり、其精確なるものを茲に擧ぐる能はずと雖、六世紀の前半に於て南方支那を支配せる梁の舊記に依れば「マラツカ」海峡に於ける一、二の場所が東方亞細亞及印度の貿易の仲立港たりしは明白なり、瓜哇との交通が已に五世紀より始まれるは、佛教傳習生たる法顯が印度よりの歸途、暴風に遭ひ瓜哇に寄港し、始て瓜哇地方の明細

の報告を支那に齎らせるに依り之を推すに足る、當時「スマタラ」の南部は已に支那と交通せり、瓜哇に於ける秩序ある政治状態は立ろに亦堅實なる支那、瓜哇間の通商貿易を促進し、支那人は馬來群島に絹布及綿布を輸入し、瓜哇よりは象牙、貴金屬、香料及砂糖等を輸出せり、馬來群島の諸侯は此時代に於て、支那の朝廷に向て貢物を贈り、支那は之に對して外交上の補助を以て酬ひたりき、千百二十九年には支那は瓜哇國に王號の尊稱を許すに至れり、十三世紀に於ては瓜哇に於ける支那人と瓜哇の諸侯との間に紛争を生じ、遂に當時の支那朝廷元は兵を送り瓜哇を侵襲したることあり、千二百九十三年、

明朝に於ては瓜哇、支那間の貿易は、再び盛大と爲り支那の瓜哇に對する政治上の勢力は爾來顯著に其歩を進め千四百五年より七年迄には、支那の艦隊は屢馬來群島に顯はれ群島内の弱小なる土人諸侯の一隊を征服し「バラムバン」の支配者の如きも捕虜として支那に連れ行かれたることありき「ボルネヲ」島の海岸は夙に支那商人を誘起して「ボルネヲ」に於ける金及「ダイヤモンド」等の富源を世界に紹介せり、即ち「ボルネヲ」島の北部に於ける「ポロー」國は、七世紀

に於て支那の年報中に顯はれ、十世紀に於ては支那人の來往頻繁なるを見た「ボルネヲ」島の西岸には「プニー」國あり、其諸侯は九百七十七年頃に支那朝廷に向て貢使を贈れり、今日隆盛を極むる「バンデルマヂェン」も一千三百六十八年より、支那歴史に記載されたり

回々數の馬來群島に於ける侵略は、其群島内の支那貿易の發展、及支那人の勢力に對して大壓迫を加へたるもの如し、此時より支那人は從來等閑に付したる群島の東北部に屬する「ヒリツピン」に向て、新に大活動を試みたり、「ヒリツピン」に於ては、支那人が侵入して其海岸所々に定著するに先ち、馬來人種の活潑なる大移住を見たるは明白なる事實なり、十四世紀に於ては支那商人及支那移住者の來往劇甚に増加し、此等の支那人は「ヒリツピン」の土人との間に盛に雜婚を爲し、爾來北「ボルネヲ」に於ける如く亦「ヒリツピン」に於て新なる支那馬來人なる一種の混血人の成立を見たり、然るに一度西班牙が「ヒリツピン」に來り此島を占領するや、其勢力の維持上支那人排斥の必要を認め、盛に支那人を驅逐し且支那人の住所を一定地に限定するに至り、此等支那人の雜婚種は

著しく衰勢に向ひたり

要之支那人は馬來群島に於ては夙に大移民を行ひ、各所に其經濟上の勢力を扶植し、群島の風俗上にも大變化を與へたるは明かなり、此意味に於て支那人は現今尙ほ其活動を繼續し、勢力亦盛なりと云ふへし、唯支那人の馬來群島内土人の精神上に於ける勢力に至りては、全く見るに足るべきものなく、却て印度人及アラビヤ人の勢力に比して大に劣れるものあり、即ち支那人と土人との關係は提携相助の状を見ずして寧ろ不和反目の觀あり、故に群島内の貿易の大部は支那人の掌握に歸し、且支那人移住の數頗る多きに拘はらず、何れの場所に於ても支那人に對しては、未だ群島を支配するに足るの恐るべき權威の存在を認むるものなく、從て馬來群島を支那文明の屬領なりと稱すること、を許さざるの實狀あり、是れ全く支那人が馬來人の精神界に及ぼす勢力の皆無なるに起因するものと謂ふへし、此點に於て歐人も亦支那人と同一の運命を採り、其馬來人の精神上に及ぼす勢力の振はざるや最も久しきものあり、此等は一は支那人が主として經濟上の利害の打算に最も明かなるも、宗教上に

關しては全く無頓著なること、一は歐人が宗教上の問題を以て冷眼輕視するに過ぎたることに因るものにして、其態度の改善は實に將來の一問題たることを失はざるものなり

二、印度人

印度人は支那人とは全く異なる方法に依り、馬來群島上に其勢力を扶植せり、即ち印度人は其より高き文明と「ブラマ」教及佛教の二宗教とを以て、先づ馬來群島に移植せんことを試みたり、前印度の海岸は比較的に港灣に貧しく、印度人亦航海に長するの人民ならざりしを以て、始て「ベンガル」海を横斷したるは其天性航海に長したるの馬來群島の土人が、海賊的に印度の海岸を侵略したるに起因し、茲に印度貿易の端緒を發したり、然れども前印度海岸の住民は夙に「アラビヤ」及「ペルシヤ」とは、已に活潑なる交通を爲せるを以て、一とたひ馬來群島の香料に富めることを明にするや、亦彼を驅て馬來群島上の通商に力を用ひしむるに至らしめたり

印度に關する歴史は、馬來に關する歴史と共に其材料缺乏せるを以て、印度及

馬來群島の交通の紀元の如きも、間接に之を推定するに過ぎず、ジョン、クラウ
 フードは馬來群島に特有の商品にして、古代には他國に全く存せざりしもの
 は香料たる丁香及肉荳蔻たるの事實を捉へ、此等の貨物か西方の市場に始て
 出現の日を以て、前印度と馬來群島との交通開始を推定するの指針と爲さん
 とせり、アレキサンドリヤ港の輸入貨物品目中此種の香料は紀元後百八十年
 に於て、始て見出されたり、香料をアレキサンドリヤ港に輸入するには先づ印
 度よりマラッカ方面に到り此地に於て印度の産物と香料との交易を爲す等
 幾多の日月を要すへきは明かなるを以て、其印度馬來貿易の端緒を開きたる
 は吾人の歴年の第一世紀なりと推定するを穩當と認めらる、此見解はペリプ
 ルスが印度旅行記中に記述あり、支那の報告書には此時代に於て南方支那の
 海岸中に印度商人の訪つるものありしことを傳へり、其後の馬來群島に關す
 る報告は却てギリシヤ及ローマの方面に發表せられたる如し、丁香及肉荳蔻
 の二者かアレキサンドリヤの輸入貨物品目中に顯はるる前、地理學者、ブトレ
 メースは其世界地圖上に馬來及瓜哇なる名稱を掲げり、此事實は當時瓜哇か

已に馬來群島の中心點を爲せるを推定せしむるに足る、印度商人の痕跡を逐
 ふて印度の僧侶は直に馬來群島に渡來せり、印度は吾人の歴年の始には宗教
 上統一せられたる國にあらず、即ち夫の佛教は横溢的大元氣を以て、其古代よ
 り存在する「ブラマ」教と大戰闘し、印度に於ける古來の階級制度を打破せんと
 し、最も盛に傳道に従事せり、然れども「ブラマ」教は再び破るへからざるの活力
 を以て振起し、佛教は却て其最初の故郷たる印度に於ては勢力を失ひ、印度は
 全く「ブラマ」教の天下に歸せり、印度の宗教か馬來群島に渡來せるときは、恰も
 佛教及「ブラマ」教の對峙せる中間時期なりしを以て、其印度に於ける宗教上の
 闘争は、之を馬來群島の上にも齎らし來り、佛教及「ブラマ」教の二者は並存して
 相互に競争軋轢せり、然れども馬來群島に於ては、佛教は始に勝利を制し、瓜哇
 の歴史中最も光輝ある時代に其明確なる痕跡を残したり、「ブラマ」教は其土人
 に對する執着力極めて強固にして、其活力永續し現今尙ほ群島内に消滅せざ
 るも、佛教は其執着力淺くして今は唯其一大遺跡に過去の歴史を語るに止ま
 れり

「ブラマ」教と佛教とは其出所を異にせりとの説は、誤謬にあらざるか如し、即ち「ジエムス、ヘルグツソン」は佛教移民の故郷を「ゲドラート」及「インドス」の河口に、「ブラマ」教移民の故郷を「テリンガナー」及「キストナー」河口にありとせり、瓜哇に於ける印度寺院の建築及其「サンスクリット」語ノ彫刻は之を立證せり、佛教の該博なる研究者たる「ハー、ケルン」及「イー、グロネマン」の主張に依れば、「プロボードル」の有名なる寺院は紀元後九百年頃南方の佛教徒より設立せるものとせり、瓜哇に於ける最古の寺院は概ね佛教徒の建立にあらず、「ウイスヌス」の尊敬者か五世紀頃に於て建立に係るもの多し、同時代に於て西方瓜哇に見出されたる彫刻物亦「ウイスヌス」の信徒に出てたるものなることを證明せり、支那の僧侶法顯か當時瓜哇を訪つれたるは、明確の事實なるか其旅行記中に瓜哇に於ては印度人の存在を見たるも、未だ一人の佛教徒を見出さすと云へり、以て之を推すに足る

印度の西北岸の住民か、瓜哇殖民の先頭と爲り盛に貿易を試むるに至りて、佛教は、始て其勢力を振起し一時に馬來群島を風靡せり、即ち紀元後八世紀に於ては、西北の印度人の瓜哇に移住する者夥しく其數を増加し、佛教の信徒に屬するもの亦頗る多かりき、七百七十九年に「カルサン」に佛寺を建立せるは舊記に明白なり、當時印度文明の凱旋は、瓜哇の支配者をして佛教に對する尊崇歸依を最も篤からしめ、其蓄積せる富の大半を佛寺の建立に費消せしむるに至らしめたり、其寺院建築の模範は、皆之を前印度半島の寺院に採りたり、當時馬來群島の中心たりし瓜哇に於ては、印度の文明及宗教は一大美花を開き、其附近の島嶼、「スマタラ」島、南方「ボルネヲ」及其他の諸島に對して盛に其花粉を撒布せり、佛教及印度文明の影況の最東端は「テルナート」島及「トビ」島なりき、其後印度の文明は一時勢力を潛めたりしか、十五世紀に至り又再興の機運に向へり、此時代に於ては佛教は已に前印度に於ては殆んど消滅したるを以て、瓜哇に於ても亦唯「ブラマ」教のみの強盛を見たり、要するに當時の印度文明は亦其最後の夕照たることを免れさりき

三、アラビヤ人

印度人に次て馬來群島に侵入したるは、回々教を奉する「アラビヤ」人なり、埃及、

印度間の「アラビヤ」貿易は已に「マホメット」以前より盛にして、馬來群島の産物を印度人より受け更に之を西方歐洲文明國に齎らすを以て其事業の一と爲せり、僅少の「アラビヤ」商人が古く瓜哇に來往せしことあるは、亦疑を容れざる所なり、回々教は「アラビヤ」人の馬來群島に於ける侵入に、一種の特徴を與へたり、即ち「アラビヤ」人は通商と同時に商人に依り回々教の宣布を行へることは是なり、「アラビヤ」商人に依れる回々教の布教は、「アラビヤ」人が印度洋の横斷を苦とせざるの勇氣に依り顯著なる効果を見たり、蓋し「モハメット」王國の成立は「アラビヤ」人をして東洋及南洋の富源開拓上に大抱負を有せしめ、大膽なる航海者及商人を驅て一層貿易に努力せしめたり、當時「バスラー」は盛大を極はめ大膽なる航海者の一般の出發點と爲れり、又「オマン」は「ベルシヤ」灣に於ける重要互市場と爲り、南方「アラビヤ」の古代よりの海港と相待て、埃及貿易の發達を促進せり、「カリハート」時代の「アラビヤ」航海者は、馬來群島と回々教國との貿易より、一步を進め更に支那海岸に向ひ其勢力を擴大せんとし、終に紀元後八百五十年頃には「ベルシヤ」灣内の「オマン」地方と支那の南方海岸との間に活潑な

る通商を見るに至れり、此の如くして「アラビヤ」人は馬來群島を以て其支那貿易の仲介場と爲し、其交通を頻繁ならしめ、漸く其貿易従事者を定着せしむると同時に大に回々教の宣布を力とめたり

回々教國の衰亡は亦馬來群島上に於ける「アラビヤ」貿易及回々教の勢力に一頓挫を與へたるか、十字軍の時代に於て回々教の勢力再び隆盛と爲り、「ザラツエネン」國の勃興するや、馬來群島上に於て亦「アラビヤ」人及回々教の勢力は再興せり（紀元後千二百年頃なり）、然りと雖當時の群島上に於ける勢力は未だ確固なるものと言ひ難かりき、偶ま馬來半島上の「マラツカー」の馬來諸侯「モハメットシヤ」が回々教に歸依するや、千二百七十六年頃回々教の將來に向て一大光彩を發揮し、馬來人をして最も熱心なる回々教徒たらしむるの一大結果を産出せり、土耳其及埃及國が十四世紀に於て盛大と爲れるや、「アラビヤ」貿易の第三隆盛期を出現し、遂に瓜哇島上に回々教は大勝を奏し、瓜哇島の全部をして純然たる回々教國たらしむるに至れり、蓋し回々教が瓜哇に成功を收むるは固より一朝一夕のことにあらず、回々教の最初の試みは一千三百二十八年

頃第二回の試みは一千三百九十一年に行はれしも、共に格別の効果を見事に拘はらず「アラビヤ」人の不斷の奮闘は、遂に回々教の最終の勝利と爲り、一千四百七十八年に於て印度宗教の最終の保護者たりし「モデヲパヒット」國の亡滅は「ブラマ」教を全滅せしめ、回々教の全盛を見るに至れり、此宗教界上に於ける大成功は實に「アラビヤ」人の大努力に原因するものと云ふべきなり

四、歐羅巴人

「イスラーム」の天使が最後の大勝を奏したるの後、數十年にして始て歐羅巴人が馬來群島上に來往するを見たり、歐人が馬來群島に到るや立に其政權を割取し速に其成功を收めたり、其馬來群島に到れる歐人は「ポルトガル」人、「スペイン」人、英國人、和蘭人、米國人等なるも、其始に殖民に着手したるは「ポルトガル」人にして後に成功の美果を收めたるものは和蘭人なり、以下其の概要に關して畧説を試むへし、而して歐人の馬來群島に於ける支配は單に其形體上のみに限られ、其精神上の支配に至りては、依然として回々教の掌裡より之を奪ふこと能はざりき

甲「ポルトガル」人

「ポルトガル」の水師提督「ヂャゴ、ロベツ、ヂー、セクエラー」は、始て一千五百九九年に「スマタラ」島の海岸に現はれり、然れども彼を以て馬來群島を訪つれたる最初の歐人航海者なりとする能はず、大膽なる商人は已に其以前に現はれたり、即ち最初の歐人と云ふべきものは、探險的勇氣と向上の大元氣とを充滿せる「ウエネチャ」人「マルコポーロ」にして、一千二百九十五年に馬來群島を訪問し、幸福なる航海に依り其故郷に歸れり、而して歐羅巴人が一千四百九十七年より翌年に亘り「アフリカ」南岸の廻航其目的を達し、東印度と歐洲との直接航路を發見したる以來は、歐洲との交通は漸く頻繁と爲れり、「セクエラ」の指揮の下にある第一回の「ポルトガル」探險隊が「マラツカ」に碇泊したるときは土人酋長の襲撃を受け僅かに全滅を免れたり、一千五百十一年再び「マラツカ」に送られたる「アツフォンソド、アルブタエル、ケー」は、「マラツカ」の「ズルタン」が十分の賠償を爲さざるを理由として、直に宣戰を布告して之を占領し、「ポルトガル」の勢力圏内に移したり、「アルブタエル、ケー」は此に於て「マラツカ」を根據とし、

一方には瓜哇と連絡を計かり、他方は東方に於ける香料供給地たる「モルツケン」諸島と連絡を密接にせんことを計りたり、「ポルトガル」人か「アラビヤ」人の痕跡を逐ふて、印度及東亞貿易の接觸點たる「マラッカ」を取得するや、更に歩を進めて支那に向ひ、支那貿易の大利を獲得せんとするの慾望を起し、一千五百十六年に於て「フェルナナ、ベレツ、デー、アンドラド」の指揮の下に、艦隊は「マラッカ」を發し、一千五百十七年始て廣東に到達するを得たり、又一千五百十二年には「フランチェスコ、セルラオ」に依り、「モルツケン」群島との連絡を完全にし、直に其島上に於ける土人の争鬪に干渉しつゝ、速に「アントニウス、デー、ブリト」をして其勢力を扶殖せしめ、一千五百二十二年には「テルナート」に城塞を設くるに至れり

「ポルトガル」人は新に發見したる馬來群島の廣大なる地方を占領し、其上に殖民を行ふの容易ならざるを喻り、此大島嶼を征服するは其念頭に置かざる所にして、唯其全力を「マラッカ」の維持、及小なる馬來群島内海賊國の壓抑のみ用ひ、其餘力を以て主として支那方面に於ける通商に傾注せり、「ピンタン

グ」の馬來諸侯は不斷「マラッカ」海峡に於ける「ポルトガル」領を攻撃し、千五百二十七年には一時其首府「マラツカ」を破壊するに至れり、又「モルツケン」諸島に於ても、西班牙國と親密なる「チドル」國の存在は、常に「ポルトガル」領を不安ならしめたり、「スマタラ」島に在りては僅に二、三の小國か「ポルトガル」の最高權を認むるのみ、「アチエー」の如き稍や強力なるものは、斷然「ポルトガル」に獨立を唱ふるに至れり、同時代に「モルツケン」諸島に於ては「ポルトガル」の指揮官か「テルナト」王を捕へたるは、痛く土人の感情を害して、新なる騷擾を挑發し、又新指揮官「ゴンツアロー、ペライラー」か香料貿易は「ポルトガル」政府の獨占に在りと宣言したる以來、其紛擾を大ならしめたるも、辛ふして其平和を維持するを得たり、「ポルトガル」政府の代理官「トリスタヲ、デー、タイデー」及其後任者「アントニヲガルワオ」は、「モルツケン」諸島の「スルタン」の人心を收攬して、幸に「ポルトガル」の威嚴を維持し、其施政は「ポルトガル」支配時代に於ける全盛を以て稱せられしも、其後に至り再び騷擾續出し、一千五百八十年には終に「ポルトガル」人は「テルナート」を去り、「チドル」の新殖民地に向ふに至れり、「ポルトガル」人の勢力は此に

於て「モルツケン」島の一部及「マラツカ」海峡の二三の地方に限局せられ馬來群島は「ポルトガル」に對しては全く其支那及日本に對する貿易の仲間媒介地たるに止まりき

乙、和蘭人

馬來群島に於ける「ポルトガル」の支配は其前印度に於けるものと同しく僅少の期間に止まれり、十六世紀の終より和蘭及英國は印度洋に於て第一位の貿易及殖民を經營せんことを力めたり、即ち和蘭は西班牙が曾て米國に盛大なる通商及殖民を行ひしも其國勢の變轉と共に著しく衰運に傾けるに乘し、之れと戦鬪を開始しつゝ其新進的勃興の英氣を一千五百八十年以來「ポルトガル」の勢力將に地を拂はんとするの馬來群島及印度に用ひ「ポルトガル」及西班牙と競争の地位に立つて此廣大なる地域の上に其大富源の獲得を盡力せり、一千五百九十五年四月二日「コルネリース、デー、ハウトマン」の指揮の下に第一回の和蘭艦隊は「テキセル」を出帆し一千五百九十六年六月二日瓜哇の重要貿易港たる「バンタム」に着せり、此最初の企は指揮官の措置宜を失し好結果を得

さりしと雖、茲に爾後の計畫の端緒を發き翌年には印度貿易發展の爲めに多數の小會社成立したるも無益の競争は其目的の遂行に甚た不利なるを以て一千六百二年三月二十日「オルデンバルネウエルド」及「プリンツ、モリツツ」の盡力は諸會社を合同團結して和蘭東印度會社を設立したり、此會社は馬來群島上に領土を取得し一千六百三十二年以後は此地方に於て事實上の主權者の地位を襲へり、會社は「バンタム」に其本據を置き或は地方の土人諸侯と和親を結び或は「テルナート」「アンボイナ」「バンダー」等に於て其の着手せる香料貿易を進捗せしめ己に一千六百九年より總督及印度會議を置き馬來群島上に獨立の政府の成立を見たり、此時より西班牙及「ポルトガル」の勢力は漸く其地を振へり、英國は會社に對し盛に競争を試み和蘭の一大敵たりしも總督「ヤン、ピーテルスツラン、ケン」は善く和蘭の支配權の確立に努力し英國が「バンタム」の「ズルタン」と共力して加ふるの反抗に對抗し終に一千六百十九年より新に「バタヴィヤ」を設け茲に和蘭の勢力の中心を置き「ダイカタラ」を征服し「バンタム」を降服せり、吾人は瓜哇に立脚點を見出し一勢力を獲得せり今後愈其善良なる

勇氣の爲し能ふものを見よとは、總督ケンが先づ會社の監督官に報告したる一句にして以て其氣焰萬丈なるを見るへし、然りと雖歐洲に於ける政治的關係は英國の馬來群島上に於ける活動を容認せざるへからず、是れ和蘭政府の大苦痛にして爲めに英國及和蘭の間に種々の紛擾を醸出せり、アンボイナに於ける和蘭要塞に對する英人侵入事件の如き其一例なり、千六百二十八年には「バタウイヤ」は瓜哇人の包圍攻撃を被むれり、此時に於ける當時の總督ケン」の努力は最も其手腕の卓絶を發揮せり、而かも同年に於ける總督ケン」の死亡は實に和蘭勢力發展上大打撃なりき、此間に和蘭東印度會社は其根底漸く鞏固を來たし外部の抗撃の爲には微動をも爲さざるに至れり、恰も好し英國は此時より前印度方面に於て新に廣大なる活動地域を發見し茲に其勢力を扶植するに熱中し、又西班牙は「ヒリッピン」の維持に重を置き、千六百六十三年より全く「モルツケン」群島を抛棄せり、此に於て瓜哇及「モルツケン」群島は和蘭の占領地域と爲り、總督「アントン・ハアン・ヂーメン」の下に和蘭政府は其全盛を極はめたり、千六百三十六年—四十五年、當時和蘭の勢力は馬來半島にも普

及し「マラツカ」は其占領する所と爲り、瓜哇に在りては巧に土人諸侯と親和の關係を維持しつゝ、著しく四方に向て其勢力を擴張せり、會社は其全盛に伴ひ又無遠慮に其掠奪心を暴露せり、例へば「モルツケン」群島の香料獨占を定むるの法律の如きは土人に對し最も可憐なる誅求を試みたり、是れ他日會社に不利を招く所の暗黒面を爲すものなりき、千六百六十二年より從來等閑視せる瓜哇島以外の馬來群島に關し和蘭政府の注目を惹起せり、即ち先づ「ボルネオ」島に着手を試まれたり、其始は效果なかりしにせよ、「スマタラ」島に於ては海岸所々に新なる互市場の發達を見たり、「セレベス」島に於ては、千六百六十七年より「マカツサー」諸侯の間に蘭國に有利なる條約の締結を強要するに至れり、瓜哇に於ては亦著しく蘭國の勢力を發達せしめ、千六百八十四年には「バンタム」を全く征服し、英人の瓜哇に於ける根據を全滅せしめたり、新領土發見時代に於ける大特權會社の通弊と稱すへき腐敗の發生は和蘭東印度會社にも免かる能はず、會社が曾て有したる卓絶の企業的抱負は漸く消磨し去り、其役員の腐敗を續出し、千七百三十一年には總督「ヂデリツク・ドルウエン」は瀆職の

爲め免官せらるゝに至りしも、尙ほ之に依り其改善の目的を達する能はさりき會社の暴政は支那商人及勞動者を挑發して終に一揆の暴發を見るに至りしも、幸に總督アドリアン・バルケニエルの措置宜しきを得て無事に之を鎮定し却て會社をして其領土擴張の好機を得せしめたりき

英國は爾來其國運旭日の天に沖する如く其海上權をして世界第一を唱へしむるに至り、英國の慧眼は馬來群島の富源の甚大なるを認め其活動を再開し馬來半島よりスマタラ島、ボルネオ島及モルツケン諸島の上に於て會社と競争的地位に立たんとせり、此強大なる競争者に對しては腐敗せる會社の獨力を以て之に對抗するは固より望むべきにあらず、止むを得ず和蘭政府は十八世紀の終に於て本國より小艦隊を瓜哇に派遣するに依りて此可憐なる會社を保護したり、一千七百九十五年一月二十六日和蘭が其政體を共和制に改めたるや英國と戰亂を生し會社の運命は全く亡滅に瀕し佛國革命の間接の犠牲に供せられ、和蘭は其所領中先づ「アフリカ」の「カツプランド」を始とし前印度に於ける「セイロン」島及其他の所領、馬來半島に於ける「マラツカ」を英國の爲め

に失ひ、其翌年には「アンボイナ」及「バンダー」島を失ひ、唯瓜哇は英國の攻撃を免かれたるに依り會社の保有する唯一の所領と爲れり、然れども會社は内は負債に苦しめられ、外は本國の政治状態に依り究迫し僅に數年を辛ふして維持するに過ぎさりき、一千七百九十八年には會社は遂に解散を告げ其所領の全部を政府に引継きたり、一千八百六年五月二十六日「ナポレオン」の援助に依り和蘭は再び君主國に變制したるも、其亞細亞に於ける所領には却て甚た不幸なる運命を齎らせり、即ち英國は此好機を利用し一千八百十一年には最後の攻撃として瓜哇に一艦隊を派遣せしに「バタウイヤ」は無抵抗に陥落し其僅少なる和蘭兵の全部は九月十八日を以て降服せり、英國は此に於て和蘭殖民地の全部を占領し馬來群島上に於て從來和蘭の政策たりし貿易獨占の制を全廢して、英國の主唱する自由貿易制を開始して英國の理想とする自由なる海上及貿易國を實現せしめんことを力めたり、然れども其改革の突飛なるを其他の不調和は諸種の紛擾を惹起し英國政府も之か爲めに其馬來群島の占領を好まざるに至れり、之を以て「ナポレオン」戰爭の鎮靜を告ぐるや英國は一千

八百十四年八月十三日の倫敦條約に依り其奪取したる蘭領殖民地中より「カ
ツブランド」及「セイロン」島を除くの外一切之を再ひ和蘭に返還せり、一千八百
十六年六月二十四日を以て和蘭委員は英國司令官より「バタウィヤ」政府の引
繼を受けたり、然れども英國は一千七百八十六年以來其所領に屬せしめたる
「マラツカ」に加ふるに、一千八百十九年に新に買入れたる「シンガポール」島を以
てし、茲に世界貿易新市場を發達せしむるに依り、馬來群島殊に瓜哇に於ける
和蘭殖民地の上に一大打撃を與へ、「バタウィヤ」は爲めに其人口の半數を失ふ
に至れり、

和蘭東印度會社の解散と英國占領時代の改革とは、和蘭の狭量なる貿易獨占
主義に根本的の打撃を與へ、蘭國政府をして制度の改革を熟考せしむるに至
れり、然れども和蘭國の貧弱なる經濟状態は、英國の自由貿易を採用して直接
の國家收入を拋棄して、之に代ゆるに自由貿易の間接の利益を以てするの大
國的态度を學ぶこと能はさりき、加之其殖民地の收入を以て殖民地軍隊費用
を支出し且其歲計剩餘を可成多からしめ、之を本國政府に供用するの必要に

迫らまれたり、之を以て先きに英國占領時代に全廢せられたる香料獨占の制
は再ひ「モルツケン」群島の上に興るを見るに至れり、固より之を最初の制度に
比すれば大に緩和せられたるものあるは勿論のことなりとす、和蘭政府は一
千八百三十年以來總督「ヤン、ハン、デン、ボツシユ」の考案に係かる強制耕作方
案を實施し、政府指定の耕作物を最も廣き範圍に於て人民に強制耕作せしめ、之
に重税を負擔せしむるに依り政府收入を増加せしめんことを計れり、爾來和
蘭領は幸に外敵の攻撃なかりしも、其内部に在りては或は一揆の暴動の爲め
に、或は新地方の占領の爲め兵力を要すること少からさりき、而して蘭國政府
は馬來群島に於ける實際の支配を漸く其掌裡に收めんとしたるも、尙ほ「スマ
タラ」島及「ボルネヲ」島に在りては其勢力は未だ海岸に止まり、其内地に於ては
今日尙ほ不柔順のものあり、一般には土人諸侯に依り間接に之を統治したる
も特に必要あるものに付ては之を直接管理の下に強要したる地方もあり、一
千八百六十八年には和蘭政府は大なる内政の改革を斷行せり、即ち瓜哇の土
人か負擔に苦むは一般周知の事實にして、加之其各種の勞働強制は政府の所

期の産業發展を見る能はさるのみならず、却て産業委靡の結果を生したるものあるを以て、強制耕作方法の廢止は斷行の止むを得ざるに至れり、曾て和蘭の詩人にして且殖民地官吏たりし「エドワード、ドーウエス、デツケル」が蘭國政府の惡政を攻撃したるの著述は、大に世上の論議と朝野の注目とを惹起し、強制耕作法廢止の前提を爲したり、然れども「コーヒ」專賣は依然として存續せり、固より其形體に付て多少の變更を施したるは明かなり、土人をして自己の拳の上に勞働せしめ、其收穫物を低價を以て強制買取するの原則は尙ほ行はれたり、是れ政府の財政上止むことを得ざるの必要あるに依る、一千八百七十三年より終に「モルツケン」諸島の香料獨占制を廢止するに至りしも、一千八百六十四年より「スマタラ」島の煙草耕作及「セレベス」島の「コーヒ」耕作の進歩は新なる財源を供給したるに依り、之か爲めに政府の財政上に格別の影響を及ぼさざりき、要之蘭領殖民地は種々の缺點を有するに拘はらず、此の如き廣大の地域に於て多數の亞細亞人を極めて少數の歐人を以て支配したるの事實は大に贊稱の價値を有し、其如何なる政策、如何なる方案に依り其目的を達したる

やは實に研究の價値ありとす、左に馬來群島の主なるものに就きて其沿革の概要を畧述せん

(一) 瓜哇島

瓜哇島は馬來群島中其面積は他の島嶼に優るものあるにあらずと雖、最も豊饒且肥沃にして、優に數千萬の民衆に其日常の食料を供し、且砂糖、「コプラ」、「コーヒ」、煙草等輸出の物資に富み、通商上頗る便利の地に立ち、馬來群島中最先に開拓せられたり、其比較的平坦にして、港灣に富める北方海岸には、西歐の文化先づ其根柢を下ろせり、瓜哇は大噴火山帯の爲めに貫通せられ、其間に數十の獨立せる政治團體存在せり、瓜哇には黒人の痕跡を認むる少く殆んど全く馬來人の住所なりと云ふことを得、瓜哇の古代史は甚だ不明にして、而かも其歴史は僅かに「イスラーム」時代よりを語るものに過ぎず、吾人は唯他國人の報告、瓜哇に遺留する建築物及彫刻物等に依り、之を推考するに止まるのみ、瓜哇は馬來群島に於て、永く文化の中心を爲し、今日尙ほ其政治上中心たるの地位を維持せり、瓜哇に關する最も古代の報告は印度商人に

依れり、印度商人は吾人の歴史の最初に於て已に瓜哇と交通を爲せり印度人か早く其直隣にあらざる瓜哇と通商したるの事實は、瓜哇か已に一國を形成し而かも其支配者は通商者を善遇せること及其住民か已に原始的無需要の階級を脱したるものなることを證するに足る、印度人は其文明を瓜哇に移植しつゝ土人諸侯と通商して其富源の開拓を計らんとしたるものゝ如し、之に關して土人の口碑の始に顯はるゝものは「アジー、シヤカ」なり、彼は紀元後七十八年頃瓜哇に來り其年を以て瓜哇歴年の起算點とせり、彼は文明と宗教とを瓜哇に齎らし其國制を一定し法律を定め且文字を輸入せり、瓜哇の古代口碑に依れば印度文明の影響を受けたる數多の國名を傳へり、即ち「メンダング、カムラン」は第六世紀の終、第七世紀の始に於て「デアングラー」は紀元後八百九十六年に「パジャジャラム」は一千百五十八年に於て勢力を有せりと云ふ、瓜哇に於ける初期の移住者は「スイヌス」の信者なるに注意を拂はざるへからず、佛教信徒は後に渡來せるものなり此事實は古代の彫刻物其他の古蹟に其證據の明白なるのみならず、支那人法顯の瓜哇旅

行記録中亦之を認めり

西方瓜哇即ち今日の瓜哇の首府たる「バタウイヤ」附近に於ては、古印度人の痕跡を發見せり、此地方に於ては已に紀元後四百年又は五百年の間に一國を爲し新なる文明と宗教とを傳來せり、恐くは是れ最初の佛教徒か始て勢力を獲得したるものなるへし、第七世紀の始に於ける重要な彫刻物は西方瓜哇の諸侯「アジチャ、ダルマ」を語れり、彼は熱心なる佛教信徒にして且其支配者なりき、其勢力は「スマタラ」にも及び、瓜哇の一豪族たる「シワラガー」をも征服せり、「シワラガー」の名稱は其「ブラマ」教徒なるを知らしむ、彼は宏壯なる殿堂を建築せり、其場所不明、是れ宗教上の爲にするにあらずして全く政治上の權威を主張するに基つくものなり、彼は好て他の諸侯と衝突を惹起せりと云ふ、當時瓜哇には別に一國あり二十八の小諸侯は之に服従し紀元後六百七十四年頃には女王「シマー」が其王位に上ほれることは支那の史料に明白なり、其首府は瓜哇の東方地方に在り、主として其勢力を瓜哇の中央に向て擴張せりと云ふ、此點は其「アヂチャダルマ」と全く別國なるを明にせ

り、佛教は爾來前印度よりの活潑なる移住民に依り援護されつゝ、瓜哇の中央部に向て盛に發展せり、當時「ブラマ」教は瓜哇の東部及西部に於て行はれたるものゝ如し、佛教が第八世紀及第九世紀に於て其勢威益盛大と爲りしは當時の建築物の遺留せるものに依り殊に瓜哇の中央部に存する殿堂の古跡及無數の彫刻物に依り之を推想することを得、八百十三年に「サンジパール」の黒奴を支那の朝廷に貢納したるの事實は瓜哇が當時其通商の擴張せるを證明するに足る、吾人は殿堂其他殘存せる古蹟に依り「プロボードル」國か他の諸國に卓越せる文明を有し十世紀の終に至り亡滅したることを明にせり、即ち十世紀の前半に顯はれたる中央瓜哇の殿堂及彫刻物は「プロボードル」國か當時亡滅に向ひ「プロボードル」の亡滅と共に佛教の瓜哇に於ける黄金時代の終はれるを證明せり

此時代より政治上の中心は瓜哇の東方に移れり、即ち十一世紀に於ける彫刻物は「エルランガ」王の事蹟を語れり、彼の祖國は今日の「スラバヤ」地方にして幸福なる戦勝に依り瓜哇の大部を制服し、一千三十五年には其勢力の頂

點に達せり、其純然たる馬來的の名稱は其王族か馬來人より出たるを證するに足る、而して彼が印度の文明に心酔せるは東方瓜哇に於て「サンスクリット」の彫刻物か十一世紀の始より夥しく其數を増加せるに依り之を推すことを得、支那の報告書は同時に瓜哇の西方に一國の勃興して「スマタラ」の南部諸國と盛に闘争せるを傳へり、

次の世紀は比較的に暗黒にして唯印度貿易及印度文明の勢力の衰退と、同時に瓜哇に於て無數の小國か割據分立せることを傳へるのみ、然れども此状態に拘はらず當時支那の元主「クブライ」が千二百九十三年に於て瓜哇を奪はんとせるの計畫は全く失敗に終はり、唯其元兵か瓜哇の東方一帯の地を蹂躪したるに止まりき、當時東方瓜哇には「パヌルアン」「ケデリー」及「スラバヤ」等の諸國其勢力を得、中央瓜哇に於ける諸國は却て衰微に傾きしも千四百年より前印度との交通再び盛と爲るや、中央瓜哇に於て「ソロ」及「サマラン」の二國の勃興を見るに至れり、此新なる印度文明再興時代に於ては「ブラマ」教再び其勢力を恢復し東方瓜哇の諸國に向て擴張せり、其東方諸國中に嶄

然頭角を顯はし最も強勢なりしは即ちモヂヲパヒット國なりき、西方瓜哇に在りては當時パジャラム國全盛の地位を占めたり、

「モヂヲパヒット國の紀元に付ては瓜哇人の口碑に依れば一千二百二十一年にあり其最初の支配者はケンアロツクにしてラヤジャ〔王〕の稱號を有し千二百四十七年に死亡すとせりと雖もモヂヲパヒット國が國家としての紀元は實に一千二百七十八年にして其最初の王はケルタ、ラヤジャ〔王〕なりと云ふを正説なりとす、モヂヲパヒット國は最も有名なる瓜哇の國家にして歐人が瓜哇に到來して國を立つるに至る迄永續せり、故にモヂヲパヒット國に注目するは馬來群島内の國家の研究上極めて須要なりとす、モヂヲパヒット國は一度は瓜哇の全部を制服し假令一統國を形作るの目的を有せざるも、尙ほ其支配は附近島嶼の海岸に迄延長せり其狀恰かも瑞典か那威を占領するの意思なくして東海海岸に其勢力を擴張し、又英國かスコットランドを統一するの前に於て佛國の海岸を占領せると同一なり、瓜哇の西部に在りては強國割據して或はモヂヲパヒット國を壓迫せんとし、或は

馬來半島の首府シンガポールを破壊せんとしたることあり、千二百五十二年、戰鬪好なるアンカウイジャヤ〔王〕時代に於てはモヂヲパヒット國は最も強勢にして千三百九十年頃、三十六の小國を征服し、スマタラ島に於て所々に瓜哇の殖民地を設置し、ボルネオ島の南岸の一部亦其勢力範圍に屬せり、瓜哇人は當時モルツケン群島にも移住し其上に政治上の權利を占握せり、バリ島亦モヂヲパヒット國の直轄に屬せり、モヂヲパヒットは此他無數の小國の上に最高權を取得せり、唯此等の小國は機あらは獨立せんとし、爲めに一千四百三年より西方瓜哇及東方瓜哇間に於て大爭亂を發生し、支那兵も其間に干渉したることありき、

印度文明か瓜哇に到來するや、其反面に於て最初より一種の「バチルス」を伴ひたり即ちアラビヤ人か其商人の移住と共に回々教を輸入し馬來人及其他の在留人の上に其勢力を及ぼしたること是なり、コンラード、レーマンは云へり東洋の商人は歐洲の商人と異なれり、歐人か亞細亞殖民地に於ては常に其故郷に歸去するを希望するに拘はらず東洋人は其滞在を永續し容

易に土着を爲し土人の女を娶り土人と親和し言語、宗教、風俗及慣習等土人と一致することを嫌忌せずとアラビヤ人は此の如き東洋商人の長所を有するのみならず單純の貿易上の利權を獲得せんよりは宗教上の感化を以て其精神上的の支配を得るに重を置き、其奮闘の狀實に「イスラーム」の英雄時代に酷似せり、加之回々教の侵入に對する佛教及「ブラマ」教の反對は頗る軟弱なりき、故に十五世紀の始に於ける支那人の報告に依れば瓜哇の土人は全く邪教崇拜者に屬し支那人の了解せる支那及印度の佛教徒と同視すること能はざりき、又口碑に依れば「スマタラ」に於ける「モヂヲパヒット」の占領地は漸く回々教の侵襲を受け其代理官「アルガーダーマー」及其子「ラーデンパター」等亦回々教に歸依したりと、「モヂヲパヒット」國の亡落に關する瓜哇の不明なる傳記は一千四百七十八年に於て回々教に歸依せる一揆、女性も參加す、暴發して當時の王「プロミヂョー」に迫り其位を失はしめ、其忠勇なる「モヂヲパヒット」國の「ブラマ」教徒は「バリー」島に退き瓜哇の東岸一部を維持して回々教の「バリー」島に於ける侵入を固く防止せることを傳へり、回々

教か一度「モヂヲパヒット」國に勝利を占むるや大に四方に向て其征畧を試みたり、一千五百二十二年「バンタム」の支配者は回々教の侵襲に苦しみ「ポルトガル」の保護を求めたりしに其「ポルトガル」艦隊の現はれたるときは既に重要な貿易場は皆回々教徒の手中に陥れり、回々教は此の如くして漸く瓜哇の各地方を風靡せしも概して一揆軍と伴ふを常とし、回々教の隆盛と共に各所に小國の成立を見たり其中に就て「パージャング」及「ダマート」は最も勢力盛なりき、回々教の凱旋後一百年にして趨勢亦一變し始は「パージャング」の一州に屬したりし「マタラマ」の諸侯急に盛大と爲り、終に瓜哇の東部及中央部を制服するに至れり

瓜哇の西部に於ては回々教國の「バンタム」は、全盛を占め一千五百九十六年より和蘭人と盛に衝突せり和蘭か一度「バタヴィヤ」を設立し其勢力の中心點とするや「バンタム」は英國の共力を得て大に和蘭に對抗を試みしも、却て和蘭の勢力は日進月歩の狀を呈せり和蘭は他方に於て「マタラム」國と爭端を發し「マタラム」の「スルタン」「ススハナン」「アガング」は、一千六百二十八年、一千

六百二十九年に二回「バタウイヤ」を侵撃するに至れり然れども「アガング」の死するや其子「インゴゴ」は和蘭東印度會社と和親條約を締結せり當時東印度會社も強て領土の擴張を力めさりしを以て暫く其間に平和を見たり、「インゴゴ」の後繼者「ススハナン、アマング、クラット」が其後「スラバヤ」に定着せる「ブギズ」人の侵畧に苦しみ會社に其應援を求むるや、會社は立ろに之に應じたるも其報酬として一千六百七十七年「チャバラ」の條約に依り其土地の割讓を求め大に其利權を擴張したりき其後紛擾再び發生し當時の侵畧者たる「トルナヂヤヤ」は更に「アマング、クラット」に攻撃を加へ之を其首府より追放し「ケデリー」を新に首府と爲すに至るや、蘭政府は再び之れに干渉し「アマング、クラット」の一族を正當支配者なりと決定し追放せられたる「クラット」王を呼迎へしも「クラット」は既に死亡したるを以て其子を立て新王と爲し和蘭の護衛兵を附して常に之を保護せり、一千七百三年「マタラム」の「ススハナン」の死亡するや又其後繼に關し紛争を生せり、和蘭東印度會社は其好む所の「パターブウヲノ」を王位に即かしめたるも紛擾は尙ほ久しく

繼續せり、此の如くして「マタラム」の「ススハナン」は不斷和蘭の保護に依り王位に即き辛ふして其國を維持せり、一千七百四十年支那人が一揆を突發せしめたるや「マタラム」の「ススハナン」は「バンタム」及「チエリボン」の諸侯と合同して其應援を爲し其紛擾をして頂點に達せしめたり、然れども東印度會社が速に其一揆を戡定せるを以て「マタラム」の「ススハナン」は其位を譲り且「マドウラ」の支配權を拋棄するの止むを得ざるに至れり、此に於て「マタラム」をして全く海岸線を失ふの一國と爲らしめ蘭人に對して殆んど無勢力の地位に立ち其首府は「ソロ」(「ソロカルター」)に移されたり、爾來會社が「マタラム」に對するの壓迫は漸くに大を加へ不斷に一揆又は相續争の續起せるを見たり、其戦亂は一千七百四十九年より五十五年迄相次ぎ終に其國を兩分するの止むを得ざらしめたり即ち「ススハナン、パク、ブウヲノ」第三世は「ソロカルター」と共に東部を、其反對者「マングク、ブミー」は「デヲカルター」と共に西部を支配せり、此の如く「舊マタラム」より二箇の新國家の發生したると共に、西部に於ては「バンタム」及「チエリボン」等二國は全く和蘭東印度會社に從屬せ

るを以て當時會社は事實上瓜哇の大部を占領するに至れり、此状態の爲に
大戦役は鎮定せしも會社の行政は漫りに土人を壓迫し其間に日々小紛擾
あることを免れざりき

會社の最終の破綻及和蘭の國運の退縮は、一千八百年より瓜哇の上に不秩
序を發生せしめ「ヘルマンウイリアムダンデルス」の一千八百八年に實行
せし改革は時機既に遲きの感ありき、英國は終に一千八百十一年を以て瓜
哇島を畧奪するに至れり、此時に當り「バンタム」及「チェリボン」は全く其土地
を奪はれ其「スルタン」は年金又は空位の何れをも得る所なかりき、唯「ソカ
ルター」の「ススフナン」及「デヲカルター」の「スルタン」の二者は尙ほ半獨立の支
配者として殘存するを見たり、此二者も一旦英國に反抗したるの制裁とし
て其占領地域を減縮せられ且其首府に於て常に英政府の護衛兵の監視を
受くることと爲りたり、和蘭か十九世紀の初頭に倫敦條約に於て歐洲列國
の同情を得て再び瓜哇以下馬來群島の領土を恢復したるや、瓜哇に向ひ一
新幸福時期を開展せり何となれば舊會社時代の狹量なる貿易の獨占及大

制限は大に緩和せられ政府は其能ふ限に於て瓜哇に好適なる有益植物の
植付を一般に奨勵し之に依り人口の増加及政府の收入並民福の増進を計
りたればなり、然れども強制賦役の大壓迫は同時に土人の頭上に落下し之
か爲めに屢一揆を惹起せり、一千八百三十二年に最も不穩なりし「バンタム」
の「前ズルタン」を追放したるに依り一時靜謐を見たり、一千八百二十五年「デ
ヲカルター」に於て世子「デゴネグロ」の起したる一揆は強烈にして最も恐
るべき形勢なりしと雖一千八百三十年に至り辛ふして其治平を見たり、此
鎮定に關しては明に蘭領印度政府の弱點を暴露したるを以て一千八百六
十八年以來根本的に其施政の改善を斷行し土人の強制賦役を大輕減し
り爾來和蘭政府は瓜哇の統治に一段の注意を加へたるを以て瓜哇をして
馬來群島中の模範領土と稱せらるるに至らしめたり

(一)「スマタラ」島

瓜哇より廣大にして延長せる地形を有する「スマタラ」島は、其内地に於ては
比較的清涼の氣候を有する高地帯なり、其東岸は西岸より平坦にして入り

易き地なり、其歴史上の地位はスマタラ島か一方、マラッカ海峡及印度大陸に近接し他方瓜哇島を抱擁せるに依り定まれり、人類學上スマタラ島は純粹の「マレイ」國にして恐らくは馬來人の其西方及北方に向ふの出發點たりしもの、如し、内部には「バッタタ」に於て一人種あり之れ多くの文明の影響を受けたるに拘はらず其特性の大部を保存し外部より侵來する宗教をも退けたり、前印度及其文明はスマタラ島に對し其位地の關係上最も早く交渉を爲し殊に「マラッカ」海峡に於ては頻繁なる接觸を見たり、此關係はスマタラの北端地方今日の「アチエー」に於て夙に顯著と爲り先づ秩序ある國家を形作り漸く其内部に向て印度文明を擴張せり、北端に於ける最も古き國は「ポリ」及「スマタラ」にして其「スマタラ」なる今日の「アチエー」の東方名稱か遂に全島の名を成すに至れり、瓜哇に於ては政權は主として土人の手に在りしも印度の文明及宗教大に行はれたるか、北方「スマタラ」に於ては移住せる印度人は最先に印度型の封建國を形成し其首府を「パシル」に置き、スマタラ海岸の大部を支配したりき。

此の如く北方に於て印度文明が着々其根柢を張れる間に、中央地方に於ては「メナングカバウ」國が國家的組織を爲しつゝ、南方に向て其勢力を發展せり、支那の報告書に依るに既に紀元後第五世紀より一國を形作れるもの、如し、其地理上の地位は南方「スマタラ」をして瓜哇の影響を受くることを免れしむる能はさりき、即ち瓜哇の最初の印度時代に於ては其領土は「ズンダ」海の兩岸に至れるは明白にして南方「スマタラ」の住民は後に漸く獨立を贏ち得たるものなり、其瓜哇と南方「スマタラ」間の關係に付ては明確なる報告書を缺き唯第十世紀に於ける西方瓜哇及南方「スマタラ」間の戦争に付てのみ支那の報告を見るあるのみ、一千三百七十七年の頃再び南方「スマタラ」は瓜哇人の占領する所と爲り支那の救援を求めたることあり當時此地方は瓜哇の「モジヲパヒット」國の占領に屬せりと云ふ「パレムバン」は當時瓜哇の移民に依り設立せられたるものにして茲に回々教が其最初の歸依を見出したる所なりき。

回々教は「スマタラ」の北方にも侵入し第十三世紀の始には、最初の回々教の

宣教師は「マラツカ」海峡に現はれ「スマタラ」の北部を基礎とし「マラツカ」平島及其周囲の島嶼に其勢力を移植せり、然れども其「アチエー」に侵入せるは極めて遅くして十六世紀の始に於て即ち東部瓜哇よりも後れて布教せらるゝを見たり、此地方に於ては古代に於ける印度人の政治上の勢力は夙に根本より破壊せられ純然たる土人諸侯の全盛期に屬せり、信用すへき口碑の傳ふるところに依れば「アリー」モガヤット「シャー」は「アチエー」に於ける最初の回々教歸依の「スルタン」にして一千五百三十年より一千五百五十二年の間に「アロ」エドデン「アルカハル」をして其國政を改革せしめ北方に於ける回々教の強敵たる「バツタツク」を征服せり、爾來「アチエー」は「マラツカ」海上「ポルトガル」人と馬來人間に不斷行はるゝ戦闘に加入し常に馬來人を代表して奮闘し其軍艦及兵士は屢「マラツカ」に現はれ「ポルトガル」の市街を奪はんとせり、和蘭か「ポルトガル」の後継者の地位に立ちたるに當り和蘭は先づ「アチエー」に對して攻撃の態度を採れりと雖、初は和蘭人は其注視を主として瓜哇及「モルツケン」に用ひたるを以て、單に一千六百二年に「アチエー」と通商條

約を結び一千六百六十九年に一地方を互市貿易場として讓受けたるを以て満足せり、其間に「アチエー」に於ては内亂起り其勢力稍や衰へたるも和蘭人は「スマタラ」島の利源の大なると共に「アチエー」の決して輕視すへからざるの敵者なるを了解して漫に干戈を試みざりき、此の如くして十九世紀の中間に於て初めて記憶すへき試石は「スマタラ」島上に和蘭政府より投出せられたり、一千八百七十三年三月二十五日に起れる和蘭と「アチエー」間の戦闘は豫期すへからざる困難及失敗と共に「アチエー」人の強烈なる反抗に依り且其地勢の不利、氣候の不健康的なる等は大に和蘭の軍隊を苦めたるも、一千八百七十九年に至り漸く「アチエー」を征服することを得たり、然れども爾來常に多數の軍隊の派遣を必要とし且一千八百九十六年に於ては再び大一揆の暴動を見るに至りしは、亦以て和蘭の支配か甚た不安固なる状態に在ることを證するに足る、

「スマタラ」の南部に於ては其最南部たる「ランボンク」は夙に瓜哇の「バンタム」に對し從屬關係を保持せり、南方「スマタラ」中の最も重要なる「パレムバンダ」

は「モデヲパレット」の亡滅後一時獨立を得たるも一千五百四十四年に於て瓜哇の「デマーク」より出たる「ゲディングソウル」の爲め奪取する所と爲れり、和蘭は一千六百六十二年に於て土人の一隊か急に其互市貿易場を襲撃し殆んど其住民の全部を殺戮するや、和蘭は直に其兵を遣はし一千六百六十四年には和蘭の軍艦に依り「パレンバング」を打破し其ズルタンに對し頗る有利の通商條約の締結を強要するに至れり、此條約は一千八百十一年迄行はれり、和蘭に對し最も大なるの利益は一千七十年に「パレンバング」所屬の「バンカー」島上に錫の大産出を發見せること是なり、和蘭東印度會社は直に特別條約に依り其採掘權を取得せり、一千八百十一年に瓜哇か英國の攻撃を受けたるに際し「パレンバング」の「スルタン」の命令に依り「パレンバング」の互市貿易所は土人より襲撃せられ其居留蘭人の大半を殺戮せらるゝに至り、和蘭と「パレンバング」の間には恢復すへからざるの破綻を生し英人も之に對して直に問責の軍隊を派遣せり、一千八百十六年倫敦條約に依り東印度所領か再び和蘭に返却せらるゝや、一千八百二十三年より「パレンバング」

は全く和蘭殖民地の一部に編入せられたり

「スマタラ」の西海岸に付ては夙に「マルコポール」に依り紹介せられたりと雖、此地方に於ては唯「ベンクターレン」が稱するに足るのみ、一千六百八十五年以來此地方は英國の勢力圏内に立ちたるも一千八百十四年八月十三日より和蘭の所領に復したり、其西岸に於ける島嶼中「ニアース」は全く外國の文明より其影響を免かれ風俗習慣等古代の馬來傳來のものを固く保存せりと云ふ

(二)「ボルネヲ」島

「ボルネヲ」島は馬來群島中最大の島嶼なりと雖、從來の歴史上其名甚た揚らざりき、是れ其各方面か濕りたる不健康の低地を以て取圍まれたる地理上の性質か此運命を齎らしめたるものなり、「ボルネヲ」島に於ける金及「ダイヤモンド」の豊富は未だ人心を刺戟するに至らざるも尙ほ馬來群島の航海者の注意を惹きたり、此島の性質か比較的に外國人を誘起するの力少きと共に其住民亦航海、移住及通商に對する嗜好多からざりき、「ボルネヲ」の中心人

民は即ち「ダイヤツク」にして全く内地的人民として他國に移動せず固く其古來の風習を保存せり、「ボルネヲ」島の内部に於ては國家の形成に關して殆んど言ふべきものなし、唯海岸に於ては外國人の侵入に依り國家的組織の始を爲せるものあり、其南岸中瓜哇に面接せる方面は瓜哇よりして印度文明の影響を受けたるは歴史上の報告、建築物、佛像、彫刻其他數多の古蹟に依り之を證明せり、「モヂヲパヒット」が「バンデルマヂエン」及其の南岸諸國に政權を及ぼしたるは明白なり、住民の口碑に依れば「バンデルマヂエン」は瓜哇より移住せる前印度人「レムボングマングクラツト」より設立せられたるものなりと云へり、「モヂヲパヒット」已滅の時より「バンテルマヂエン」は急進して「ボルネヲ」の一強國と爲り瓜哇より印度の文明と印度の宗教とを輸入したり然れども口碑に依れば一千六百年より「バンデルマヂエン」は瓜哇の回々教國たる「ダマートク」に又「スカダナ」及「ランダツク」は瓜哇の回々教國たる「バシタム」に従屬するに至り、「ボルネヲ」に於ける回々教の宣布を甚た容易ならしめたりと云ふ

北岸に於ては古代より支那の影響を受けたるは明にして、今日尙ほ其内地の「ダイヤツク」人が古代の通商に依りて得たる支那の古磁器を有するもの少からず即ち最古の「ボルネヲ」に於ける國家は概ね支那との通商に依り其勢力を擴張せり北岸の「ポロー」西岸の「プニ」等は其例なり、北部「ボルネヲ」の主なる國家「ブルナイ」は馬來人の移住に依り成立したるものにして其紀元甚た不明なるも、恐らく舊國「ポロー」發達したるものゝ如し、十三世紀の中間に於て「モヂヲパヒット」は一時「ブルナイ」に勢力を有したることあり、歐人が始めて「ブルナイ」を訪つれたるときに當りては馬來人は既に一國を爲し其勢力は「スル」島を超へて「ヒリツピン」群島に及へりと云ふ

「ボルネヲ」の西岸に於ては「ポンチャナツク」(古の「プニ」)「マータン」及「モンガマ」等の馬來國存在す、「スカツダナー」及「ランダツク」も元來馬來人より設立せられ後に瓜哇の支配に従屬せるものなり、「サムバス」鑛山地方には十八世紀の後半より支那人の多數移住し始は馬來人の「スルタン」の下にありしも一千八百五十四年以來は和蘭政府の支配下に立てり

「ボルネヲ」の東岸に於ては「セレベス」島の「ブギス」人か其故郷を見出さんとして茲に數多の小國を成立せしめたるも、其目的とする所は唯通商と海賊とにありき總て此等の移住民は「ボルネヲ」島の海岸人民即ち土着の「ダイヤツク」人、馬來人、瓜哇人、支那人等の混合せるものにして、其何れの部分か其統率者と爲るかは全く其時代に於ける偶然の事情に基づけり

歐人にして始て「ボルネヲ」島と通商關係を結ひたるは「ポルトガル」人にして一千五百二十一年以來の現象なり「ポルトガル」人は一千六百九十年頃再ひ其通商を力とめたりしも遂に其効果を見出さざりき、和蘭東印度會社は始て一千六百六年に「バンデルマヂェン」に其互市貿易所を開設し香料及金塊の輸出に従事したるも、其「ズルタン」の動搖せる且敵意を挾める態度は十分に貿易の發展を見る能はざりき、一千六百三十八年及一千六百六十九年に和蘭の官吏及商人か「バンデルマヂェン」に於て殺戮の害に遭ひ一時全く其貿易を廢止するに至るや、和蘭の軍隊は一千六百七十二年を以て「バンデルマヂェン」を破壊し其首府を「マルタプエラン」に移さしめたり、然れども「バン

デルマヂェン」は亦再興せられ、歐洲貿易の利益は其「スルタン」の不忠實なるに拘はらず速に和蘭東印度會社と親睦せしめ一千七百三十三年以來再ひ會社は「バンデルマヂェン」に於て通商貿易を試むに至れり、爾來多少の波瀾ありたるも其相互の關係は安全に維持せられしか其「バンデルマヂェン」に於て相續争を見るに及んては會社は之に干渉して終に一千七百八十七年を以て「バンデルマヂェン」の主權を取得し「ボルネヲ」の南岸の大部並に香料貿易の專權を占握せり、十九世紀の初頭に於て一時英國か瓜哇及其他の蘭領東印度を占領せるも、尙ほ當時の「バンデルマヂェン」の「ズルタン」は和蘭と平穩なる交通を繼續せり、當時英人「ウイリリヤムハール」の大膽なる試は南「ボルネヲ」に於て一國を成立せしめたるも、新條約及一千八百五十年より一千八百五十四年に「ボルネオ」の西岸、一千八百五十九年より一千八百六十二年に「ボルネヲ」の南東岸に、起りたる戦争は終に和蘭人の「ボルネヲ」島上に於ける勢力を大擴張せり、「バンデルマヂェン」は一千八百五十二年の相續争の際再ひ和蘭の干渉を招き遂に一千八百五十七年より和蘭の奪ふ所と爲り

一千八百六十四年を以て全く蘭領に編入せられたり、其一千八百八十二年に於ける新一揆は遂に之を變更する能はざりき

十九世紀に於ては「ブルナイ」の「ズルタン」は其勢力著しく退歩し一千八百三十九年に「サラワツク」州に一揆の起るや、其「ズルタン」の代理官は英人「ブルーク」の救援を求むるに至れり、英人「ジェムスブルーク」は一千八百三年「ベンガル」の「バンデル」に生れ個人之力を以て「ボルネヲ」に一殖民地を得んとするの計畫を起すの志を有せしか、此に於て一千八百三十九年六月其乗組員を率て「ボルネヲ」の海岸に顯はれ立ロに「スルタン」抵抗者たる謀反者を制服せり、其報酬として「ブルーク」は一千八百四十年に「サラワツク」の代理官と爲り一千八百四十二年には此地方を事實に於て領有せり、「ブルーク」は所謂冒險者流にあらずして高尚にして尊敬すへき精神を有し其土人に幸福を齎らすへき善政を爲さんことを力めたるも、其「ズルタン」が誤て敵意を挾むに至りては止むことを得ず英國政府をして「ズルタン」に迫り一千八百四十六年には「ラブン」島を英國に讓與せしめ終に自ら獨立國と爲るに至れり、「ブルーク」

は一千八百六十八年に英國の「バルラトソン」に於て死亡せり、此に於て「サラワツク」の王位は其甥「サー、チャレス、ジョンソン、ブルーク」に譲りたり、此國は一千八百八十八年より全く英國の保護權の下に立てり、「ボルネヲ」島の北東部は一千八百七十八年以來英國貿易會社の占領する所と爲り一千八百八十八年に至りては、其近接の「スルタナートブルナイ」と共に海峽殖民地總督の指揮權内に移されたり

(四)「セレベス」島

馬來群島中の第四の主たる島嶼は「セレベス」にして「ボルネヲ」島とは全く別異の性質を有す、此島は灣曲頗る多く「ボルネヲ」島の屈曲少なきと大に異なる、又此島は山岳多き半島に富み「ボルネヲ」島の如き大平野少し、「セレベス」は土地豊饒にして且鑛山にも貧しからず頗る價值ある地方なりと雖も商人をして快速且光輝ある大利を望むへき刺戟的物資に乏し、而かも此島の地勢は住民の一部を驅て海に向はしめ出沒自在なる海賊、貿易商人及豪族たらしめたり、故に「セレベス」は恰かも西方に於ける「マラツカ」の如き地位を

東方の馬來群島上に保有したり、セレベスは群島の古來の住民より一國と見做されずして其北半島は「アルフル」人、南半島は「マカツサ」人及「ブーギス」人の支配する地方と爲れり、和蘭政府の新行政區劃か「セレベス」を「メナド」地方及「マカツサ」地方の二に分ちたるは此事情に適切なるものと云ふべし、一般に「セレベス」の住民は純然たる馬來人なり、たとひ「アルフル」人には多少黒色人の混血を認むるものもあるも、其馬來人たるの本性は之を失はず、「ブーギス」人及「マカツサ」人は他の混血を見ざる純粹の馬來人にして其大體に於て「ポリネシヤ」及「マダカスカル」に殖民したる「マレ」人種に通有の大膽なる航海者たる性質を有せり、住民の主たる部分か常に多數の小團結に分離せられ決して大合同の傾向を有せざるは、人をして「セレベス」島に一國の成立を疑はしめたり、印度の文明は此島には極めて弱き痕跡を以て侵入したるは其梵語か「ブギス」人の最初の口語に存せざるを以て推すに足る、「セレベス」島に於ては其住民は數多の部落に獨立して絶へず相互に争闘し其間に甚た殘酷なる血戦を見たるは、「マカツサ」の年報か其地方の會長の自然

の命數を以て終れる者の稀なるを傳ふるに依り之を推測するに餘りあり、「セレベス」の南方に於ては始は「ゴア」人其全盛に達し、後には「マツカサー」人其全權を占めたり、「ブギス」人の間には「ポーニー」人勢力を占め東部馬來諸島に向て發展せるものゝ如し、

「ポルトガル」人は「セレベス」島に於て始て一千五百十二年に現はれたりしか、當時「セレベス」島上には微力なりと雖數多の國家的團體の存在を見たり、「マカツサ」の年報は三十九の諸侯を數へり、口碑か「マカツサ」國は紀元一千四百年頃に成立せりとするは稍や信を措くに足るものゝ如し、「ポルトガル」人は一千五百四十年に「セレベス」島に足を止め先づ「メナド」地方に互市貿易所を設け後に南方に赴きたり、然りと雖後年英人及和蘭人の遭遇したる如き幸運なる成功を見る能はざりき、之に反し和蘭人は一千六百七年以來始めて「セレベス」に着目したるか、爾來頗る良好の結果を收めたり、此間に回々教は「セレベス」島上に傳來し一千六百三年には「マカツサ」の首長を其人民と共に改宗歸依せしめたり、此世界的宗教の感化は土地の開發を促かし、「マカ

ツサー國の勢力は次年に於て著しく増進し南方セレベスに於て其全權を握るに至れり、マカツサー國は「プギス」人たる「ポーニー」國との間に屢争闘を重ねたり、是れ「ポーニー」國は民主的に組織せられ回々教の侵入を固く拒みたるに依る、マカツサーの「ズルタン」は一千六百四十年に至り「ポーニー」を亡はして之を數多の小國に分裂せしめたり、マカツサー國は多少の海軍力を有し漸く「ズムバワー」及「バートング」の海岸を征服せりと雖、其「バートング」に於ける和蘭の互市貿易所の破壊は和蘭東印度會社の干渉を招き、和蘭人は「マカツサー」より逐はれたる「ポーニー」族を扶け「マカツサー」の「ズルタン」を征伐するに至れり、此に於て和蘭政府は「ポーニー」國の支配を其保護者たる「ラジャ、パラカー」に與へ、一千六百九十六年「パラカー」の死亡するに當り始めて之を會社の直轄地に編入せり、和蘭は此の如くして「マカツサー」人と「ポーニー」人間の根柢ある疾視を利用して、漸く會社の支配權を擴大せしめ終に一千八百二十五年に於て和蘭は其全勝を制し、たとひ一千八百五十六年及一千八百五十九年に於て新なる争亂起りしことあるも、其領土は全く東印度會

社の所領に確定せり

北セレベス「半島」の歴史は大に「モルツケン」群島の歴史と牽連せり、北セレベス「半島」は特に「ミナハツサー」地方の山地が卓越せる「コーヒ」の生産地方として稱せらる、茲には歐洲の勢力は極めて滑かに何等の抵抗なしに侵入して確固なる根柢を下ろせり、回々教は毫末も侵入の痕跡を認めず、唯「キリスト」教のみか偉大の勢力を以て獨特に「ミナハツサー」の人民を支配するを見たり、是れ蘭領東印度中稀に見るの現象にして亦實に歐洲文明の一大成功と言ふべし

(五)「モルツケン」群島

西方に於ける瓜哇の如く「モルツケン」は、東方馬來群島上に於て中古史及近世史の集點と爲れり、古代に於て肉荳蔻及丁香の貿易が未だ外國船を其沿岸に誘はざりしときに於ては「モルツケン」群島の名亦全く顯はれざりき、唯各部落が所在に獨立し互に鬭争して時々海賊を「セレベス」及「ニューギニヤ」に出沒せしめたるのみ、香料貿易の發達は忽ちに此地方を發展せしめたり、此

地方に於ける最も古代の國家は「ハルマヘラ」の北半島中の「チロロ」なりとす、支那の勢力は「モルツケン」群島上には其影響を及ぼすこと甚だ僅少なるは特に注目すべき事實にして、十五世紀前には「モルツケン」の名稱は支那史中に殆んど認められざりしを以て之を推すへし、「ポルトガル」人か此地方に來りしときは已に「テルナート」及「チドール」の二國存在せり、兩者は元と小なる島地方より成立し互に接近して相争へり、其住民中最も古きは「アルフール」人なり、「テルナート」に關しては吾人は千三百二十二年に於て其第七世の支配者か其位に即きたるを知れり、此時より「ジャワ」人及「アラビヤ」人は移住し來れるものゝ如し、「テルナート」及「チドール」は純然たる海岸國及島國にして、「ハルマヘラ」及「セラム」に對して其所領を擴張せんとしたることなかりき、其勢力は全く香料貿易の上のみ存したるを以て、兩國の「スルタン」は「ポルトガル」人の好意を得んとするに熱中し此競争に於て「テルナート」が勝を占むるや、「チドール」の「ズルタン」は爾來其腕を西班牙に投げたり、「スパニヤ」は當時始て「モルツケン」群島に顯はれたるものなり

和蘭人は始て一千五百九十九年に「モルツケン」群島に現はれ、「バンダー」島に小移民を爲せり、爾來半世紀を経過し香料貿易の利益を殆んど其掌中に占握せり、「テルナート」及「チドール」の「スルタン」は「セレベス」及「ニユグイニヤ」の海岸の一部を支配し本來の香料島たる「アムボイナ」及「バンダー」島をも其支配の下に置けり、一千六百五年以來、和蘭東印度會社は香料貿易の獨占上香料を各島の自由耕作させは、或は生産の夥多と爲り或は品質の不良を生ずるを以て特に其生産地を制限し、會社が指定したる地域外には其耕作を禁止するの主義を採れり、此制限耕作の實行は其最初に於て非常の困難ありしに拘はらず會社は兵力を以て之を強制し其監督は頗る殘酷を極はめたり、即ち禁耕地域内の香料植物の根絶、一千六百二十一年に於ける「バンタ」人の殺戮の如き其一例なり、然れども種子の根絶は難事にして人力に依らず時には鳥類又は風力に依り自然の種子の繁殖行はるゝを以て、會社は其禁耕地域内に特に武力を備へたる監視團を派遣し一木一草も之を刈盡して其存在を許さず、之か爲には土人の上に強硬なる壓迫を加へたり、此の如くして

會社は香料貿易獨占の目的を貫徹し其貿易上に於て莫大の利益を收めたるも、其住民の上には實に可憐の慘狀を齎らせり、一千八百十年英國が「モルツケン」を占領するや此強制制度を廢止して其住民を蘇生せしめたるも、再び其蘭領に恢復せらるゝや稍や緩和せられたる形體の下に獨占制度再興せられたり、其強硬なる監視團は一千八百二十四年より廢止せられ、一千八百七十三年に於て始めて強制耕作制度の全廢を見、爾今は完全なる自由耕作及自由賣買制を復せり、モルツケン群島に於ては其小なる島嶼の上に唯香料貿易に關し波瀾多き哀史を有するの外は其主なる島嶼は永く世人より見捨られ全く未開の天地に屬せり

本論

第一章 蘭領東印度の地理概要

第一節 總説

蘭領東印度の地理に關しては主として一千九百七年發行「ウイリヘルム、ジーベル」氏世界地理、一千九百九年發行「ウイリヘルム、ウツルツ」氏北スマトラ報告、一千九百四年發行「ニューウエンフェイス」氏「ボルネヲ」報告、一千九百二年發行「ギーゼンハーゲン」氏瓜哇及スマタラ旅行記、一千九百六年發行「モントグラース」氏南方亞細亞旅行記等に依り其概要を擧ぐるごとくせり

馬來群島は亞細亞州の最南部に在り亞細亞大陸と濠州大陸との中間に介在し印度洋、南支那海及太平洋に涉り散在點布する列島なり、大小諸島合計二百三萬平方キロメートルの面積と四千五百萬人の人口とを有す、之を大別して東部馬來群島、中部馬來群島及西部馬來群島との三と爲す、東部馬來群島とは「バンダ」

ル「ハルマヘラ」等の「モルツケン」群島及「ヒリツピン」群島を云ふ、中部馬來群島とは「ボルネヲ」「セレベス」及「サンギ」島附近を云ふ、西部馬來群島とは「スマタラ」「ジャワ」「バリ」「ロムボッタ」「ズムバワ」「フロレス」「ズムバ」「チモール」等の小「ズンダー」諸島を云ふ、以上の馬來群島中「ヒリツピン」は米國の領土、「チモール」の東半部は葡萄牙の領土、「ボルネヲ」の東北部は英領に屬し、其他の諸群島は總て和蘭の領土とす所謂蘭領東印度とは蘭領に屬する馬來群島を總稱するものなり、蘭領としては尙ほ此外に「ニューギニア」の西半部、「アロー」群島及「メルヒール」島等を有するも此三者は大陸の分界上濠州に屬するものとし亞細亞州の外に計算せらる、元來亞細亞州と濠州との分界は極めて不明にして、「バリ」島より「ニューギニア」島に至るの諸島の分別は全く自然の地理的分界を認めず唯人爲的に分界を爲すのみ、馬來群島は北方南支那海に面するものは「ボルネヲ」及「ヒリツピン」の二者にして、其他は南方に於て印度洋及太平洋の合する所に散在蜿蜒して亞細亞大陸と濠州とを點綴的に連絡するものなり、其各島の間自ら數多の小海を成立せり其主なるものを擧れば東北の方「ヒリツピン」と「ボルネヲ」の間には「ズル」海あり、其最深の海深

四千三百メートルを有す中央「ボルネヲ」と「セレベス」の間には「セレベス」海あり、其最深の海深五千メートルを有す東南の方「モルツケン」「チモール」及「ニューギニア」の間には「バンダー」海あり、其最深の海深五千三百メートルを有す南方は直に太平洋に接し、西方にありては瓜哇と「スマタラ」の間に「ズンダ」海峡「スマタラ」と「マライ」半島との間に「マラッカ」海峡を爲し印度洋、太平洋及南支那海を緩やかに接合す、蘭領東印度の氣候は全く赤道附近の熱帶地氣候にして四時殆んど同一の温度を保ち且一般に高き温度を有するも、其高温氣と低温氣との温差極めて小なり而も其四圍は海洋に依り繞流せらるゝか爲め自ら調和せられたる海洋的氣候を有し、四季輕風袂を拂ひ他の熱帶に於ける如き苦熱を知らず其平均温度は攝氏の三十五度以下二十七度以上なりとす、雨量は概して熱帶に多く温帶に少く大陸の内地は降雨に乏しく海洋の沿岸は降雨に富むを常とするを以て蘭領東印度は一般に雨量に富み亞細亞大陸中の「トラン」「イラン」「北西印度」「アラビヤ」の如き雨量少き地方は降雨量二百ミリメートルを超へず、黒龍江より印度河に至る亞細亞の東岸及印度の大部、黄河以南の支那等は降雨量尙ほ六百ミリメートル

に過ぎず、日本、南支那、南西印度度及ヒマラヤ地方の如き湿度多き地方に在りても雨量二千、ミリメートルを超へずと雖、獨り蘭領東印度は其雨量更に一層多くしてスマタラの海岸は四千五百、ミリメートル、瓜哇の内地は五千、ミリメートル、其他の島嶼亦三千、ミリメートル以上に上ほれり、亦以て其湿度の一般に高きことを知るへし而して北方一帯の諸島は秋冬二季を降雨期とし、春夏の二季を乾燥期とす南方一帯の諸島は夏季のみを降雨期と爲せり

蘭領東印度は其氣候の關係上頗る森林及草野に富む、其森林は所謂熱帶地森林にして前印度及後印度の西方地方と共に同一林系に屬す、熱帶地林の特性は其氣候が高熱にして湿度に富むを以て椰子科の植物の大繁茂を見るを常とす、亞細亞大陸に於ては森林は三千、メートルの高所を限度とするも蘭領東印度に在りては四千、メートルの高所尙ほ森林の存在を認め、甚しきは六千、メートルの高所尙ほ亦森林の存在するものあり

蘭領東印度に於ける植物界及動物界は概して熱帶地系にして濠州系と印度系及東亞系との中間に在りて其連絡を爲すものなり、即ち植物に在りては有用植

物に富み、マンゴー、マンゴスチン、ドリヤン、バナ、等の美果を有する植物、砂糖、米の如き重要食料植物、丁香、肉荳蔻、胡椒等の香料植物、椰子、檳榔子、ナゴ、籐等の椰子科植物、チーク、白檀、黒檀、鐵木及竹等の建築用材、ゴム、煙草、コーヒ、ココア、キナ等の特産物を出す、動物に在りては其陸上に於て虎、鹿、猿、狸、猪、牛、馬、極樂鳥、孔雀、鸚鵡の類、其海上より鯨、鯨、鯨等の青色魚、眞珠貝、鼈、甲龜、海藻等を産出す、住民は種々の混合人種あるも其黒色なる古代住民を除くときは主として馬來人より成るものとす、而して其馬來人中に純粹の馬來人と白人、黃人、及黒人との混血を有する馬來人との二種を存す、馬來人は其居所に依り東、西、南、北及中央の五種に分別す、西馬來人とは馬來半島、スマタラ、ボルネオ、ジャワ、バリ、ロムボック、ズムバワに在るものを云ひ、中央馬來人とはセレベス及フロレス等に在るものを云ひ、東馬來人とはチモールよりモルツケン群島に在るものを云ひ、北馬來人とはヒリッピン群島に在るものを云ふ、其馬來人の文化は種々あり例へば其瓜哇に於けるダヤック人、東部諸島に於けるアルフル人、の如き極めて未開なる野蠻人

に屬するか如し、馬來人の總數は四千五百萬人を超ゆ、其瓜哇、マトウラ島に在るものは二千九百萬、ヒリツピンに在るものは七百萬人、スマタラ諸島に在るものは三百四十萬人、セレベスに在るものは二百萬人、ボルネヲに在るものは百三十萬人、其他の島嶼に在るものは二百二十萬人を算すと云ふ、印度人は古代より馬來群島上に文明と宗教とを齎らせり、其現在數は一萬人を超ゆるもの、如し「アラビヤ」人は中古以來馬來群島の西方諸島に貿易を行ひ且回々教を宣布せり、其現在數は二萬四千人を超へり、支那人は古來馬來群島に來往し主として群島内の商權を占握し、其現在數は五十萬人の多きに上ほれり、歐米人は十六世紀より馬來群島に現はれ、其現在數は尙ほ十萬人を超へたり、其内七萬六千人は和蘭人にし、て蘭領殖民地に現在す、スペイン人及アメリカ人は、ヒリツピン島上に現在す、獨乙人は蘭領殖民地に在るもの千二百人に及へり、馬來群島の人口密度を舉れば、其馬來群島全島の總平均は一平方キロメートルに付二十二二人なるも、其中蘭領印度に屬するものは二十四人、米領ヒリツピンに屬するものは二十五人に當る、尙ほ細別すれば、瓜哇に在りては一平方キロメートルに付二百二十九人の多

きに達し、バリー及ロムボックに在りては百人に達するも、モルツケン群島及ボルネヲに在りては僅かに二人を超へず、スマタラに在りては七人、セレベスに在りては十人、チモールには十六人を算ふるに過ぎず、故に瓜哇は馬來群島中人口最も稠密にして、群島總人員の七十五プロセントを占有せり、馬來群島は今や其全部を舉げて、歐羅巴及米國の領土に屬せしめ、全く其獨立を失へり、即ち、ポルトガル人及スペイン人は、一千五百年以來馬來群島に其勢力を扶植し、スペイン人は一千五百二十年より一千八百九十八年に至るの間、ヒリツピン群島を領有せり、ポルトガル人は一時馬來群島に其勢力を占めたるも、一千六百年より其領土の大部を和蘭人の奪ふ所と爲り、爾來僅かにチモールの東半を保持するに過ぎず、英國は一千八百八十年以來北部、ボルネヲを占領し、米國は一千八百九十八年以來、ヒリツピン群島を其領土に編入せり、其以外の馬來群島は舉げて皆蘭領に屬せり、左に馬來群島中に各國が領有する所の面積、人口及人口密度を舉げん

領有地別	面積	人口	人口密度
蘭領東印度	一、五二〇、六二八 (平方キロメートル)	三七、四九四、〇〇〇 (人口)	二四・七 (人口密度)
英領ボルネオ	二〇四、八六〇 (平方キロメートル)	六七八、〇〇〇 (人口)	三・三 (人口密度)

葡領「チモール」
米領「ヒリツピン」

一六、二四八
〇八、九〇〇
二九六、三二〇
二、四三〇、〇〇〇

二〇〇、〇〇〇
七、六三五、〇〇〇
二、六三〇、〇〇〇

一・二・三
二五八

蘭領東印度は之を分ちて瓜哇「スマタラ」ボルネオ「セレベス」モルツケン「及小」ス
ンダ「島」とす瓜哇は即ち其中心にして其他の諸島は之に従属す左に其各島に於
ける地理の概要を畧述せん

第二節 瓜哇島

瓜哇は蘭領東印度の中樞にして和蘭は之を本據とし其馬來群島に於ける領土
を總轄せり故に蘭領東印度を知らんとするものは先づ瓜哇に著目すること
要す瓜哇は「マドウラ」島と共に十三萬平方キロメートルの面積を有す瓜哇は馬
來群島上人口最も稠密にして一平方キロメートル平均二百三十人の人口を有
せり十九世紀の始には瓜哇の人口は僅かに四百萬人を超へざりしに、一千八百
五十年には一千萬人に増加し一千八百九十五年には二千五百萬人に上ほり遂
に二十世紀の始には三千万人に達せり其開發の盛なるは推して之を知るへし、

瓜哇は西は「ズンダー」海峡に始まり東は「バリ」海峡に達し其延長實に一千〇六
「キロメートル」を有し其南北の幅員は最短二十「キロメートル」最長七十「キロメー
トル」を有する細長き島嶼なり火山脈は其島の中央部を横断し現に活動する火
山「ゲダー」二千九百六十「メートル」「セントール」二千二百四十「メートル」「スラマート」
三千四百三十「メートル」「メラピー」二千八百七十「メートル」「クロエツト」一千七百三
十「メートル」「スメロー」二千七百三「メートル」「ランガー」二千七百二十「メートル」「ラ
マガン」千六百四十「メートル」「イドゲン」三千三百三十一「メートル」等を有する世界
に稀有の島火山國なり瓜哇の人口密度は嚴格に云へば一平方「キロメートル」平
均二百二十九人あり固より二三の場所には三百人以上に上ほり又内地に於て
は百人以下に下るものあるは勿論なり瓜哇に於ける住民は土人たる馬來人を
主とし其他の外國人中に在りては支那人最も多く歐人之に次ぎ「アラビヤ」人及
印度人之に次ぐ日本人は極めて少し即ち最近の調査に依るに馬來人は三千万
人に達し支那人は三十萬人歐人は六萬五千人「アラビヤ」人二萬人印度人三千人
以上日本人數百人を有せり

瓜哇の首府は「バタウヤ」にして蘭領東印度總督府の所在地なり、一千六百十一年和蘭人に依りて創設せられ蘭領東印度の中心を爲し爾來大に發展して一千八百年には其人口十五萬人を超へたりしも、馬來半島に於て英領「シンガポール」の勃興するや「バタウヤ」は大打撃を被むり、立ちに其人口を半減し僅かに七萬五千人を保留せり、今や形勢を挽回して人口十二萬を數ふるに至れり、其内五萬五千人は支那人、七千人は歐人なり、「バタウヤ」は上下の二區に分つ、下區は「バタウヤ」の下方一帶の廣大なる舊市區にして市廳、教會、銀行、税關、土人監獄、土人病院、會社、領事館、大商店等の建物存在する般盛なる市街にして、主として支那人、土人「アラビヤ」人の住地なり、上區は主として歐人の住宅に利用せらるる新市區にして、清涼なる庭園、美麗なる邸宅、宏壯なる官公衙を以て充たし、道路は廣濶、「タマリンドウ」の竝木鬱蒼せる熱帶地好適の清雅なる市街なり、蘭領東印度總督府の官衙及官舎は概ね茲にあり、「バタウヤ」は政治上の中心なるも商業地としては蘭領東印度中第三位を占むるのみ、「バタウヤ」の東方九キロメートルの地に「タンジョンプリオーク」港あり是れ「バタウヤ」の前市にして鐵道及運河に依り「バタ

ウイヤ」と接続せり「タンジョンプリオーク」は近年の築港に係かり港内水深く棧橋、倉庫其他海陸連絡の設備頗る完全し瓜哇第一の良港なり、「バタウヤ」の南方數時間にして海拔三百メートルの高所に「ブイテンツオルグ」あり此地は一千七百四十六年以來蘭領東印度總督の住所と爲り、宏壯美麗なる總督官邸と共に世界に名あるの熱帶地植物園を有せり、此植物園は一千八百十七年に創設せられ一千八百八十年以來博士「メルヒール、ドループ」に依り完成せられ、世界に冠たるの公評あり之を英領熱帶地植物園の冠たる印度「セイロン」島の極樂公園に比するに俗人の眼よりすれば外形上の美に於ては格別の差なきも、植物學者の見地よりすれば其内容の豊富にして且貴重なるは同日の比にあらず、實に世界の植物學者の好研究所にして獨乙國の如き官費を以て常に學者を茲に派遣せりと云ふ「メラバヤ」は東部瓜哇に於ける最盛の都會にして瓜哇第一の貿易港なり其人口は十五萬人を超へ其繁盛「バタウヤ」を凌ぎ蘭領東印度中の冠たり、其内支那人二萬人、歐人一萬人、「アラビヤ」人七千人を有す砂糖及「コーヒー」の大輸出地にして亦煙草及椰子實輸出地として名あり「サマラング」は中央瓜哇の北岸の貿易

港にして瓜哇に於ける第二位の商港なり「サマラング」は「サマランク」河の河口の
 濕潤にして不健康なる地方に於ける舊市なりと雖中央瓜哇の重要な貿易場
 にして「コーヒ」砂糖、藍、チーク材の輸出を以て有名なり人口八萬四千人あり其内
 支那人は一萬二千人「アラビヤ」人は三千四百人あり「デヲカカルター」は中央瓜哇
 の「デヲカカルター、スルタン」の首府にして「スルタン」及蘭國政府の駐在官の所在
 地なり人口六萬人あり其内四千人は支那人、二千人は歐人なり「デヲカカルター」の
 附近五十「キロメートル」の所に「プロボードル」の大寺院の古蹟あり、是れ瓜哇第一
 の佛寺にして紀元後八世紀又は九世紀頃の建築に係かり其名世界に著はる、「ス
 ラカルター」は中央瓜哇の「スラカルター、ススフナン」の首府にして人口十一萬を
 有す其五千人は支那人、一千二百人は歐人にして「ス、フナン」及蘭國政府の駐在
 官の所在地なり「デヲカカルター」及「スラカルター」の二者は瓜哇の舊土人王の自
 治區にして瓜哇の他の地方と異なり半獨立國の形を備へ頗る特色を有せり、瓜
 哇の氣候は海洋的熱帶氣候にして全市を通して變化少なく、四時常夏なるも輕
 風徐々に來往し氣温善く調和せられ更に苦熱を認めず、一年の平均温度攝氏二

十五度にして「バタウイヤ」の最高氣温五月及十月は二十六度四分、最低氣温一月
 及二月は二十五度三分にして「ブイテンツラルヒ」の最高氣温六月は二十五度五
 分、最低氣温二月は二十四度五分とす、高山には時々結氷を見るも未だ曾て降雪
 を見ず、風位は四時「モンズーン」より支配せらる一年を通して強風又は烈風皆無
 なり、瓜哇は一年を分ちて雨期早期に二大別せらる即ち雨期は北西「モンズーン」
 の時期にして十一月より四月に至る迄とす、早期は五月の交より十月の終迄と
 す降雨量は最も多量にして「バタウイヤ」は稍や少なく千八百二「ミリメートル」な
 るも「ブイテンツラルグ」は最も多くして四千四百二十七「ミリメートル」に達す、瓜
 哇の土人は西部馬來人種に屬す之を細別して二と爲す即ち、一は西部瓜哇の住
 民にして馬來人、瓜哇人及「バッター」人の混血より成る「ズンダー」人なり、一は中部
 及東部瓜哇住民たる瓜哇人にして馬來群島中最も開化せる温順なる土人なり
 とす、土人は半股引を穿ち足は跣にして何物をも穿たず長さ六尺幅三四尺の更
 紗を以て腰部を包み筒袖の上衣を著し頭部には更紗を巻き外出の際は竹帽又
 は笠を冠るを常とす、開港場附近に於ては歐人の感化を受け歐装を爲すものあ

るも例外に屬す、土人は簡單なる竹を以て造り椰子の葉を以て蓋ひたる小屋に住居す其富貴なる土人は歐人と同一なる煉瓦又は石造の家屋を設くることあるも極めて稀有に屬す、土人の食物は頗る簡單にして米、野菜及果實を常食とす魚は頗る其嗜好に適するも獸肉は好て食せず砂糖及酒は椰子科植物の液汁より簡單に製造して其自用に充つるを常とす、土人の宗教は十四世紀以來アラビヤ人に依り全島内に宣布せられたる回々教を主なるものとす

瓜哇は農業的殖民地として蘭領東印度中最も全盛を占む、是れ和蘭人か三百年以來殊に十九世紀の始より其開發に關して最も力を用ひたるに依る現に三百七十萬「ハ」の土地は開拓せられ瓜哇に於ける土地の四十「プロセント」は既墾に屬す、前世紀の中間より著しく「コーヒ」砂糖及藍の産出を増加せり、茶、煙草、綿花の産出は之に次く、一千八百八十年「ブラジル」の「コーヒ」其品質の好良を以て大に勢威を揚げたる以來瓜哇「コーヒ」の栽培は著しく衰退したるも、砂糖は之に反して最も全盛を極はめ二十世紀に至りては百八萬噸の輸出を見たり、「コーヒ」も近來の輸出高は三千八百萬「キログラム」に達せり、「ゴブラ」は馬來群島の重要特産物

にして近年瓜哇島のみの産出四千八百萬「キログラム」に上ほれり、米は瓜哇島何れの地よりも産出し其數量は瓜哇第一の物産に該當するも、瓜哇の人口稠密なる爲め尙ほ其内國消費を満たすに足らずして未だ輸出の目的物たることを得ず、此他綿花、木綿花「コ、ア」、肉荳蔻、丁香、牛皮、錫及「チーク」材等を産出す、瓜哇の輸出額は一千九百四年以來殆んど毎年三億「マルク」に達し、蘭領東印度總輸出額の五十九「プロセント」を占む、瓜哇の輸入額は亦毎年二億一千萬「マルク」に達し、蘭領東印度の總輸入額の六十「プロセント」を占む、瓜哇の地質は鑛山に乏しく鐵「マンガ」ン、水銀及砂金等殆んど見込なし、唯「バンタム」の石炭は稍や價値あり、東部瓜哇「スラバヤ」及「マドウラ」に於ける石油鑛は將來頗る有望なるもの、如し、蘭領東印度の旅行家として有名なる「ワルラーク」は云へり、瓜哇は世界中最も美なる熱帶的島嶼にして旅行者には極めて新しき愉快の好感を與へ、政治家には如何にせは人類は新なる異なる條件の下に最も善く支配さるるやの實例を示すものなりと

瓜哇には古代より印度人來往せり已に耶蘇紀元前に於て印度人の移住あり大

に其文明の影響を被むりたるもの、如し、然れども其古代の歴史は甚た不分明に屬す、瓜哇に關する最古の紀錄は耶蘇紀元後四百年に印度、セイロン島に旅行の歸途、ゾンダ島を訪つれたる支那僧法顯の旅行記録なりとす、當時スマタラと瓜哇とは一國を爲したるもの、如し、法顯の記録に依れば瓜哇には「ブラマ」教行はれたるも未だ佛教の存在を認めざりき、此時代には印度の古代の多神教は瓜哇を始め其附近の諸島に廣く行はれたり、紀元後第七世紀に至り始めて印度の西岸、グゼラートより新なる移住を瓜哇島の上に發見せり、此時より佛教が始めて瓜哇に傳來せしは彼の「プロボートル」の大寺院の古蹟に依り之を證明せらる、此の如く佛教徒をして印度洋上の最も危険なる航海を冒して瓜哇に渡來せしめたるは全く其宗教上の敵愾心即ち佛教と「ブラマ」教との鬭争に歸因するものにして、印度の北西地方に於ける熱心なる佛教信徒が「ブラマ」教の壓迫を免れんか爲新天地に其自由行動を試みんと企てたるものなるを想像せしむ、恐らくは之と同時に同一地方の人民が「カムボチャ」地方に佛教を傳來したるもの、如し、「ペルシャ」及「アラビア」の航海者は第九世紀に於て始めて瓜哇に現はれたり、第十世紀

に至り佛教は其勢力を失して再び「ブラマ」教の隆盛を見たるは當時の古蹟の明に證する所なり、第十五世紀の終に至る迄は「ブラマ」教國の「モヂヲパヒツト」國は瓜哇に於て最も優勢を占め、第十四世紀の半に於ては殆んど瓜哇全島の支配者と爲れり、回々教は第十四世紀より瓜哇に傳來し其偉常なる潛勢力は立ろに瓜哇の住民の上に抜くへからざるの根柢を置き、新に「バンタム」及「マタラム」の二回々教國を創立せしめ終に一千四百八十年には「ブラマ」教國たるの「モヂヲパヒツト」國を亡して最後の勝利を占握せり、爾來回々教は全盛に達し瓜哇の土人を支配する唯一の宗教と爲れり、此の如くして回々教は新に數多の「スルタン」國を設立せり、「ジャガタラ」「ケドウ」及「マドウラ」等之なり、歐羅巴人が始めて瓜哇に到達せるごきに當りては已に「バンタム」「ジャガタラ」「チェリボン」及「マタラム」等の數國は最も勢力を有せり、一千五百二十年に至り葡萄牙人は瓜哇に現はれ其土人と通商を開始せり、和蘭人は一千五百九十六年に瓜哇に現はれ葡萄牙人に代はりて瓜哇に殖民を試みたり、和蘭は一千六百十九年に至り「ジャガタラ」を亡ほし新に「パタウイヤ」を設けて其勢力の中心とせり、爾來土人諸侯を其内攻に依り漸く衰耗

せしめ且其競争者たる英國人の排斥を力めたり、一千六百八十四年には「バンタム」の「スルタン」に迫り其首府を奪略し一千七百年には「チェリボン」を征服し、一千七百四十二年には「バンタム」を全く和蘭東印度會社の節度に服せしめたり、「マタラム」王が一度「マカツサ」人及「マドウラ」人の襲撃に遭ひ和蘭の救援を求めたる以來和蘭東印度會社は「マダラム」を其被保護國と爲し、一千七百五十五年には終に其國を兩分して其一は嫡系に相續せしめ之に「スヌフナン」の稱號を許し其一是傍系に繼承せしめ之に「スルタン」の稱號を與へたり、爾來土人諸侯は總て會社の嚴格なる監督に服従せり、一千八百十一年に至り英國は一時瓜哇を和蘭より奪取せるも一千八百十四年の倫敦條約に依り再び亦之を和蘭に返還せり、爾來和蘭は極力瓜哇の統治に其腦漿を絞りたり其間に最も危険なりしは一千八百二十五年「デゴ」、ネグロ」より始められたる反亂なりしも、一千八百三十年に於て辛ふして之を鎮定し爾來瓜哇は一時其平穩を見ることを得たり

第三節 「スマタラ」島

スマタラ島は「スマタラ」本島其面積四十三萬四千九十六平方「キロメートル」及「スマタラ」附屬島其面積四萬二千二百七十五平方「キロメートル」より成立す「スマタラ」本島は之を六地方に分つ、西部「スマタラ」「ベンケールン」地方、「ラムボン」地方、「パレムバン」地方、東部「スマタラ」及「アチエ」地方是なり其中人口最も稠密なるは西部「スマタラ」にして「パーダング」は其地方の重要輸出港として有名なり、「パレンバング」地方は「スマタラ」の東南地方にして其最盛の市街は「パレンバン」なりとす、東部「スマタラ」地方は「スマタラ」の東部に於て「マラツカ」海峽に面し「スマタラ」煙草の耕作を以て名ある「デリー」地方は其中にあり、「スマタラ」の住民は馬來人、歐羅巴人、支那人、印度人及「アラビヤ」人にして其主なる住民は馬來人なりとす、「パーダング」地方の高地は最も古く開かれたる地方にして馬來人の中心點を爲せり、「スマタラ」の南部「パレンバン」地方に近くに從ひ瓜哇の影響を受くること大なり、「スマタラ」は其附屬島を合併して其面積四十七萬九千二百三十一平方「キロメートル」人口三百四十萬四千人を有す其人口密度は一平方「キロメートル」平均七人にして東方の山地には平均二人なるも西方の平地には平均十九人あり、西部「ス

マタラに於ては其人口百五十萬人を有し全島住民の半數を占む其内パーダ
クの高地には人口最多し支那人はスマタラ島全部に於て十六萬人あり其内半
數は東部スマタラの平地にあり其殘數の十分の四はバンカー及ビルトンに於
ける錫産出地にあり其殘部は西部スマタラ地方にあり歐羅巴人は約六千人あ
り其内五十六プロセントは西部スマタラに在りアラビヤ人は二千七百人あり
其内三分の二はパレンバンク地方の平地に在りアチエー地方はスマタラの最
北部を占む和蘭人は三十年來此地方の土人を制服せんとして大に努力を用へ
り其首府はコーターラジャに於て其重要輸出港はサーバングなり西部スマタ
ラはスマタラの西方一帶の地方にしてパーダングは此地方に於ける白人の居
住地及香料の輸出港として最も有名なりパーダングは人口三萬五千人を有す
其内千六百五十人は歐人に屬すパレンバンク地方はスマタラの東南部を占む
此地方の主要なる市街はパレンバンクにして五萬四千人の人口を有す其内歐
人二百五十人あり東部スマタラに於てはデリー及メーダンはスマタラ煙草耕
作地の中心として最も名ありスマタラは其西岸地方は概ね高地にして港灣に

富むも東岸地方は平地にして極めて濕潤なり西岸には河流の云ふべきものな
きも東岸には水に富む河流多しスマタラの氣候は概して高温にして濕潤なる
平地に在りては甚だ健康に適應せるものあるも千二百メートル以上の高地に
於ては極はめて快適の氣候なりと云ふパーダングに於ては平均温度攝氏二十
六度六分にして其最低氣温は九月二十六度二分最高氣温は五月二十七日二分
ありパレンバンクに於ては其平均温度攝氏二十六度九分にして最低氣温は一
月二十六度最高氣温は五月二十七日二分なりとす雨量は概して十月十二月を
最多とし毎月雨量亦少からず西岸のシバルガーは四千七百六十二ミリメー
トル東岸のダムビーは二千五百五十二ミリメートルパーダングは三千八百二十
五ミリメートルに達せり

スマタラ島は未だ開かざるの寶庫にして森林に富み開拓すべき原野頗る多く
將來經濟上の大發展を見るべき希望を有す其現在に於ける最も重要な産物
はデリ地方に於ける煙草耕作にして一年千五百萬マルク以上の輸出を見たり
之に次ては西部スマタラ及パレンバンク地方のコーヒ耕作にして一年の産額